
Eternal Love 2

月久麻子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E t e r n a l L o v e 2

【Nコード】

N 5 2 6 3 U

【作者名】

月久麻子

【あらすじ】

再びデイの居る世界に戻ってきた廉は喜ぶが、それもつかの間。デイが大国タランフィリアの王女から求婚されていることを知り複雑な心情になってしまう。断れば国同士の戦争が勃発すると聞いた廉は思い悩むが、しかしデイと二人で乗り越えて行こうと決意を固め、その意思を聞いたデイも求婚を断った。二人でいれば乗り越えて行ける、そう信じていた廉だったが、自分を巻き込む嵐は想像以上のものだった。複雑に絡み合い始める過去と現在・・・廉を待ち受けているものは一体何なのか。

第二章：第一話（前書き）

第二章です。前章よりもやや重い内容ではありますが、可能な限り皆に幸せを・・・を信条にアップしていきたいと思っていますのでどうぞよろしくお願いします。

第二章：第一話

デイと再会出来るなんて思ってもみなかった俺はそれ以上に、デイに「愛してる」と告げられ、もう言葉も出なくなってしまった。デイは約束をいくつも守ってくれていたんだ。あの時、デイと契りを結んだ時。俺がデイに「愛してる」と言わないで欲しいと言ったことを今の今まで。

「デイ・・・デイ、俺も。俺も愛してる。誰よりもデイのことを愛してる。」

「レン・・・」

「嬉しい、デイが俺のこと覚えててくれて・・・」
「忘れる訳がないだろう。」

デイの呆れたような口調が俺の顔を起こさせた。デイは口調と同様に呆れた表情を浮かべていた。

俺はもう一度デイから口付けられ、ようやく体を離れた。

「ところでレン、その格好は？」

俺の両手を握り締めながらデイが不思議そうな顔をしている。俺は自分の格好を改めて見てみた。野球のユニフォーム姿だ。そう言えば今日は甲子園で戦ってきたんだった。

「今日が甲子園の初戦だったんだ。それでその帰りだったから。これ、野球をする時の服装なんだ。」

「・・・そんな専用の衣装が用意されるほど凄いものなんだな。」

デイは感嘆の声を上げる。俺は苦笑を浮かべた。

「そんなたいそうなものじゃないよ。スポーツごとに専用のユニフォームってあるし。」

「・・・スポーツ？」

「デイの国も、運動とかしたりしない？走ったり、球をかごに投げ入れたり打ったりとか。」

デイは難しい顔をして考え込んでしまった。どうやらこの世界に

はスポーツの存在がないのかもしれない。

「そう言えば俺、この世界のことまだほとんど何も知らないんだ。」

「これからゆつくり覚えていけばいい。・・・しかし、どうしてレンはまたこの世界へ来られたんだ、世界樹を生む者が二度もこの世界にやつてくるなんて聞いたことがない。」

「・・・そう、なんだよね。俺どうしてこっちへ来れたんだろう。確かに来たいってすごく思ったんだけど。」

スポーツの話はさておき、俺とデイは顔を見合わせて首をかしげた。前回種を生むためにここに来た時は召喚者に呼ばれてきた。今回ここへ来たのも、誰かに呼ばれたんだろうか。でもこんなタイミングよく？

「またライカが呼んだのかな？」

途端、デイの表情が引きつる。考えられないでもないはずだ、だってデイの血を使つたとは言え前回俺を呼び出したのはライカなのだから。

「早急に調べさせよう。」

デイは俺の腕を取ると大腿で歩き出した。

「デイ、どこに・・・」

「城へ戻ろう。」

「・・・でも」

デイとは一緒に居たい。だけど、ついて行ってもいいのだろうか。俺に役目はないはずだ。新しい世界樹はもうあるのだから。

「レンは、俺と一緒に居てはくれないのか？」

「や、違うよ。一緒に居たいよ。」

「だったら何故？」

デイが悲しげな表情を浮かべる。

デイと出会えて嬉しいし、ずっと側にいたい。だけど、心が落ちていくと同時に漠然とした不安が俺の心に湧き上がってきていた。説明がしようないものだけど、何だか落ち着かないんだ。

嫌な予感がするなんて、そんなことを言ってもデイは聞き入れて

くれないはず。デイの態度で俺はそれを察していた。

どう言えはいんだろ。

このままデイについて行ったら俺は何かとんでもないことに巻き込まれてしまうんじゃないだろうか。巻き込まれるのも、デイが一緒なら構わないんだけど。

この予感はい体何なんだろう。

「レン、側にいてくれ。」

「デイ……」

俺は拒否出来なかった。ずっと会いたいと願っていた愛しい人が側にいてくれと言うのを、よく分からない理由でなんて断れるはずがなかった。小さく頷いて見せた俺にデイは満足げな笑みを浮かべ、「愛してる」と額にキスをしてきた。

まさかこの先、前回以上の大事に巻き込まれ俺自身すらも大きな判断を迫られることになるなんて、これっぽっちも思わないままに。

久々にデイの城へと足を踏み入れた。何だか懐かしく感じてしまう。この城にいたのはほんの僅かな時間しかなかったのに。

しかし懐かしさに浸る間もない。城は緊張した空気に包まれていた。ピリピリしていると言った方が正しいのかもしれない。

「デイ、何かあったのか？」

デイの肘をこそつと掴みながら囁くとデイは「大丈夫だ」と笑っただけだった。そのまま俺は以前宛がわれた部屋へと通された。デイもそのまま一緒に居てくれると思っていたのに、デイは用事があると言い俺を置き去りにして部屋から出て行ってしまった。

久々に会えたのだから、もっとゆっくりと話がしたかったのに。

俺はふて腐れながら大きなベッドにダイブして、ごろごろとその上を転がった。

「……デイ、何かあったのかな。」

たぶん、何かがこの国で起こっている。デイは何も言わなかったけど、いくら俺にだって分かる。前に来た時はこんなに空気が張り詰めてなんていなかった。

ここへ来たばかりの俺ですら分かってしまったのにデイはそれを隠した。俺に知られられないことなのだろうか。

仰向けに寝っ転がりながら俺はぼんやりと天井を眺めた。

こんなことになるなんて思ってた。ただ、デイに甲子園に行けた報告をするだけのはずだったのに。

つい忘れてしまいそうになるけど、そう言えば今日俺甲子園で試合してきたんだよな。

楽しかった。あんな経験きつともう二度と出来ない。

楽しいことと嬉しいことが一気にあった日なのに、どうしてこんなにも心が落ち着かないのか、分からなかった。

することもなくてベッドに寝ていた俺はそれまでの疲れもあったせいかそのまま寝入ってしまった。眠りに落ちる瞬間、何かの声を聞いた気がした。

「・・・・ン」

耳元で低い声が何かを言っている。急に夢から現実に戻される感覚。

「レン、起きてくれ。」

「・・・・デイ・・・・？」

何度か瞬きを繰り返してはつきりとした視界にはデイが映る。

「起こしてすまない。話があるんだ。」

目を擦りながら体を起こすとデイが俺の手を引き、ベッドを降りるように促してくる。俺は特に逆らってもせず、ベッドから降りた。

デイは無言のまま俺を部屋の外へ連れて出ると目的を持った強い足取りでどこかへと向かう。

「デイ？どこ行くんだ？」

長い廊下を歩きながら俺は窓の向こうに視線を投げた。外はすっ

かり暗くなっている。こんな夜に呼び出されるなんて、何かあったんだろうか。

「……こんな時にレンが戻ってくるなんて何か意味が……」

「……え、何？」

早口で言ったデイの言葉は俺の耳には届かなかった。聞き返すとデイは真っ直ぐに前を見据えながら掴んでいた俺の手に力を込める。その横顔は青ざめているようにも見える。

「……デイ？」

こんなデイは初めて見る。俺は急に不安が強くなるのを感じた。繋いでいる手を俺も強く握り返す。

デイに連れて行かれたのは城の最上階だった。真っ暗なその場所にデイが一步足を踏み入れると暗闇の奥で誰かが動く気配がした。

「……誰か、いるのか？」

「……ああ。レン、こっちへ。」

デイは誰かがいる方向へと向かう。真っ暗なのによく場所が分かるな、と思っているとその人物の前でデイが足を止めた。ポケットから何かを取り出し、何かを打ち付ける音がする。直後、ぼんやりとした光が直径一メートルの範囲を照らし出した。

「……え？」

「待たせたな。」

「……つたく、俺を待たせるのはてめえだけだ。」

光に浮かび上がったその人物の姿に俺は目を丸くした。あり得ない人物がそこに居たから。

「……え、ライカ？」

「よお、ガキ。久しぶりだな。」

光に浮かび上がったのは深紅の髪の色、間違えるはずがない。この声、この口調。間違いなくそこにいたのはライカだった。

でも、デイとライカは仲が悪いはずじゃ？

「混乱するのは分かるが今は時間がない。話は俺の城に着いてからだ。」

手を差し出され、俺はきょとんとライカの手を見た。そしてデいに振り返る。

「レン、時が来るまでライカの城に居て欲しい。」

予想だにしていなかったデイの言葉に俺は息を呑んだ。

「え？何で？」

「話は全てライカにするように言っている。今は時間がないんだ、レンの存在が見つかったら話がこじれてしまう。」

この時、俺は事態を全く理解出来ずにいた。俺の存在が見つかったらって、一体誰に。それに話がこじれるって、何が。

聞きたくても頭が回らなくて言葉にならない。

一向に動こうとしない俺に焦れたのかライカが乱暴に俺の手を掴み自身の方へと引き寄せる。掴んでいたデイの手はあっさりと離されてしまった。

「・・・デイ？」

「すまない、他に方法がないんだ。必ず迎えに行くから信じて待っていて欲しい。」

デイの口調は徐々に焦りを帯び始めている。

「・・・デイ、俺・・・」

「・・・レン・・・」

掠れたデイの声、間違いなくこの国で何かが起こっている。それも良くないことが。

ここで「分かった」と言えただけの話だ。このままライカに着いていつて後できちんと説明をしてもらえれば納得出来るはず。

なのになんだろう、この嫌な予感。このままデイと離れたらもう会えないかもしれない、そんな予感が肌にぴりぴりとまとわりついてくる。

「レン。」

強く名前を呼ばれると我慢が出来なくなつて、俺はライカの手を振り払いデイの胸に飛び込んだ。俺を受け止め強く抱きしめてくるデイに俺はしがみついた。

「時間がかかるかもしれない、何が起るかも分からないんだ。だが、必ず迎えに行く。」

「・・・ドイツ・・・」

怖かった。理由も分からないままデイと引き離されるのが、怖くて仕方がなかった。

「レン、愛してる。」

髪を撫でられ顔を上げると、少しの間もなくデイの唇が触れてきた。触れるだけのそれはすぐに離れて行き、再び俺はライカに腕を捕まれデイから引き離される。

「いちやつきたいのは分かるが、時間がねえつつってんだろ！」

「デイ！」

「おら、行くぞ。」

強引に腕を引かれ、俺はライカの腕に巻き込まれた。デイは俺を追いかけてこない。

ライカが屋上の淵に足をかけ短く指笛を鳴らし、すぐに俺を抱きこむと躊躇なくそこから飛び降りた。真っ暗な闇にダイブする錯覚を覚えながら俺は次第に遠ざかっていくデイに向かって手を差し飛ばした。デイはいつまでも俺たちを見つめていた。

「・・・つつ！」

軽い衝撃と共に俺の体は何かの上に落ちた。

「そいつに捕まって体を低くしている。」

ライカは俺の体を反転させ、たった今飛び降りた何かにしがみつかせる体勢を取らせる。手に触れるのは動物の毛並みだった。これって、怪鳥？

言われたように俺はそれにしがみつき体をその鳥に密着させる。ライカはすぐさま手綱を手に取り強く打ち鳴らした。

一気に速度が上がり、俺は目も開けられなくなってしまう。

何が起っているんだ、デイの身に。この国に。

デイの態度から深刻な事態なのは分かるけど、その説明が一切ないままに俺はライカに預けられた。それはつまり、俺がデイの側に

いてはいけないってことだ。

でもどうして。

考えても分からない。以前にここに呼ばれた時と同じで、俺には何の情報もない。

どうすることも出来ないまま、俺はデイから引き離されるしかなかった。

第二章：第二話

どれくらいの距離を飛んだのか、突然鳥が飛ぶ速度が落ちた。ようやく目を開けられるようになり俺は鳥が向かう先に視線をやった。次第に近づいてくるのは、デイの国カーミアと同じくらいの大きさの城。

「ライカ、あそこ？」

「ああ、俺の城だ。」

「・・・俺のつて。」

「国主が城に住んでなかったら笑いもんになるだろうが。」

ライカも王様ってことか。全然そんな風に見えないけど。

やがてすぐ側にまで城が近づくと鳥は城の上を旋回するように飛んだ。ライカは俺を乱暴に抱き上げるとタイミングを見計らって飛び降りる。どうしてこう、やること全てがライカは突然で乱暴なんだ。ライカが着地するまでの間、俺は内心毒づいていた。

着地の衝撃はほとんどなかった。結構な高さから飛び降りたはずなのに俺は疑問に思いながら床に下ろされた。

「行くぞ。」

何故無事に降りられたのかと聞く前にぐいと手を取られ俺は引きずられながら城へと引きずり込まれた。カーミアと違ってこの城には人の気配がほとんどない。

「ライカ、説明しろよ。」

どうしてデイの元をはなれなければならなかったのか、それに他にも知りたいことはたくさんある。

「どうして俺はここへこさせられたんだ。」

「お前があそこに居ちゃ都合が悪いからだ。」

俺の腕を掴みながらずんずんと進んでいくライカは振り返りもせず言った。

「あの野郎にとっちゃ、お前が戻ってきたのはさぞ嬉しいだろうが・

・戻ってきたタイミングが最悪だ。」

「だから、何でだよ。最悪って・・・」

ライカはたどり着いた扉の前で足を止め俺を振り返った。

「あいつは今、求婚されている。その相手にお前の存在がばれたらまずいことになる。」

想像もしていなかった言葉に俺は一瞬言葉を失った。

「求婚って・・・」

「タランフィリアという国がある。この辺で一番の大国だ、断るのはまずもって難しいだろうな。」

ライカはこっちの感情を逆撫でするような笑みを浮かべ、扉を開け中に入った。俺も後に続いて中に入る。

「ライカ！」

「話せば長くなる、とりあえず座れ。」

部屋の中央には豪華なテーブルと椅子があり、ライカはそこを指差していた。食って掛かりたい気持ちを必死に堪え、俺はそこから一番近い席に腰を落とした。

「何か飲むか？」

「いらない。」

しかしそんな俺を気にした素振りも見せずライカは棚から琥珀色をした液体の入ったビンとグラスを二つ持って俺の真正面に座った。音を立ててグラスにその液体を注ぐと一つを俺の前に置く。

「求婚ってどういうこと？」

差し出された飲み物なんて見向きもせず俺はライカを睨みつけた。チリチリと胸が妬け、嫉妬している自分に気がついた。

「言葉通りだ、結婚を申し込まれてんだよ。」

「そんなのは分かる、どうしてデイが！」

「あいつは王だ、求婚なぞ腐るほど舞い込んでくるさ。」

俺の小さな嫉妬を見抜いたライカが唇の端を吊り上げた笑みを俺に向け「求婚ごときで嫉妬してたら身がもたねえぞ。」と追加してくる。

「だったら、タイミングが悪いってどういうことだよ。俺がそれとどう関係があるんだよ。」

全うな返事をしてくるライカに俺は自分の中にある嫉妬に羞恥を覚えながらも噛み付いた。するとライカはグラスを一気に煽ると音を立ててグラスをテーブルに置いた。

「お前がただの一般人だったら話はこじれずに済んだんだ。」

一般人？言葉の意味を図りかねて俺は体の力を抜いた。

「お前がどう思っているかは知らんが、世界樹を生んだ者はこの世界では絶対の存在だ。そして、あの野郎もその一人となる。お前たちは、契りを結び世界樹を生み出したんだからな。」

「だから、それとこれとどう関係があるんだよ。」

大事なことに触れず話そうとするライカに俺は苛立った。声を荒げるがライカは気にした様子も見せずまたグラスに液体を注ぎ口をつける。

「・・・世界樹は、必要なんだろ？」

「無論だ。世界樹がなければこの世界は終わりだ、だからこそ。」

「だったら・・・」

「生み出して終わりだったら、誰も世界樹の親になんかなろうとしない。」

「・・・親？」

そう言えば、忘れていたけどライカも世界樹を生ませる為に俺と契ろうとしていた。

そもそもこの世界にとって世界樹は何なんだろう。ただ世界を守る為だけのものなんじゃないのか？でもそれならライカのように生み出す側の人間になることを望む人がいるのはおかしい。

その答えはライカが教えてくれた。

「簡単に言えば、お前を抱いて世界樹を生み出した男はこの世界の王になれるってことだ。そして新たな世界樹が誕生した今それはあの野郎になる。」

知りたかった。俺は知らないことだらけで、自分がどうすればいい

いかも分からないくらい情報がなかった。だから、知りたかった。この世界を、俺の意味を。

少しずつ与えられる知識に俺は混乱し始めていた。

「・・・デイが、世界の王？」

もしかして俺が思っている以上に世界樹はこの世界にとって絶大な影響力を持つているもののだとしたら。ライカの口ぶりでその片鱗がうかがい知れた。

「それが、俺とどう関係があるんだよ・・・」

「・・・丁寧な説明は面倒臭えんだよ。要点だけを言うぞ。」

ライカはさも面倒臭いとはかりに顔を歪め、椅子の背もたれに体を預けた。

「お前と契り世界樹を生み出したあの野郎は今、この世界の王として君臨している。だが、カーミアはお世辞にも大国とは言えない、タランフィリアに戦争を仕掛けられでもしたら・・・世界樹に守られてはいても根本的な武力が圧倒的に違いすぎる。滅びはせずとも壊滅的な打撃を受けるはずだ。そこに目をつけたのがタランフィリアの王女で、同盟を結ぶ条件として自身との婚姻を持ちかけてきた。」

「淡々と説明をするライカの言葉に俺は耳を傾けた。それは確かに俺の知りたかったことだった。デイが今、どんな状況にいるのか。」

「ライカの言葉数は少なかったけれど、必要以上のことは話さず現実を起こっていることをただ告げられることで俺は頭の中を整理することが出来た。」

「本来なら、あの野郎に断る理由はないはずだった。お前が戻って来なけりやな。」

「・・・・・・なんで・・・」

「俺があいつなら、断る理由はない。王女の申し出は諸手を挙げて受け入れる。」

「それはライカの話だろ。」

思わずムツとしてしまったがライカは気にもせず続けた。

「お前が戻って来なけりやあいつも受けてたさ。」

その言葉に冷水を浴びせられたようなショックを覚えた。言葉が出ない。ライカは今、何て言った？

「お前が戻って来なけりや、あの野郎は王女の申し出を受けてカーミアは安泰の一途を辿ることが出来たんだ。だが、もう無理だろうな。」

「・・・デイは、王女と結婚するのか？」

搾り出した声は震えていた。

「俺の話を聞いてたか？もう無理だって言っただろう。あいつは断る。国の安泰を棒に振ってな。」

「・・・え？」

「あいつはお前を取る。馬鹿だとか言いようがない。」

いつの間に空いたのか、ライカがまたグラスに液体を注ぐ。

つまり、デイは俺を選んでくれたってこと・・・だよな。単純に喜びが湧き上がってきた。

「喜ばなよ、ガキ。お前の為にあいつは全てを犠牲にしたんだ。」

俺の内心を見透かしたのか、ライカはトーンを落とした声で俺の意識を引き戻す。

「・・・犠牲？」

「タランフィリアの民は気性が荒く中でも王女は群を抜いている、断りを入れればその理由を必ず聞いてくるはずだ。そして理由を聞いた王女はその原因を潰す。だからあいつは言わないだろう。お前を危険にさらすことになるなら自分が危険に陥る方を選ぶはずだからな。こうやって大事な大事なお前を俺に預けてくるくらいだ。」

ライカに預けられた理由を知り、俺は何とも言えない気分だった。デイは俺を選んでくれた。その為に全てを犠牲にした。それをどう受け取ったらいいんだろう。

デイが引き換えにするものの大きさをこの時の俺はまだよく分かっていなかった。

「きつとあいつは最後まで理由を言わないだろう、するとどうなるか分かるか？」

「・・・分からない・・・」

「面子を潰された王女はカーミアを潰しにかかってくる。国は滅ぼされるだろうな。」

「！」

「タランフィリアが大国なのはそうやってどんどん国を潰し吸収して行ったからだ。王女にとっての望みは世界の王の妻になることで、受け入れられないのならその存在を消すだけ。別にあいつと婚姻を結ばなくても、王女はもうほとんどこの世の王みたいなもんだからな。」

「そんな・・・そんなこと、させられない・・・国が滅ぼされるなんて・・・」

デイの顔が脳裏に浮かび上がる。緊張した城の雰囲気も。だからデイはあんな顔をしていたのか。返事一つで国の明暗が分かれてしまっから。

「お前が俺に預けられた理由は二つある。まず一つは万が一王女に存在を知られた場合、お前に予先が向く可能性が高い。お前がいなくなれば拒否する理由がなくなるからな。」

だから。だからデイは敵対しているはずのライカに俺を預けたのか。でも、どうしてライカに？それなら城のどこかに隠れているだけではないはずじゃ。

「だが、今の話もお前が一般人だったらの話だ。お前が世界樹を生み出した者だと王女にばれると話は更にやっかいになる。」

「やっかいって・・・」

「世界樹の親を殺すことは出来ないからだ。まあ、物理的に殺すことは可能だがそうすると今度は世界の均衡が危くなる。」

つまり、俺を殺すと世界がおかしくなるから殺せないってことな

のだろうか。けどどうして？俺の頭は更に混乱した。俺の混乱を察したライカは呆れた口調で言った。

「自分を生み出した者を殺すような世界を世界樹が守るはずがねえだろ。お前は自覚なんざないだろうが、お前の生死にこの世界の命運がかかっていると言ってもいい。だが、あの王女はどう思うだろうな。自分が求婚している相手が世界樹を生み出した者と相愛で、それを理由に断られる。こんな侮辱はまずない。」

もう俺の考え方とは次元が違いすぎて意味が分からない。こんな話を聞いただけで「はい分かりました」と返事なんて出来やしない。「お前を殺す訳にもいかず、求婚も断られる。大国の王女の面子は丸つぶれだ。」

「面子で、国を滅ぼしたりなんて・・・するはずが・・・」

理解出来ない話の内容を必死で飲み込もうとしながら俺はそれでもライカの言っていることが間違いではないかと願い、請うように言った。

体中の血が下がっていくのを感じながら俺は震える手を何とか押さえようと固く握り締める。

「あるさ。自分の面子は国の面子だ、それできともあの王女は自尊心が高い。断りを入れた次の日には総攻撃でも仕掛けてくるんじゃないか？」

「そんな馬鹿な話ってない！自分の都合で、たくさんの人を危険にさらすなんて！」

デイが求婚を断れば国同士の争いになるのだとライカは言う。国同士の争いってことは戦争ってことだ。そうなればきっと多くの人々が死んでしまう。

「お前の尺で物事を計るなよ。世の中には面子の方が大事な人間もいる。・・・それに、この世界では戦争なんて日常茶飯事だ。」

「・・・戦争が、日常・・・？」

「お前は随分とのんびりした国の人間らしいが、争いが日常の人間もいる。」

「だけど、争いなんてない方がいいに決まってるじゃないか！」

声を荒げる俺に、ライカは笑ってみせるだけだった。

それきりライカは何も言葉にはしなかった。俺もライカを睨みつけるだけで。

この怒りはライカへ向けるものじゃないのは分かっていた。ただ他にぶつけられる物がなかった。

沈黙が部屋に広がる。何の音もしない部屋に、俺とライカの二人だけしかない。

そしてライカが笑みを浮かべながらこう言った。

「お前は自分が原因で他人が争うのが嫌なだけだろう？」

沈黙を切り裂いて、ライカの言葉は俺の心に突き刺さった。

「争いになるのが嫌なんじゃない、自分が原因になるのが嫌なだけだ。」

「・・・違う・・・」

「違うないさ。心のどこかでそう思ってるはずだ。こんなきれいごとばかりを言うのなら尚更な。」

「違う！」

感情が弾け、俺は目の前にあったグラスの中身をライカにぶちまけた。そして、自分の取った行動に呆然としてしまう。

手の中からグラスが落ち、碎ける音がしたのを聞いた。

ライカは液体がしたたるのにも気にした素振りも見せず、黙って俺を見つめていた。俺は全身が震え出すのを止められず、蹲り頭を抱え込んでしまう。

俺はただデイに会いたかったただだ。たったそれだけだったのに、望みが叶えられたかと思ったら途端にこんなことになるなんて考えてもみなかった。

デイが国王じゃなかったら良かったのか。それとも俺が世界樹の種を生む者でなければ？そもそも、この世界に呼ばれなければ。デイと会わなければ。

そうすれば苦しまずに済んだのかもしれない。

蹲ったまま動こうとしない俺に、ライカは変わらない口調で話し始めた。

「もう一つの理由は、カーミアの王の側近たちだ。タランフィリアの申し出を受ければ国は安泰、断る国王がどうかしている。だがあいつは断る、その理由は？」

「・・・・・・俺・・・・？」

震える声で俺は答え、同時に自分の立ち位置をようやく知った。

「そうだ、お前が居るから国王は最高の申し出を断る。だったら、お前がいなければいいだけの話だ。」

だから俺はライカに預けられた。デイは俺を守るために。

カーミアにはもう俺の存在は邪魔なものでしかないから。

「お前は世界樹を生み出した者だ。奴らもお前を殺しはしないだろうが、国王の目の届かない場所へ幽閉なりなんなりしてお前を諦めさせられれば話はそれで済む。」

もう言葉は出ない。あまりの現実と事実には俺は打ちのめされていた。

「だから、最悪のタイミングで戻ってきたって言ったんだ。お前はあいつを追い詰める為だけに戻ってきたようなもんだ。」

ライカは容赦なかった。今デイの身に起こっている事実を述べているだけだったとしても、俺にはナイフで切りつけられているように感じてしまう。

デイを好きなだけなのに。たったそれだけなのに、その気持ちが全てを狂わせていく。

体が動かない。動けない。

「ガキ。」

ライカに呼びかけにも俺は動けず、頭を抱えたまま蹲ったまま。

「・・・・ガキ・・・・、おい・・・・ガキ。」

何度呼びかけられても俺は身動き一つ取れない。そんな俺にライカは盛大にため息をつくときしりと音を立てて椅子から立ち上がり俺から遠ざかるように足音を立てて部屋の奥へと向かう。

「……レン、顔を上げる。」

足を止めたライカが俺の名を呼んだ。

名前を呼ばれた。名前を呼んでくれた。それだけで自分の存在がここにあることを許されたような気持ちになり、俺はゆっくりと顔を上げライカの方へと向く。

「泣くならもつとガキらしく喚き散らせ。」

滂沱の涙が溢れ続け俺の頬を濡らしていて、ライカは声もなく涙を流す俺をそんな風に叱った。

「お前が悪いんじゃない、それだけは確かなんだ。」

「……でも……」

「どうにも出来ないこともある。これからお前がどうするか、どうしたいかで未来は決まる。」

ライカは涼しげに言つと、外へ続くガラス張りの扉を勢いよく開いた。暖かい優しい風が部屋に舞い込んできて俺を包む。

「とりあえず、こいつに慰めてもらっている。」

こっちへ来いと手を差し伸べられ、俺はおぼつかない足取りでライカの元へと歩み寄った。差し伸べられたライカの手を震える手で掴みその場に立ち尽くす。

「おい、こっちへ来い。」

扉の向こうに広がっているのは緑溢れる庭のような場所。ライカは次にそこに向かって声をかけた。すると暗がりの向こうから何かの姿を現した。

「……ジャモン……ジャモン……？」

ジャモンが足音を立てずにゆっくりと俺たちに向かって歩いてくる。

どうしてここに？

ライカに顔を向けると、ただ笑っているだけでライカは何も言うとはしなかった。

「ジャモン……」

縋るように両手を広げるとジャモンは大きな顔を俺に近づけ、柔

らかい毛並みを擦り付けてくる。

「・・・ジャモン・・・」

俺は強くジャモンに抱きつき、懐かしい匂いに包まれながら声を上げて泣いた。ジャモンは尻尾を俺の体に巻きつけ慰めるように優しく俺に顔を擦り付けてくる。

そしてジャモンは俺が抱きつたままの体勢でゆっくりと立ち上がると、尻尾と腕を器用に使い俺を守るように、抱きしめるようにながら再び歩き出した。

遠くで扉が閉まる音を聞きながら俺は、濃い緑の匂いと、優しい風と、ジャモンに包まれ声が枯れるまで泣き続けた。

ただデイを想いながら。

ジャモンは子供をあやすように、時折俺の顔を舌で舐めたり尻尾で顔を撫でて来たりした。いつまでも泣き続ける俺を心配してくれているのか、その動作の全てが労わりに満ちていて俺に安らぎをくれた。

光もない夜の暗闇の中、俺を慰めてくれる全てのものに包まれながらいつしか俺は泣き疲れて寝入ってしまった。

第二章：第三話

「……………」

目覚めたのは光の眩しさと小鳥のさえずる声。そして顔を撫でる優しい感触がしたから。

「…………ジャモン…………？」

うつすらと目を開くと視界いっぱいジャモンの毛皮が飛び込ん
でくる。

そっか、昨日あのままここで寝ちゃったんだ。

「…………ジャモン、おはよう。」

眠い目を擦っているジャモンが俺の顔を覗きこんできた。

「お前ってすっごいあったかいのな。外なのに全然寒くなかったよ。」

「

鼻頭を指先でくすぐってから体を起こすと俺は辺りを見回した。

緑が濃く深い森のような場所、ここが城の中とは思えないくらいだった。

立ち上がり壁際まで歩いていくとジャモンも俺の後ろについてくる。

壁には窓があり、そこから外を覗いてみると窓の外には大きな街が広がっていた。

「イリツィアって、大きな国なんだな。」

カーミアも大きな国だったけど。同じくらいかな。
それよりも大きな国があるんだ。

「タランフィリアって、どんだけ大きいんだろ。」

「この国の三倍はあるな。」

背後から急に声がかかけられ振り返るとライカが昨日と同じ場所に立っていた。部屋と庭の境界線の辺り。

「ライカ。」

「いくつかの国を飲み込んで、その分大きくなった。それも今の王女が統制を取るようになってからの話だ。」

そんな人にデイは求婚をされている。断ったら飲み込まれた国と同じ運命を辿るのかな。

「よく、眠れたか。」

「・・・うん、ジャモンが居てくれたから。でもどうしてここにジャモンが居るんだ？」

しかし俺の問いには答えずライカはこっちへ来るようにと手招きをしてくる。言われるままに俺はライカの元へと歩いていく。

「朝食の準備が出来ている。話は食ってからだ。」

「・・・。」

ライカって俺が聞いたことに答えない時が多いような気がする、なんて思いながら俺は部屋の中へと入って行った。

昨日、ライカと話した部屋の中央にあるテーブルにはすでに食事が用意されていた。それを見た途端、急に空腹を覚える。

「見かけによらず大食らいってのは聞いてある。好きなだけ食べ。」

落ち込んでいても腹が減る時は減るもので、俺は席につくと「いただきます」と手を合わせ用意してもらった朝食に手をつけ始めた。カーミアの料理は少し辛目だったけど、イリツィアの料理は更に辛かった。でもおいしい。俺は手を止めることなく黙々と食事を口に運び続ける。

少し経ってから目の前から呆れたような盛大なため息が吐き出されるのを聞いて、俺は顔を上げた。

「・・・信じられんくらいに食うな。」

「・・・そう？」

「その体のどこにこれだけの量が入るんだ？」

心底呆れているようで、ライカの目は驚きを通り越していた。用意はしたけどまさか本当に平らげる勢いだとは思ってもいなかったみたいだ。

俺はもぐもぐと咀嚼しながら首をかしげた。それでも俺は少ない方なのに。他の部員なんて俺の倍の量を食べる奴だって居た。

「運動部だったからたくさん食べないともたなかったんだ。」

そこで俺はここへ来たのが昨日だと言うことに気がついた。まだ二日目なんだ。すっかり馴染んでしまっていたからすっかり忘れていたけど。

「・・・ウンドウブ？」

ライカは俺が初めてデイに野球のことを話して聞かせた時とまったく同じ顔をしていた。まるで理解出来ないと言ったような。

「うーん、要は・・・もの凄く体を動かしてたってこと。食べないと回復しないだろ？」

「ああなるほど。戦争みたいなものか？」

その返事に俺はつい笑ってしまう。

「そんな物騒なものじゃないよ。決まり事を守って楽しくやるもの。」

「・・・そうか。」

最後まで納得が出来なかったのか、ライカは首をかしげたままだった。

俺はテーブルに用意されていた全ての食事を平らげると「ごちそうさま」と手を合わせ、食器を重ね始める。

「・・・本当に、聞いていた通りだな。お前は。」

ライカがせっせと食器を片付ける俺を見て笑いながら言った。なるほど、俺の取る行動は全部デイから聞いていたのか。

「だが、やっと笑ったな。」

「え？」

ライカは背もたれに預けていた体を起こし俺の方へと前傾姿勢になる。

「笑っている。それだけで案外気持ちは楽になるもんだ。」

「・・・ライカ・・・」

初めて会った時とは比べ物にならないくらい優しい顔だった。最

初は俺を殴ったり粗雑な扱いをしたりする嫌な奴だったのに。

いつからこんな顔で俺を見るようになったのか。

そこで俺は沸きあがる疑問を口にした。ずっと、思っていたことだった。

「ライカはどうしてデイの頼みを聞いてくれたんだ？」

まさしく二人は犬猿の仲のはずなのに。二人が対峙している姿は少ししか見なかったけれど、短い時間ですら分かるほどに二人は互いを嫌いあっていた。

「仲が悪いんじゃないのか？」

それなのにデイの頼みを聞き入れて俺を預かったりするなんて。誰だって疑問に思うはずだ。

「よろしくはないさ。今だってあいつが自滅してくれるのを待っているくらいだしな。」

「・・・だったらどうして。」

ライカの言葉に俺は更に疑問を深める。俺だったらそこまで嫌いな相手に協力なんて出来ないと思う。

「あいつに貸しを作っておくのも悪くないだろう？」

ライカはそう言ったけれど、俺にはそうは思えなかった。ライカは明らかに自分を危険な立ち位置にしている。まだ俺の存在はタラシフィリアには知られていないけど、もしバレたりしたら否が応もなく巻き込まれるのは必至だ。

「本当にそんな理由で？」

「それ以外に何がある。俺はあいつが嫌いなんだ、もうずっとな。」
ライカは唇の端を吊り上げて、見慣れた嫌な笑みを浮かべて見せた。

突き落したり、慰めたり。ライカは一体何を考えているんだろう。興味が頭をもたげ、俺は口を開こうとした。けれど聞く前にライカが席を立ち部屋から出て行くこうとする。

「ライカ！」

「何だ。」

「どこに行くんだよ。」

「・・・お前と違って俺は色々忙しいんだよ。ガキの相手なんざしてられっか。」

今度は突き放された。まあ、ライカも王様なんだから忙しいんだろうけど。

ライカはそのまま部屋を出て行ってしまい、俺はライカが出て行った扉をしばらくの間ずっと見ていた。

満腹になって、昨日も一晩ちゃんと寝て、心が落ち着いていた。昨日よりずっと心は冷静だ。俺は昨日ライカから聞かされたことを考え始めた。

デイを好きな気持ちは変わらない。でもそれがデイを苦しめると言うのなら俺はいなくなった方がいいのだろうか。

そうすれば少なくとも戦争になったりはしないのかもしれない。

「・・・デイが好きなのを、諦めるってこと？」

俺にそれが出来るのかな。こんなにも好きなのに。

考えても考えても、それは選べないような気がして俺は考えるのをやめた。

今こうして一人で考えていたって答えなんか出ない。

俺は満腹な腹をさすってから立ち上がった。無性に体が動かしなくて仕方ない。

ふとベッドの上に視線をやるとそこには俺のカバンが置いてあって、近づいて中を見てみるとボールとバットとグローブが入っていた。まあ、中身が変わっているなんてことはないんだろうけど。

カバンの横にはいくつかの服が置いてあった。これを着ろってことなのだろうか。手に取って広げてみると動きやすそうな服だったので、俺は着ていた服を脱ぎそれに着替えた。

そしてカバンを持って部屋を出ようとした所で一度振り返る。

「ジャモン、ちょっと出かけてくるな。」

声を上げると遠目にジャモンがこちらを向いて、そしてまた地面に寝そべるのが見えた。相変わらずマイペースな奴だ。笑いながら俺は部屋を出た。

長い廊下が左右に広がっていて、とりあえず俺は左へと歩き始める。ずっと歩き続けると先に階段を見つけたので行ける所まで降りた。その間、誰にも会わなかった。

この城にはライカしかないのかな。そう思ってしまう程に静まり返っている。

一階にたどり着いたのか広間に出ると反対側の壁に大きな扉があったので俺はそこから外に出た。きちんと慣らされた地面が広がる何もない場所。

「・・・何するとこなんだろ。」
でも丁度いい。

呟いて俺はカバンを地面に下ろし、中からボールとグローブを取り出した。一人するのはちょっと味気ないけど仕方がないと、俺は壁に向かって一人で投球を始めた。

壁がボールを弾く音が何もない場所にこだまする。それだけで無心になれる。

やっぱり頭がこんがらがっている時は野球をするに限るな、何て考えながら俺はひたすら黙々と投球練習をしていた。柿崎が居たらちゃんとキャッチボールが出来たのに。

それからどれくらい一人でそうしていたのか、少しずつ息が上がりに始めて体が慣れてきたのを確認してから俺はボールとグローブを地面に置くとランニングを始めた。ダッシュを混ぜながら延々と何周したのか。

「・・・疲れた・・・」

足を止めその場に座り込んだ。空を仰ぐと青い空が広がっていた。

「あー、何か・・・ちょっとだけすっきりしたかも。」

地面にごろりと横になりぼうつと空を眺めていると。

「お前は何をやってんだ。」

どこからかライカの声が聞こえてきた。声のした方を向くと城の三階の窓からライカが俺を見下ろしていた。表情は呆れきったようなそれ。

「あ、ライカ！ごめんー、ちょっと場所借りてた。」

「それはいい。何をしているのかと聞いてるんだ。」

「体動かしてたんだ。なんかしてないと落ち着かなくて！」

声を張り上げているとライカが不意に窓の淵に足をかけ一気にそこから飛び降りた。

「ライカ！……って、……マジで？」

確かに三階から飛び降りたはずなのに、ライカはたいしたことでもないように綺麗に着地するとこっちへと近づいてくる。

「足、何ともない？」

頑丈そうだとは思っていたけどつい心配になって訊ねた。

「は？何がだよ。」

「だって三階から飛び降りたのに……」

「別にあれくらいの高さくらい何てことないだろ。」

それはきつとライカだけだと思うよ、とは言わなかった。

「部屋に居ないからどこへ行ったかと思えば、こんな所で何をやってんだ。」

「何もしてないと嫌なことばかり考えるからさ、ちょっと体を動かそうかなーと思って。」

埃を叩きながら俺は立ち上がる。

「ああ、ウンドウブとか言うやつか？」

「あはは、ちょっと違うけどまあそんなもんかな。おかげでちょっとすっきりした。」

側にあるボールとグローブを拾うとライカは興味津々な感じで手を伸ばしてきた。その手にボールと手渡すと繁々と見入っていた。

「これは？」

「ボール。」

「何をするものなんだ？」

「これを投げて、あっちのカバンに入ってるバットで打つんだ。」
「バット？」

口で説明しても分からないのはディで学んでいたのも、俺はライカを引き連れてカバンに近づくと中からバットを取り出しライカに見せる。

「このボールを少し離れた所から投げて、バットで打って遠くへ飛ばすんだ。」

「……」

説明してもまだ理解して出来ないのかライカが何とも言えない表情をしている。まあ、口で説明したって知らないものを理解するのは難しいよな。

「じゃあさ、ちよつとやってみる？」

「……俺がか？」

「ちよつと付き合つてよ。一人でやつてても味気なかったんだ。」

俺は変な顔をしたままのライカに詳しく説明を始めた。事細かに説明をしていくとようやく理解をしたのかライカが「何だ、そんなことか」とまるで嘲笑うように嫌な笑みを浮かべる。

「いい？じゃあ俺がボール投げるからライカが打つてよ。」

「おう。」

俺は野球シューズに履き替えるとはど良い距離までライカから離れ足元の土を慣らした。ライカが説明した通りの構えを離れた場所でするのを確認してから大きく腕を振りかぶる。

まずは軽く一球。

ライカに向けてボールを投げると何とも気持ちのいい快音を立ててライカがいとも簡単に打ち返してしまった。ボールは弧を描き反対側の壁にまで届いてしまった。

ゆるい球だったからって、これはちよつと。

「おら、そんな球誰だって打ち返せるだろうが。」

「……いや、ライカ才能あるんじゃない？いきなり長打が打てる人って中々いないんだけど。」

カバンからもう一つボールを取り出すと俺はグラブの中でそれをきつく握り締めた。

「じゃあ、次はちよつと本気で投げるけどいい？」

声を張り上げると「初めっからそうしろ！」と怒鳴られてしまった。ゆるい球でも超初心者に見事に打ち返されてしまい、闘志に火がついてしまう。

じりじりと照りつける太陽が甲子園を思い出させる。こんな風に暑くて、埃っぽさが妙に心地よかった。つい昨日のことなのに随分昔のことのように思い返しながら俺はまた腕を振りかぶる。

この一瞬の緊張感がたまらなく好きだった。

俺は短く息を詰めると、全力で球をライカに向かって投げた。

ライカがバットを振る。空を切る音が俺の元に届き、直後ライカの背後でボールが壁に当たる音が響いた。

「・・・やった！」

ライカが空振った。小さくガッツポーズをしているともの凄い形相でライカが俺へと詰め寄ってくる。

「お前、今の球は何だ。」

「・・・へ？」

「何か曲がつたぞ？」

それはスライダーをかけたからなんだけど。説明が難しい。というか、よく球筋が曲がつたって分かったな。よっぽど目がいいんだ。「曲がるように投げたんだから曲がるよ。」

超初心者相手に大人気ないとは思っけど、かけてなかったらたぶんまた長打を打たれていたと思うから。見ていて分かったけどライカのスイングの軌道はボールが落ちる直前までは完全に真芯を捕らえていた。ライカの運動神経の良さにはホント感心してしまう。

「しかし、打てないと悔しいもんだな。これは。」

「だろ。」

「だがお前の腕が良いんだろう。投げようとしていた時の表情なんてまるで別人だったぞ。」

ニヤニヤと笑いながらそう言ってくるライカに俺は思わず真っ赤になってしまった。まさかそんな風に言われるとは思ってなかったからちよつと感動してしまった、のに。

「昨日はあんなに泣いてたのにな。」

「う！うるさい！」

更に顔を真っ赤にしながら俺は思わずライカを叩いていた。昨日は昨日、今日は今日だ。

それから俺たちは二人で野球をして楽しんだ。途中でピッチャーがやりたいと言ったライカにポジションをチェンジしてみると、これがまた見事な剛速球を投げてきて。バットに当てるのが精一杯だった俺はライカに大笑いをされ、かなり悔しい思いをしてしまった。ひとしきり野球を楽しんでから汗をかいた俺は一区切りをつけ、ライカに風呂をねだった。案内された風呂場はカーミアと同じくらいに広くてまたもや温泉気分を満喫してしまう。こんなのんびりしている場合じゃないってのは分かっているんだけど、今は今で楽しむしかないと俺はつつい長風呂になってしまった。

この時どこかで予感をしていたのかもしれない。

これから巻き起こる嵐のような現実には、安息なんて全くないってことに。

第二章：第四話

俺がイリツィアに来て一週間が経った頃、事態が動いたとライカが俺の所へやってきた。

「今日、正式な断りをタランフィリアに入れるそうだ。」

「・・・そう・・・」

それは嬉しくもあり、怖くもあつた。デイの選んだ選択がこれから何を巻き起こすのか想像すら出来なかったから。

それと同時に、デイが俺を選んでくれたことは嬉しいのに心の底からは喜べない自分がいることに俺は気がついていた。

「嬉しくなさそうだな。」

それを見抜いたのかライカが幾分冷めた口調でそう言った。

「嬉しいとか、そう言う問題じゃない。」

本当に断られたくらいでタランフィリアの王女は戦争を仕掛けてきたりするんだろうか。ライカが深読みしているだけなんじゃないのか。どうせなら、そうであつて欲しかった。

俺には何も出来ない。ここに存在しているのに、まるで無いかのように扱われているから。でもそれに不満はない、デイは俺を守ろうとしてくれるんだから。

「まだ戦争が起こらないで欲しいなんてお綺麗なことでも思っているのか。」

「当たり前だろ！だって馬鹿みたいじゃないか！そんなことで争うなんて・・・」

「争いを起こさせない方法ならあるだろう？」

ニヤニヤと笑うライカを殴り飛ばしてやりたかつた。でも、それはもう何度も考えたことだった。デイが王女の申し入れを受け入れたら無意味な争いも血も流れない。

俺の都合と多くの人の生死を天秤にかけるのなら、俺は後者を選びたかつた。

ただ、それを選ぶ勇気が持てない。
どうしてもデイを失いたくなくて。

こんな自分がどうしようもなく嫌だった。

「デイと・・・話がしたい。」

あれきりずっと会ってない。声も聞いてない。自分が何の為にここににいるのか時々忘れそうになってしまつて、これは夢なんじゃないかと何度も思った。

だけど全ては現実でしかなくて。

「それは無理だ。」

「でもっ、結局俺はデイから何も聞いてないんだ。デイの気持ちを、ちゃんと聞きたいんだ。」

俺は今回のことを全てライカから聞いた。デイからは何一つ聞かされていない、だからなのかもしれないけどどうしても今一つ実感が持てないのもあつた。

「そんな気持ちのお前が会いに行つた所で何の意味も無い。会えば、更にあいつを苦しめることになる。」

「・・・俺が、デイを、苦しめる？」

「お前一人を選ぶ為にあいつが犠牲にするものの大きさを、お前はまだ受け入れ切れてない。あわよくば、どうにか万事を収められないか・・・」

「・・・っ」

「全ての人間が幸せに生きられないか、なんて考えてるんだろう？」

それは凶星だった。確かに俺はそう考えている、だけどその何が悪い？

「そもそも、そこを天秤にかけている時点でお前には何もする権利がないんだよ。」

ライカの語調が不意に強くなる。俺は思わず身を竦めてしまった。

「あいつは自分の国の未来を捨ててまでお前を選ばうとしている。それ程の覚悟つてことだ。だがお前は何だ？自分の想いも捨てられず、尚且つ戦争も起こらなければいいと思つている。・・・何の犠

牲も払わず全てを手に入れることが出来るとでも思ってたのか？」

それは正論なのかもしれない。何かを得る為には何かを犠牲にしなければならない。

そんなことは分かっている。

「もしお前が何かをしたいと思い、何かを変えるつもりなら・・覚悟を決める。お前の意思で全てが変わってしまう人間もいるんだ。あいつの元へ戻りたいのならそれを決める。その代わり、何もしないでこのままここにいるのならそのまんまの気持ちでいればいい。」

反論が出来なかった。ライカが言っていることは正しいと、思ってしまった。

自分でもどこかでそれを感じていたから今まで何もしなかったのだ。行動に移せば何かを選ばなければなくなる。分かっている俺にはそれが出来なかった。デイを好きだという気持ちを諦めるなんて、とてもじゃないけど出来ない。でも自分のせいで起こらなくていい争いに巻き込まれ命を落とす人がいるのも嫌なのだ。

全部、全部ライカの言うとおりだ。

俺は全てから逃げて甘えている。

たとえ俺自身が巻き込まれてしまった側の人間であっても、関わってしまった以上は俺にも責任は出てくるのだから。

何かを選び、捨てなければならぬ。

デイがタランフィリアに返事をすることで自動的に俺は多くの人の命を危険にさらす選択を取ってしまうことになる。

自分の想いか、他人の命か。

今日、デイが返事をするというのならその期限はもう僅かしか残っていないはずだ。

「人に惑わされるな。お前がどうしたいのか、何をするべきなのかを考えるんだ。その上であいつに会いたいと言うのなら協力はしてやる。」

「・・・ライカ・・・」

「何を選んだとしてもお前が責められるいわれは無い。誰だってそ

「うやって生きているんだ。」

「……うん……」

ライカの厳しさは優しさだ。きつい言い方をしてくるけど、それは全てのことを考えての言葉だから素直に自分の中に入ってくる。

俺は改めて考えた。

今、自分がどうしたいのか。

その時間はほんの少しのものだった。初めから俺には答えが出ていたのかもしれない。

顔を上げ、俺はライカと目を合わせ言った。

「ライカ、俺をデイの所へ連れて行って。」

俺は守る。デイへの想いも、デイの国の人々も。

「決めたのか。」

「うん。俺は、何も捨てないし何も諦めない。……戦うよ。」

戦う。何をどう戦うのかはまだ分からない、戦争になってしまうのだとしたらそれでもいい。それでも俺は守ってみせる。

「いい顔になった。」

ライカがニヤリと笑みを浮かべた。そして手を差し出してくる。

「連れて行ってやろう。」

「……ありがとう。」

俺はライカの手を取った。

運命の選択をした。もうきつと、戻れはしないだろうけど後悔はしていなかった。

「球を放っていた時のお前の顔は戦う戦士そのものだった、お前なら……大丈夫だろう。」

不意にかけられた言葉に、熱いものが込み上げそうになって俺は唇を噛んでそれを堪えた。

「泣き虫なのに変わりはないがな。」

最後には茶化してくるライカを俺は一度殴ってやった。それから、全力で笑みを浮かべる。

俺はもう泣かない。

立ち向かって行つてやるんだ。

それからのライカの行動は速かった。こうなることが分かってい
たんじゃないかと思うくらい全ての準備が整えてあつたのだ。

「行き先はこいつが知っている。お前は乗ってりゃいい。」

「うん、ライカ・・・ありがとう。」

一人で怪鳥に乗り込みしつかりと手綱を手に巻きつけながら俺は
ライカを見下ろした。

カバンを肩からかけ、俺はライカにお礼を言った。全部片付いた
らちゃんとライカにお礼を言いに来よう。そして色々話がしたい。

「じゃあ、行ってくる。」

「ああ。」

怪鳥が何度か羽ばたくとその場に風が吹き荒れる。ライカの赤い
髪が風に舞うのが綺麗だった。飛び立とうとする俺をずっと見続け
るライカの目がとても優しくくて。

デイのそれと重なる。

前にもこんなことを思った気がする。全く似てない二人なのにそ
の眼差しだけが酷似しているのは気のせいなんだろうか。

俺の思考を振り切るかのように一気に怪鳥が舞い上がりすぐにラ
イカの姿が小さくなつていった。俺はすぐに前を向き体勢を低くし
た。行き先はカーミア、この鳥が連れて行ってくれる。

俺は強い眼差しで前を見ながら歯を食いしばった。

デイ、今から帰るから待っていて。俺の言葉を、気持ち聞いて
から決めて。

たった一人で全てを決めないで。

強く心に思いながら俺はたった一人で戦っているデイの元へ一直
線に舞い戻った。

カーミアに辿り着いたのはすぐだったようにも感じた。実際にはかなりの距離を移動したのかもしれないけど、俺にはほんの僅かな時間でしかなかった。

城の横にある怪鳥が離着陸する専用の場所に鳥が舞い降りると、何事かと側の小屋から男が出てきた。怪鳥の世話をしている男だ。「ごめん！こいつ見ててやって！」

鳥から飛び降り走り出しながら俺は呆気にとられている男に向かって叫んだ。そして向かった先は玉座の間だ。

デイはきつとそこに居る。

長い階段を一気に駆け上り廊下を走り抜ける俺を通りすぎる侍女たちが呆然とした眼差しで見えていたけど、そんなものを気にしている暇なんてない。

やがて廊下の先に目的の部屋の扉が見えた。息をつく間もなく俺はその扉の向こうへと飛び込む。

「デイ！」

足を止め、上がった息を整えようと短い呼吸を繰り返しながら王座を見る。

そこには目を見開いたデイが半ば腰を浮かせるようにしている姿があった。

「レン、どうして・・・」

「話が、あるんだ。」

デイが俺にかけ寄ってきて、強く肩を掴む。

「どうして戻ってきたりしたんだ。」

「話があるから。」

「それは、全てが終わってからでいいだろう。」

「良くないよ。デイ、俺のいない所で全てを決めないでよ。」

肩を掴んでいるデイの手を俺は握り締めた。

「・・・レン？」

眉根を寄せるデイに向かって俺は真っ直ぐに視線を投げかけた。
固く決まった心はこれっぽっちも揺らがなかった。

「デイが俺を守ろうとしてくれるのは嬉しい。だけど、自分一人で決めないで。俺も一緒に決めさせて欲しいんだ。」

デイは明らかに困惑した表情をしていた。俺がこんな事を言い出すなんて考えてもいなかったようだ。

「デイ。一人で何でも解決しようとしないでよ。俺は何の為にデイの側にいるの。」

「レン・・・」

「一人でなんて戦わないでよ。」

俺の言葉にデイの顔が一瞬だけ歪んだ。俺はデイの手を両手で強く握り締めなおす。

「俺も一緒に戦う。デイの守りたいものは、全部俺も一緒に守る。」

「・・・レン」

「デイの大事なものの、俺にも守らせて欲しいんだ。」

額をデイの胸にこつんとくっつけ、繰り返した。

「タランフィリアの王女が何をしてこようと、俺はこの国を守るから。だから、ちゃんと言つて。」

「・・・レ、ン」

「俺がいるから、諦めて欲しいって。ちゃんと言つて。断つて。」

一言一言を、デイに。自分に言い聞かせるように区切って強く言い放った。

「・・・いいのか？」

長い沈黙の後、震える声でデイが言った。顔を上げると顔を歪めたデイがいた。

「レンが思っている以上に辛いことに巻き込むことになる。それでも？」

頭にデイの大きな手が触れ、優しく撫でられる。

「巻き込まれるんじゃない。俺が選んだことだから、デイはそんな風に思わないで。」

「レン。」

「それに、俺の方こそごめん。」

これはずつと胸の中にあつた想いだつた。俺が居なければこんな風にはきつとならなかつた。デイにこんな苦しい選択をさせてしまったのは俺が原因なんだ。

だけど、出会わなければ良かったなんて思えないんだ。

「デイに苦しい思いをさせて、ごめん。」

何も知らない俺を必死に守ろうとしてくれていたデイの心の優しさはどうしようもなく嬉しかった。それと同じくらい、苦しかった。もう守られるだけなのは嫌だつた。

「これからは俺も、デイを守るから。」

「・・・レン・・・」

デイの首に腕を回し抱きしめる。いつもデイにしてもらっているように優しく。すぐにデイの腕も俺の背に回り俺たちは久しぶりに抱きしめ合つた。

温もりがこんなにも近くにあるということは当たり前のことではないんだ。それを痛感しながら俺はデイの首筋に顔を埋める。

「愛してるよ、デイ。」

「・・・俺も、愛してる・・・レン」

この腕を失いたくない。その為だったら俺はどんなことだってしてみせる。

俺は決意した。

第二章：第五話

「・・・なるほど・・・」

涼しげな声がデイの向こう側から聞こえてきたのは丁度その時。

俺はデイの肩に埋めていた顔をそちらへ向ける。

「どれほど王を説得しても無駄だったのがようやく分かりましたね。」

その人物を目にして俺は思わず息を呑む。見たこともないくらい
の美人さんがそこにいたのだ。声からして男なんだろうけど。

「しかし、お二人の時間に浸るのももう少し後にしてもらってもよろしいですか。」

につこりと微笑みかけられ、俺は慌ててデイから体を離れた。

その人はつかつかと俺に近づいてくると目の前で膝をつき俺の手
を取ると自分の額に押し当てる。

「お初にお目にかかります、レン殿。私はナジェイル・リー。王の
側近を務めております。」

「あ、はい。初めまして・・・」

ナジェイルと名乗ったその人は顔を上げると切れ長の目を細め真っ
直ぐな眼差しを俺に向けてくる。この国の挨拶か何かだろうが、そ
う言えば初めてこの城に来た時にデイも似たような仕草をしていた。

俺は至近距離にいるその人をまじまじと見た。藍と銀を混ぜたよ
うな不思議な色の髪が腰までかかっている。目の色は深い青。一見
すると黒にも見えるけど、よく見ると青い色をしている。前から思
ってたけど、この世界の人って顔立ちが整っているというか、美人
が多いというか。デイはかっこいい部類なんだけど、このナジェイ
ルという人は美形だ。兎に角美形だ。こんな美人さんは見たことが

ない。男だけど。

ナジエイルは俺の手を放すとゆっくりと立ち上がり、再び笑みを浮かべて見せた。

「王の心を射止めた方がこんな純朴な少年だとは思ってもみませんでした。」

「ナジエイル、よせ。」

「おまけにどこからどう見てもただの少年でしかない彼が、世界樹を生み出した者だと言われて信じがたくもあります。」

「ナジエイル！」

デイは俺の腕を引くと強い力で自身の腕の中に抱き込んだ。

「レンを前に無礼な口を聞くのは許さん。」

「……申し訳ありません。」

全くそう思っていないような表情でナジエイルは言った。態度と言葉で自分が良く思われていないのは明白だった。

それはそうだ。俺が居なければタランフィリアの王女とデイは結婚してカーミアは安泰になるのにそれを俺が邪魔するから。デイの側近というのなら快く思わないのは当然だ。

「して、レン殿。先程のお言葉ですが。」

「さつき？」

ナジエイルはあくまで微笑みながら何事もなかったかのように俺に語りかけてくる。

「タランフィリアと戦うと申されたでしょう。」

「あ……はい。」

嫌な感じはしないけど、言葉の端々に棘がある。デイもそれを感じ取ったのか俺を抱きしめる腕に力を込める。

「今のお二人を見ている限りあなた方を引き離し、王にはタランフィリアの王女と結婚をして頂くのはどうやら無理のご様子。」

「あ！当たり前だ！」

涼しげに言い放つナジエイルに、俺はつい声を荒げデイの腕にしがみついた。

「王は断り、王女は怒り、戦争は避けられない現実となるでしょう。レン殿、あなたは今、全てを守るとおっしゃりましたがそれはどのようななさるおつもりなのですか？」

「え？」

「戦争は確実に起こるでしょう、あなたはどうかやって全てを守るおつもりかと聞いているのです。」

ナジエイルの言葉に一切の容赦はなく、俺は返答に詰まってしまった。具体的に何かを考えていた訳ではないからだ。ただ、デイー人に負担をかけたくなって。自分も何かをしたくて。

戦争なんてしたことはもちろんない。だけどそれでも守りたいと思ったから。

「・・・それは、まだ・・・でも」

「王には国民を守り抜く義務がある。それを放棄させるのはあなたですよ、レン殿。それを重々承知された上で改めて後ほどお心をお聞きしましょう。」

ナジエイルはデイに視線を向け、厳しい表情を浮かべた。

「王、じきにタランフィリアの使者が参ります。どうぞご準備を。」深く頭を下げるとナジエイルは踵を返し、部屋から出て行ってしまった。俺はその背中を見つめることしか出来なかった。

ナジエイルの言っていることは間違っていない。だからこそ彼の言葉は重かった。

「・・・レン、すまない。」

「デイ・・・」

「あれは、責任感が強くてな。」

「・・・うん、分かっている。ごめん俺、もっとちゃんと考えて物を言わないと駄目だった。」

全てを守る。言葉にするのは簡単なことだけど一体どうすれば俺はこの言葉を守れるんだろう。俺はナジエイルに言われてようやく、自分がどれだけ重たい言葉を放ったのかを知った。

ナジエイルが部屋を出て行ってから俺たちもそこを出て、デイに連れられるまま長い廊下を俺は歩いていった。

「デイ、どこに行くんだ？もうすぐタランフィリアの人が来るんだろ？」

返事の前にここにたどり着けたのは良かったけれど、デイはここかのんびりしているようにすら見えるのは気のせいだろうか？

「ああ。その前に用意をしておかないといけないんだ。」

デイは振り返らずに俺の手を引いたまま前を歩き続ける。それ以上は何だか聞きにくい雰囲気を感じたのでそれきり口は開けないまま、俺はある部屋まで連れて行かれた。

二人で豪華で大きな扉をくぐり、

「……………」

部屋の中にあるものを見て俺は言葉を失った。

所狭しと並べられているきらびやかな衣装の数々にも驚いたけどそれ以上に、ガラス棚に並べられているものが。

俺の見間違いでなければガラス棚の中にあるものは宝石だ。大小色とりどりの宝石が棚中に溢れんばかりに並べられている。壁一面にあるその棚全てがそうなのだとしたらと思うと俺は冷や汗をかいてしまう。

「レン、こっちへ。」

息を呑む俺を気にした素振りも見せず部屋の中へと導くとデイはそこで手を放し、自分はガラス棚とは反対の壁へと歩いていく。そこは壁一面がクローゼットの扉のようだった。

少しの物音を立ててデイがゆっくりとその扉を開く。

「……………」

俺の予想は当たっていた。そこには一面に服がしまわれている。

「…………デイ…………？」

嫌な予感がする。デイの目的が少しずつ見えてき始め俺は思わず一歩後ろへと後退した。

「レンには…………やはり、白が似合うな。」

そう言っていくつかの白い服を手にとるとデイはようやく俺を振り返る。

「何？それ、俺が着るの？」

もう間違いない。ここは衣裳部屋で、俺はこれからデイが手にしている服に着替えさせられるのだ。でも、何で俺が？

「当たり前だ。タランフィリアの使者は王女の代わりの者、正装でなければ無礼だろう。」

「・・・俺も会うの？」

「もちろんだ。レンを会わせなければ納得はしないだろうからな。」
デイの目は至って真剣そのもので、これが冗談なんかじゃないと告げていた。まさか俺までその使者とかいう人に会う羽目になるなんて思ってもみなかった。

特定の相手がいるからごめんなさい、で終わるほど簡単な話じゃないってことか。そもそも国を統治するほどの人たちの結婚つてのがあまり俺には想像がつかないんだよな。

一般人のなら兄貴の結婚式に参列したから分かるんだけど。

「レン。」

強く名前を呼ばれ、俺は観念した。のろのろとデイの側まで近づく、デイはすぐ横にあつた小さな台を指差し「服を脱いでそこへ」と簡潔に言う。そりゃ、着替えるんだから服を脱がないと始まらない。俺は泣きそうになりながら今着ていた服の下着以外全てを脱ぎ落とし、その台へと乗った。

デイは俺にはどう着るのか見当もつかないその服を器用に一枚一枚着せていきながらも、ふとその手を止めた。

そして顔を上げると真っ直ぐに俺を見つめてくる。

「デイ？」

「いきなりこんなことになってすまなかった。」

デイの手が俺の頬に伸ばされ触れられる。

「いいって言ってるだろ、俺が望んだことなんだからデイはそんな風に言わないで。」

「だが、もつと俺に力があればこんなことにはならなかった。」

何の理由もなく求婚を跳ね除けられれば俺を理由に挙げる必要もなかった。デイはそれを悔やんでいた。そんなのデイのせいじゃないのに。

俺は頬に触れているデイの手をそつと包み込む。大きな骨ばったデイの手が俺は好きだった。

「俺は今のデイで良かったと思ってるよ。」

「それは、どう取ったらいいんだ。」

少し複雑なそうにデイが苦笑いを浮かべ、俺はにつこりと笑う。

「だってデイにもつと力があつて、全部自分で片付けられたりしたら俺の出る幕なんてないだろ？もしそうだったら、俺ちよつと寂しかったと思う。」

どんな形でも俺はデイの助けになりたい。一緒に乗り越えたい。

一人でそれをされたら俺は自分がデイの側に居る意味をきつと見出せなかった。

「デイから見たら頼りないと思うけど、俺にも頼って欲しいんだ。」

「・・・レン。」

「だから、今回のことは俺・・・むしろ嬉しいよ。そりゃ、他の国の偉い人に会ったりするのはあんまり得意じゃないけど。俺が居るところでデイの助けになるのならそっちのが断然いい。」

デイの手に頬をすり寄せ、ニカツと笑ってみせた。するとデイは泣き出しそうに顔をくしゃりと歪め俺を抱きしめると胸に顔を埋める。台に立っているから俺の方がデイよりも少し高い位置に視線があつて、俺は初めてデイを見下ろしていた。

急に愛しさが胸に込み上げてきて俺はデイの頭をギュツと抱える。

「レンは強いな。」

くぐもつた声が耳に届いて俺は「そんなことないよ」とデイの耳元で囁いた。デイが一緒に居るからそう思えるだけなんだ。一人じやきつと何も出来なかった。

「・・・レンを愛している。それが何を意味するのか分かっていて

も俺にはレンしか選べなかった。今まで俺を信じてついて来てくれていた国民を裏切って、切り捨てる結果になると知っていても・・・俺にはもう、レンが側に居ないのは耐えられない。」

国王としての責任を投げ出してしまおうとしている自身に、デイは苦しんでいた。同時にそこまで想われていることが嬉しかった。嬉しかったけど、ここまでデイを苦しめてしまったのはやはり自分なのだ。俺は胸が締め付けられてしまう。

「・・・もし、俺が戻って来なかったら・・・どうしてた？」

ずるいことを聞いてしまった。聞いたって仕方のないことだけど、もし自分さえいなければきっとデイは。

けれど、返事は俺が思っていたものとは違っていた。

「戻ってこなくても断っていたよ。レンを愛しているのに他の人間と結婚など出来ない。」

「・・・そうなの？」

「たとえもう二度と会えなかったとしても、俺は死ぬまでレンを想っていた。」

会えたけれど、と小さく呟きデイはゆっくりと顔を上げた。

俺は唇を噛み締め零れそうになった涙を堪えた。少しでも、そうなんじゃないかと思ってしまった自分をすごく恥じた。

ここへ、戻ってこられて良かった。戻らなければデイを一人で戦わせることになっていた。

ああ、だから俺はまた、この世界に呼ばれたのだ。デイを守るために。

「デイ」

デイの両頬を手で包み込みそっと口付ける。デイも俺を抱きしめてくれて、どんどん口付けは深くなっていく。想いが溶け合うよう

な錯覚を覚えながら俺は少しだけ泣いてしまった。

唇を離してから俺たちは互いを見つめ合った。深い灰色の目が優しげに細められ、窓から入り込む日差しに銀髪が照らされ輝いている。

本当なら会はずのない人だった。こんな運命が待っていないければ、きっと自分の世界で人並みの人生を送っていた。出会わないままに生きていっていた。

「・・・俺、ここに来て良かった。デイと会えて良かった。」

「・・・レン」

この人を守るためなら俺は何だってする。何だって捨ててやる。

「がんばろうな。」

待ち受けているだろう戦いは俺の想像なんて遥かに凌駕するものだと思う。

「ああ、がんばろう。」

勝ち負けじゃなくて、ただ守る。自分の守りたいものを。俺たちは互いを守りあうかのように強く抱きしめ合った。

第二章：第六話

着替えを終えて玉座の間に戻るとすでにナジエイルが待っていた。他にも数人の兵士が壁際に等間隔に並んでいる。

全員の視線が俺たちに集まり居た堪れない気持ちになったけど、俺は胸を張ってデイの隣を歩いた。ふとナジエイルと目が合う。その目は驚きに見開かれていて絶句しているようにも見えた。

デイは俺の手を取りながら王の椅子に腰を落とした。俺はその横に寄り添うように立った。ナジエイルが気になって彼に視線を向けるとナジエイルはハツとしたように視線を床に落としてしまう。

俺、何か変な格好でもしているのだろうか。

急に不安になった。デイにされるがまま用意された服を着せてもらったけど、似合っていないだろうことは百も承知していた。だって、すごいんだこの服。

着物とアラブ系の服を足して二で割ったような作りで足元まですっぽりと覆われてしまっている。そしてたぶん生地はすごい上質な物、だって肌触りが全く違う。それに最後に着させられた上掛けに細かい刺繍と宝石みたいなのが散りばめられているんだ。間違いなく高級品。汚さないように気をつけないと。

デイは俺にこれを着せ終えたと満足した顔で「綺麗だ」なんて言っただけどあれは絶対に嘘だ。俺にこんな綺麗な服が似合うはずがない。それに締め付けられて苦しいし。でも正装しなきゃ駄目らしいから、終わるまではこの格好に耐えないといけない。

デイには申し訳ないけど終わったら速攻で脱いでやる、と心に決めていた。

それから少しして部屋に兵士がやってきて「使者の方が参られました。」と言ってきた。デイはそれに頷き、一度だけ俺の手を強く

握り締める。俺も返すように強く握った。

次に扉があげられた時、そこには兵士と一人の男が立っていた。まだ若いだろうその人は兵士に促され部屋の中央まで歩み進むとデイから少し離れた位置で足を止めた。

「カーミアの王よ。長らく待たされましたが返事を伺いに参った。」
低くよく通る声が言い放つと途端に部屋の空気が張り詰めた気がする。上からの物言いに俺は内心ムツとしてしまう。

まあ、タランフィリアはカーミアよりも大国なのだからわざわざ返事を聞きに来てやったって態度なのかもしれない。言われてみれば自国よりも小さな国に対して返事だけをわざわざ聞きに来るのも疑問だ。後でデイに聞いてみると「申し込んだ方が足を運び返答を聞く」のがこの世界の通例なんだそうだ。

「ご足労頂き申し訳ない。」

固いデイの声がそう返事をした。男はそんなデイの声を気にした様子も見せず、真っ直ぐに俺を見てきた。

「返事を聞く前に一つ聞かせて頂きたい。貴殿の横に居る人物は一体なんだ？」

聞かれるとは思っていた。向こうからしてみれば求婚の返事を聞く大事な場に他人が居るのは気になることだろう。俺は自分に矛先を向けられ緊張を覚える。手の平にじんわりと汗が滲みはじめた。

「この者はこの場に必要人物だ。」

「必要？」

「そうだ。簡潔に申し上げよう。私はタランフィリアの申し出をお断りする。」

ザワツと空気がどよめいた。その様子に俺はナジェイル以外にはこの求婚の返答を知らされていなかったことを知った。

「正気か？その返事が一体何を示すのかわかっているのか。」

「無論だ。分かっている。私はこの返事を申し伝えている。」

まさか断られるとは思ってもいなかったのか、男はあからさまに動揺していた。

「・・・その、横にいる人物が着ているものはカーミア国正妃が着るものだとお見受けする。その者はつまり・・・」

「そう、まだ正式に迎えてはいないが私の正妃となる者だ。」

デイの言葉に俺は仰天した。慌ててデイを振り返るがデイは淡々と言葉を続けた。

「この者は私と契り世界樹を生み出した者。もう一人のこの世界の王だ。」

デイの言葉に使者の男は言葉を失った。信じられないと俺を凝視してくる。そして部屋中にいる兵士たちも男と同じような表情で俺を見ていた。

「世界樹を・・・生み出した者だと？まさかそんな馬鹿な・・・」

「嘘を言っただけだ。確かに世界樹を生み出した者が再度この地に足を踏み入れたという前例はない、だがこれは間違いなく真実。心と体を契り合わせた人物がいてはタランフィリアの申し出を受け入れることは出来ない。そう、王女にお伝え頂きたい。」

男はデイの言葉を聞いてもなお、信じられないと。表情がありありとそう告げていた。

その場を沈黙が支配した。誰も言葉を発することが出来ない空気が部屋に満ち溢れていて、俺は一人おろおろと辺りを見回した。

ナジェイルが一人、宙を仰ぎきつい視線で一点を見つめていた。もう取り戻すことの出来ない発言をデイがしてしまったことで、この先に起こることを憂いているからなのだろう。

「・・・分かった。」

男が苦々しい声で言った。

「カーミアの返事、確かに受け取った。だが、その者が世界樹を生み出した者とは簡単には信じられぬ。我が国の王女とてそう思うであらう。何か証明をしてもらえるか。」

証明？俺は男の言い出した言葉に戸惑った。どうすればいいのかわからずデイの手を握り締めると「大丈夫だ」と言わんばかりに優しく握り締め返される。

「証明など必要ない。私の言葉がその証明だ。」

「・・・しかし・・・」

「これ以上言うことは何もない。」

「・・・良からう。その返事に後悔をしてももう遅いぞ。」

「後悔などせん。」

きっぱりと言い切るデイは、それで話は終わったとしても言わんばかりに入り口に立っていた兵士に合図をした。兵士が慌てた様子で入り口の扉を開けると男は俺を一瞥してからマントを翻し部屋から出て行ってしまった。

「・・・デイ・・・」

俺は急に不安に襲われた。男の態度で十中八九戦争になってしまふのはもう明白だった。おまけに正妃とか言われて俺の頭は混乱を極めてしまっていた。

でも混乱した頭でも聞きたいことはたった一つだけ頭にあった。

「デイ、この服って・・・」

「黙っていてすまなかった。その服は代々受け継がれているカーミアの正妃となるべき人間が着るものなんだ。」

デイはさっきまでの固い表情を崩し、苦笑を浮かべながら俺のそう言った。

「正妃って！聞いてたら絶対に着なかったのに！」

「言ったら着てくれないと思ったから言わなかったんだ。」

「着るわけないだろ！デイの馬鹿！」

繋いでいた手を振りほどくとデイはすまなさそうに笑うだけで。

「やはりレン殿はご存知ではなかったのですね。」

遠くから呆れたように放たれた言葉はナジエイルのもの。

「おかしいと思ったのです、それを人前で着る意味を知っていればそう簡単には袖を通さないものですから。」

つかつかとナジエイルが俺たちの側に歩み寄ってくると盛大にため息をついた。

「おまけにレン殿が世界樹を生み出した者であることまで告げて・・・」

・。言う必要などなかったでしょうに。これでレン殿の危険度がかなり上がりましたよ。」

「レンは俺が守る。」

「そういう問題ではないですよ、王。」

子供に言い聞かせるようにナジエイルは呆れ顔のままデイを叱っていた。

「いいですか、そもそもあんな言い方をせずともっと穏便に済ませられる言い方があったでしょう。あれでは戦争を仕掛けてくれと言っているようなものです。」

「断ればどの道戦争になるんだ。だったら少しくらいは鼻をあかしてやってもいいだろう。」

「！」

驚いた。まさかデイがこんな子供っぽいもの言いをするなんて。

そんなデイの反論を聞いてナジエイルが柳眉を逆立てる。そのま
まガミガミと説教コースまっしぐらに言葉の応酬が始まった。

何だかナジエイルと話しているとあんなに大人っぽいデイがまるで子供みたくに見えてきて、俺は込み上げる笑いが押さえ切れなくなってしまうた。

「デイ、子供みたい。」

ついに耐え切れなくて俺は声を上げて笑ってしまった。まるで母親に叱られる子供。大人である二人が、いや主にデイがなんだけど、こんな子供じみた口喧嘩をしているのがおかしくてしょうがない。

「・・・レン・・・」

しまった、とデイがばつの悪そうな顔をした。それがおかしくて俺は腹を抱えて笑った。

玉座の間には笑い転げる俺と、ばつの悪そうな顔をしたデイと、呆れ返った顔をしたナジエイルと、啞然としている兵士達がいた。広い部屋に俺の笑い声だけが響く中、まるでさっきまでの緊迫した空気が嘘みいだった。

「・・・レン、そろそろいいか。」

唸るように発せられたデイの声に、俺は涙の滲んだ目じりを指で拭い「ごめん」とデイに向き直る。すっかりご機嫌を損ねた様子のデイが何だか可愛くてまた顔がにやけてしまいそうになるのを必死で堪えた。

「デイ、ごめん。笑ってる場合じゃないんだよね。」

「その通りだ。」

子供みたいにそっぽを向いてしまったデイの手を俺はそっと掴み笑いかけた。

「じゃあさ、これからどうなるのか、どうするべきなのかを俺に教えて欲しいんだけど。」

使者の男が最後に言った言葉とナジエルの言葉から、きっと戦争は起こってしまうのは推測出来る。そうなれば何も知らない俺は足手まといになるだけだ。それだけは嫌だった。

起こらなければいいけれど、起こってしまうのなら俺は知らないといけない。

「俺、何も分からないから。」

「・・・レン」

戦わなければならないのなら、知らなければ話にならない。

戦争とは何なのか、どういうものなのか。

この国の在り方を。

「・・・分かった。」

デイは少しだけ辛そうな顔をしてから、俺の手を握り締めてくれた。

「レン殿の方がよっぽど大人でいらっしやる。良い正妃をお迎えになられましたね。」

ナジエルがにこやかに嫌味を言うと、デイがまたそれに噛み付きそうになる。それを押し留めて俺はデイを引きずるようにして玉座の間から出て行った。

第二章：第七話

俺の部屋にたどり着くとデイは自分の正装を剥ぎ取り、部屋の中にあるソファの上に放り投げた。その横に乱暴に腰を落とすと背もたれにもたれかかりながら天井を仰ぐ。

「デイ、俺もこの服脱ぎたいんだけど。」

側まで近づいて声をかけるとデイがこっちに視線を戻した。

「脱ぐのか？」

「脱ぎたい。これ、苦しいんだけど。」

胸下から腹にかけて帯がギュウギュウに巻きつけられているんだから苦しいのは当たり前だ。でも自分で着たわけじゃないから脱ぎ方が分からなくて。

「もったいない。」

「？」

「せつかく似合っているのに。」

デイの言葉に俺は頬がカツと熱くなった。着せられた時にも言っていたけど、それ絶対に嘘だ。こんな綺麗な服が、おまけに正妃って言ったら女物ってことじゃないか、それが俺に似合ってるなんて絶対に嘘だ。

「もう！いいから早く脱がしてよ！」

「・・・分かった。」

渋々といった感じでデイは立ち上がると俺の服に手をかけ、ゆっくりと脱がせ始めた。帯が解かれ一気に呼吸が楽になると俺はつい安堵の息をついてしまう。

「もったいない・・・」

脱がすのが心底嫌だと言いたげに、顔をしかめながらデイは一枚一枚俺の服を脱がせていく。けれどその手つきはよどみなく。

「いいじゃん、また絶対着なきやならない機会があつたら着るから。」

出来ればあつて欲しくないけど。

「・・・分かった、レン。約束だぞ。」

最後の肌着を脱がせながらデイが嬉しそうに顔を綻ばせる。俺はと言えば、ようやくきつい服から解放された喜びに満ちていた。

締め付けられないってすばらしいと思う、何て思いながら大きく伸びをしながら、

「デイ、戦争つてすぐに起こるの？」

脱がせた服を綺麗にソファにかけているデイの正面に腰を落として訊ねると、デイは最後の一枚をこれまた綺麗にソファにかけてからその横に腰を落とした。

「いや、すぐには起こらないだろう。向こうも準備が必要だろうし、何より初めに宣戦布告をしなければならんだ。」

「宣戦布告？」

「突然仕掛けるのは基本的に禁止されている。もちろん守らない国もあるにはあるが、タランフィリアは今まで宣戦布告をしなかったことはない。最低限の礼儀はわきまえているようだからな。」

「・・・へー。」

戦争なんて野蛮なものを仕掛けるくらいだからいきなり来るのかと思つてたけど、どうも違ふみたいだ。戦争には戦争のルールがあるなんて、何だか複雑な気持ちになつてしまふ。俺は戦争なんて経験したことがないから知らないけど、地球で起こつてる戦争とかもそんな感じなんだろうか。

それから俺はデイに色んなことを教えてもらった。どんな風に戦争が進められるのか、どんな武器を使うのか、兵士は何をするのか。その戦い方の全てを聞いた。そして終わり方まで。

「ふーん、じゃあ戦争つて言つてもそんな長引くものじゃないんだ。」

「ああ。長くても七日で終わる。」

たぶん、正しくは「終わる」んじゃないくて「終わってしまう」ってことなんだと思う。

タランフィリアの圧倒的な力の前に、戦いを挑まれた国はろくな抵抗もしないまま白旗を掲げるそうだ。戦ったとしても力の差がありすぎて叩き潰されてしまう。下手に抗って犠牲を出すよりは潔く負けを認めて被害を最小限に抑えた方がよっぽどましなのだろう。それにタランフィリアは基本的な戦闘能力が違うのだと、デイは言った。

「どうしてタランフィリアはそんなに強いんだ？」

「分からない。今の王女が王位を継ぐ前は小国で、簡単に戦争をしかけたりする国ではなかったんだが・・・」

だから戦争の期間が短いのに、壊滅的な打撃を受けて滅亡する国が多い。

気分が重く沈んでしまう。俺にはその王女の考えていることが全く分からなかった。戦うんじゃないくて、同盟とかすればいいのに。俺が俯いて落ち込んでしまっていると、デイはいつの間にも用意したのか水差しからグラスに水を注いで口をつけていた。

「あ、デイ。俺にも頂戴。」

喉が渴いていた俺は水だと思いデイに手を差し出した。デイも頷くとグラスの半分まで水を注ぐとそれを俺に手渡してくれて、俺は一気にそれを飲み干す。

「!」

これ、水じゃない！

全てを飲み下してしまってからそれに気がつき、俺は盛大に咳き込んでしまった。慌ててデイが俺に駆け寄り背中を撫でてくる。

「・・・・ドイツ・・・これ・・・なに？」

咳き込みながら聞くと、

「・・・酒だ。」

と返事があった。

「知っていて欲しかったのかと思ったんだ・・・」

すまなさそうに俺の背をさすりながらデイが俺を覗き込む。少しずつ咳が収まってくると今度は体がどんどん火照ってきて、目が回り始める。

「・・・あつい・・・」

「レン、大丈夫か？」

おろおろとデイが俺の様子を伺いながら背中をさする。

「・・・お酒なんて・・・初めて飲んだ・・・」

グルグルと回る視界の中に歪み始めたデイの姿が映っている。その顔は心配そうに歪められていた。

「レン、ベッドに横になるんだ。すぐに水を用意させるから。」

半ばデイに抱えられながら俺はベッドに連れて行かれ横たえられる。すぐにデイが部屋から出て行ってしまい一人部屋に残された俺は、ひたすら回る視界の中でデイを呼んだ。

「・・・デイ・・・デイ・・・？」

ベッドの上に手を這わせデイを捜すがいない。水を取りに行つたと分かつていても、デイが居ないのが寂しくてしょうがなかった。

「・・・デイ・・・」

うつ伏せになりシーツに顔を埋めると涙が出てきた。思考がまとまらない、ただデイは水を取りに行っただけなのに置いていかれた気分になってしまい、後から後から涙が流れ落ちてシーツを濡らす。しばらくすると乱暴に扉が開けられる音がして、こっちにかけて寄ってくる足音がした。その頃になると俺はもうしゃっくりを上げて声を上げて子供のようにわんわんと泣いてしまっていた。

「レン！どうしたんだ！」

それを見たデイが素っ頓狂な声を上げて俺を抱き上げ顔を覗きこんでくる。

「・・・デイ、・・・ろこ、行つてたの？」

「水を取りに行つてたんだ・・・、レン・・・飲めるか？」

グラスに水を注ぎ俺の口に当てて飲ませようとしてくるが、しゃっくりが邪魔をしてうまく飲めず水が頬を伝つて落ちていく。

「レン、とにかく飲んでくれ。薄めないと・・・。」

「・・・のめない・・・。」

「レン。口を空けて。」

「・・・れきない・・・。」

水なんてどうでもいいから側に居て欲しい。俺はもう何も考えられなくて、デイの邪魔をするように胸にしがみつく。すると急にデイの動きが止まった。

「・・・デイ？」

顔をデイの胸に押し付けようとするといきなり顎を強く捕まれ上を向かせられ、薄く口を開かされたかと思うとそのまま温かい何かが唇を覆った。

流れ込んできたのは水だった。口移しで水を飲まさせられているのだと気づいたのは何度かそれを繰り返した後。

「・・・レン、大丈夫か？」

額にかかった髪を撫で上げながら優しくデイが尋ねてきた。

「・・・うん、・・・ヘーキ・・・。」

「本当にすまなかった。」

「も、だいじょうぶ。」

「そうは見えないが。」

苦笑いを浮かべ、もう一度デイが口付けをしてきた。

「今日はもう寝るんだ、疲れただろう？」

ベッドに俺を横たえると離れていこうとするデイに俺はしがみついた。

「・・・レン？」

「いっちゃ、やだ・・・。」

「・・・しかし・・・。」

「やだ・・・」

一人になるのが嫌で、俺はデイにしがみついたまま駄々をこねる。涙が滲む視界でデイが困った顔をしているのが見えた。

「レン、やめるんだ。」

俺の手を無理やり引き剥がすとデイは俺から一步遠ざかった。この時の俺にそれはかなりのショックで、俺はデイに伸ばした手を引っ込めてしまった。

「・・・レン？」

「・・・分かった・・・寝る・・・」

涙声になるのを必死で押し殺しながら俺はデイに背を向けシーツを頭まで被る。

デイの馬鹿。デイの馬鹿。

頭の中で念仏のようにそればかりを唱えながら俺は溢れる涙を止められずにいた。押さえようとしても嗚咽が漏れて、きつと泣いているのはデイにバレバレだ。

「・・・レン。」

声が近くで聞こえ、同時にベッドがギシリと音を立てた。シーツ越しに頭を撫でられる感触がする。

「どうしたんだ？何でそんなに泣いてるんだ。」

宥めるように何度も頭を撫でられながら、それでも俺はシーツの端を掴んで顔を出そうとはしなかった。すると急に強い力でシーツを剥ぎ取られ、デイが俺に押し掛かってきた。

「レン、何で泣く。」

背けようとした顔を、顎を掴まれてデイの方へと向かせられる。

泣き止まない俺にデイは困惑していた。

「レン、言ってくれないと分からない。」

指で流れ落ちる涙を拭いながらデイは静かに聞いてくる。

「だって・・・、デイが行っちゃうから・・・」

「今日は色々あって疲れただろう？」

「でも・・・、俺はデイと一緒に居たいんだ。側に居たい・・・」

もう会えないかと思っていたのにまた会うことが出来て、なのにすぐに離れないといけなかった。それでもまたこうしてデイの側にやっと居られるようになったのに。

今は少しでもデイの温もりを感じていたかった。それだけだった。

「レン・・・だが、な・・・」

らしくなく、デイが口ごもる。

「お願い・・・今日だけでいいから・・・一緒にいて。」

頬を撫でるデイの手に自分のそれを重ね、頬を摺り寄せるとデイは固く目を閉じ何かに耐えているようだった。

「・・・煽らないでくれ。」

「・・・デイ？」

「このまま一緒に居たら、レンを抱いてしまう。」

再び目を開いた時、デイの目の奥には炎が揺れていた。

「それでなくともかなり煽られているんだ。これ以上はもう、我慢が出来ない。」

指先が唇をなぞっては離れていく。何度もそれを繰り返しながらデイは自分の中の欲望を押さえ込もうとしていた。

俺を想って、自分の気持ちを押さえつけようとするデイが愛しい。そう、思った。

「・・・一緒にいてよ、デイ。」

だから、そう言えばどうなるかなんて分かっていた。

デイは一瞬だけ辛そうに顔を歪めたけど、すぐに目の奥に熱を取り戻すと俺に顔を寄せてくる。

「レン・・・」

どうされてもいい。どうなってもいい。デイが側に居てくれるのならそれだけでいい。

俺はデイの首に腕を回し肩に顔を埋めた。頬に触れる温もりが気持ち良かった。

「このまま・・・朝まで一緒に居て？」

デイの体の強張りが緩んだ。そして俺に体重をかけてくる。

「・・・まったく。」

苦笑を帯びた声が耳朵をくすぐった。

「今日は手加減なんて出来ないぞ?」

抱きしめられ耳に送り込まれた言葉に、俺は小さく頷いた。

「いいよ。だって俺、デイの奥さんになるんだろ?」

「オクサン?」

また意味が通じなくて、少し考えてから「・・・正妃ってこと。」と呟いた。

「なってくれるのか?」

まるで閉じ込めるように俺の顔の両脇に肘を突き、俺を覗いてくるデイは嬉しそうに顔を緩める。

「してくれないの?」

「もうレン以外には考えられないな。」

言葉のやり取りがくすぐったくて、俺が笑うとデイが額に口付けをしてきた。

「ね、デイ。」

デイの髪に手を入れて引き寄せるとされるがままにデイが近づいてくる。

「お願いがあるんだけど。」

「・・・ん?」

断言しよう。この時の俺は間違いなく酔っていた、雰囲気ではなく酒に。翌日、正氣に戻って思い出し顔から火を噴く羽目になるのだが、言ってしまった言葉はもう取り戻せず後の祭りだった。

「愛してるとか、好きとか・・・いっぱい言って。」

それに似た言葉に心当たりがあったのかデイは一度真顔になってから、すぐに破顔した。

「もちろん、言われるまでもない。」
それ以上言葉を紡ぐことは出来なかった。デイに深く口付けられたから。

第二章：第八話（前書き）

エッチです。読まなくても次話に差し支えはありませんので苦手な方は飛ばしてやってください。

第二章：第八話

酒のせいですっかり火照っている体にデイのひんやりとした手が這うのが気持ち良かった。いつの間に服を脱ぎ捨てたのか、シーツを剥がれデイの体が折り重なってきた時。

その重さが愛おしく感じて俺は無意識にデイの背に腕を回していた。

口付けの合間にデイは何度も「愛してる」と囁いては俺を覗き込んでくる。頭がふわふわしているのはきつと酔いのせいだけじゃないと思う。

「デイ・・・」

唇から顎に、そして滑り落ちながら喉に唇が触れる感触に俺は体を震わせた。力が抜けてシーツに落ちた手をきつく握り締められて、反射的に握り返すと肩にデイの唇が触れた。

「・・・んっ」

くすぐったくて身を振るとすぐ側でデイの含み笑いが聞こえた。

「レンの体、すごく熱いな。」

俺の体が熱いのはお酒を飲んだからだ。それと、デイの体が冷たいからっていうのもあると思う。火照った体にデイの体の冷たさが心地良くて、俺はうつとりと目を閉じた。

デイの手が俺の脇腹を滑り落ち、唯一身に着けていた下着に触れる。そのままするりと中に入り込み熱を持ち始めていた俺の中心を握り締めてきた。

「んあ・・・」

ゆるゆると扱かれ一気に中心は硬度を持ち、俺は沸きあがる快感に声を上げてしまった。同時に胸の突起がぬるりとした感触に覆われる。

「・・・う、ん・・・」

空いていた手でデイの髪を掴むと、突起に軽く歯を立てられゾク

ツと背筋を何かが這い上がった。

「や・・・、デイ・・・」

下着を取られすっかり裸になった俺にデイが体重を預けてきて、密着した肌が湿り気を帯びてくる。俺の熱が移っていくかのように少しずつデイの体が熱くなってきていた。

「・・・レン・・・」

俺の名を呼んだデイの声が情欲を抑えきれない色を含んでいて、思わずデイの髪を握り締めていた手に力が入る。

「あ・・・デ・・・イ・・・、やあっ！」

急に強く中心を握られ甲高い声を上げてしまった。体が跳ね上がったけどデイにそれを押さえつけられ、更に強く中心を扱かれ嬌声を上げてしまう。

自分でも分かる程に先走りが漏れている。俺の中心を擦り上げるデイの手の動きがどんどんスムーズになって行って、快感がどんどん強くなってくる。

徐々に濡れた音が耳に届くようになってきて、あまりの羞恥に顔が一気に熱くなる。

「や、いやだ・・・」

恥ずかしさにデイの手を止めようとしても、空いた反対の手で捕らえられなす術がなくなってしまう。

「・・・ひっ・・・あ、あっ！」

「レン・・・」

デイの熱に浮かされたような声が聞こえ、目の前が真っ白に染まった。

呆気ないくらいに、声もなく俺はデイの手の中に白濁を吐き出してしまふ。今まで感じたことがないくらいの快感だった。

「・・・んっ・・・」

荒い呼吸を繰り返しているとデイが口付けを落としてきた。素直にそれを受け入れると差し入れられた舌が自分のそれに絡んできた。卑猥な音を立てるのを聞きながら俺はまだチカチカしている頭のま

まばんやりとしていた。

声もなく足を押し広げられながら俺のもので濡れたデイの手が奥へと入り込んできたのはそんな時だった。

「・・・んうつ・・・」

深い口付けに言葉を奪われながら、次にされることを抑制しようとして俺はデイの腕に自分の手を伸ばす。快感が強すぎて今何かされてしまったら訳が分からなくなってしまう。でもそんな俺の抵抗など意に介した様子もなくデイの手が俺の最奥へと触れた。

敏感になっっている体がびくりと痙攣する。

口内を舌で犯されながら、デイの手がゆつくりと孔に入ってくるのを体中で感じた。体内に異物が侵入してくる感覚に肌が粟立って広げられた足がぐくぐくと震えた。

「ん、・・・んあ・・・、はっ・・・デイツ・・・」

「レン・・・、痛くないか？」

「・・・いた、くは・・・ないけど・・・っ」

前にした時はこんなにリアルに自分のされていることを感じたりはしなかった。だけど今は違った。体内に入っているデイの指の形まで分かってしまうくらいなのだ。

「・・・けど？」

何度も俺に口付けながら合間にデイが言った。薄っすらと閉じていた目を開くとデイと目が合った。欲情しきったその目に射すくめられながら俺は投げ出していた手でシーツを握り締める。

「・・・なんか、変な感じが、する。」

異物感と圧迫感。それを感じるのは当たり前だ、あるべきではない物が体の内にあるのだから。でもそれ以外の何かも感じていた。腹の奥が、重たい感じ。

俺の言葉を聞いてデイが笑みを浮かべた。そしてまた口付けてくると不意に差し入れていた指をうごめかせ始めた。内壁をなぞられ、出し入れされると堪らず俺は嬌声を上げてしまう。何度も出し入れを繰り返されながら次第に大きくなっていく圧迫感に俺はもうなす

術がなく、翻弄されるだけだった。

「やつ・・・、デイ、やあつ！」

あまりの快感に涙がこめかみを伝って落ちていく。それを舌で舐め取りながら、デイはそれでも動きを止めなかった。

「あつ・・・、デ・・・イ・・・もう・・・、うあつ！」

奥の一点を指で擦られた瞬間強烈な快感に襲われ、何が起ったのか理解する前に俺はまた、熱を吐き出してしまっていた。

「・・・・・・な・・・に・・・？」

二度達し、体中の痙攣が止まらない中俺はうわ言のように言った。でもデイは何も言わないまま俺の体内から指を引き抜くと俺の両足を自分の肩にかけ、無言のまま一気に押し入ってきた。

「あああつ！」

熱い自分の体よりも更に熱く、硬いものが奥を貫いた。衝撃に悲鳴が喉から迸ったけれど、デイは動きを止めず激しい抜き差しを始めた。中を擦られ押し広げられる。奥まで抉られて頭の中は真っ白になってしまった。

肉を打ち付ける音と、俺の声が部屋に響いていたけれどももうそんなのも分からなくなってしまうくらいに俺は翻弄されてしまう。

「あつ、・・・・・・うあつ・・・や、まつ・・・デイ・・・まつて・・・」

「

「レン・・・」

激しい嵐に巻き込まれてしまったようだった。それ程にデイは容赦がなかった。飢えを満たすかのように、俺を食い尽くしてしまうんじゃないかって思うくらいに。

「・・・デ・・・まつて・・・、ひっ・・・」

「待てない。」

「・・・んむっ、・・・んう・・・」

腰を打ちつけながらデイは俺の足を抱え直すと身がかがめ噛み付くように口付けてくる。深く貪られて、舌を絡められ、俺は苦しさでデイの首に腕を回して縋り付いた。

体中、触れ合っていない場所がないくらいに俺たちは一つに重なって交わった。デイとの体の間に挟まれた俺自身も動きに合わせ擦られていて、俺はまた達し自分の腹を白濁で汚してしまう。そんなことすらも分からなくなってしまうくらい、デイは激しく俺を求めていた。

「レン・・・レン、愛してる・・・」

顔にぽたりと雫が落ちてきて、俺は揺さぶられながらそれでも何とか目を開けると泣き出しそんな顔をしたデイがそこにいた。額に滲んだ汗が幾筋もこめかみを流れ、俺の上にぽたぽたと落ちる。まるで泣きたいだ。

「・・・デ・・・イ・・・俺も・・・あいして、る・・・」

愛しさが込み上げて、勝手に涙が溢れてしまう。

どうしてこんなにデイを好きなのか分からない。もう出会う前になんてもう戻れない、デイの存在がないと嫌だ。

こんなにも自分が誰かを求める日が来るなんて思ってもみなかった。

「・・・レンツ・・・」

「・・・うつ・・・あっ！」

汗ばむデイの背中に手を回すと同時に奥を挟られそこに爪を立ててしまう。

「あああっ・・・、デ・・・イ・・・」

短い悲鳴をあげ、俺はもう何度目になるのか分からない絶頂を放った。デイも限界が近いのか激しい抽送が更に速くなってくる。そして短く息を詰めたかと思うと最奥まで腰を打ち付けると動きを止めた。

熱いものが体の奥を満たしていく。デイの迸りを体の一番奥に受け、俺は喘ぎながら体を弛緩させた。

互いの荒い呼吸が耳元に聞こえ、デイの重みが増した。

「・・・レン・・・」

少し掠れたデイの声俺を呼ぶ。体力を限界まで使ってしまった

俺は眠りに転げ落ちそうになりながら、それでもその呼びかけに何とか目を開けるとすぐ側にまでデイの顔がせまっていた。そのまま口付けられ、啄ばむように何度もデイの唇が俺のそれに触れる。

「レン、愛してる。」

瞼に唇を触れさせながらデイが繰り返してくれる。

一度目の時にはなかった言葉。あの時もデイと体を繋げて、嬉しかったけど悲しかった。だけど今は違った。こんなにも全てが満たされている。

「・・・れも・・・、愛してる・・・よ・・・」

笑みを浮かべると、デイは愛おしそうに目を細め俺を抱きしめてくる。俺も抱きしめ返そうとしたけれど、もの凄い眠気に襲われてしまいそうする前に意識を手放してしまった。

深い深い眠りに落ちていく闇の中で、脳裏に世界樹が浮かび上がる。

何かを語りかけてくるような声が聞こえた気がしたけど、その前に俺の意識はふつりと途切れ聞き取れないまま。

第二章：第九話

目を覚ますと心地良いシーツに包まれ俺はベッドに寝ていた。部屋は明るい光に満ちていて、眩しくて目を細める。

「・・・おはよう、レン。」

髪を撫でる大きな手の感触がして、顔を上げるとデイが優しい眼差しで横にいた。

「おはよ・・・」

擦れ切った声が喉から飛び出る。喉がカラカラに渴いてた。

「水を飲んだ方がいいな。」

デイは体を起こすとサイドテーブルに載せてあった水差しからグラスに水を注ぐと俺の体を起こし、手渡してくる。口をつけると冷たい水が喉を通り過ぎて美味しかった。

「体は大丈夫か？」

空になったグラスを受け取るとデイはまた俺の髪を撫でてくる。

恥ずかしくて、顔を真っ赤に染めながら俺は小さく頷いた。汚れていただろう体はすっかり綺麗にされていて、それがまた恥ずかしかった。

「今日はゆつくりするといい。」

デイはそう言うベッドから足を下ろし俺に背を向けた。広い背中には幾つもの古い傷跡が散っていてそのどれもが痛々しかった。その中に新しい傷が走っている。

爪で引っ掻いた痕は間違いなく昨日俺がつけたものだ。

デイの体に俺のつけた傷がある。

手を伸ばしその傷跡にそっと触れた。デイが一瞬体を固くし、すぐに振り返る。

「あ、ごめん。痛かった？」

「いや、大丈夫だ。どうかしたのか？」

「・・・爪痕、つけちゃった・・・」

傷に触れないようにその横を指でなぞるとデイがくすぐったそうに身を振った。まだ少し血が滲んでいて痛そうだ。

「痛くない？」

「痛くないから大丈夫だ。それにレンがつけた傷ならむしろ嬉しい。」

恥ずかしいセリフを恥ずかしげもなくデイが言つて、俺はまた更に顔を赤く染めてしまった。デイは触れている俺の手をそつと握り締めて引き寄せると俺に口付けてきた。

触れるだけの優しいキスだった。

そして「寝ているんだぞ。」と言い残すと側に落ちていた服を身に纏い部屋から出て行ってしまった。ずっと一緒に居たかったけどそういう訳にもいかないのは承知していたから俺は引き止めずデイを見送った。

タランフィリアとの戦いに備え、色々と準備をしなくてはならない。

人の命を奪うかもしれない争いに身を投じたことなんてない俺には何をどうすればいいのかも分からないけれど、デイを信じて今は待つしかなかった。

寝ていると言われたけど、妙に落ち着かなくてベッドから降りようとしても足に全く力が入らなくてまともに立つことも出来なくて昨日の行為のせいだと分かっていたから俺はベッドに横たわり、一人顔を真つ赤に染めてしまっていた。思い返すと恥ずかしくて消えてしまいたくなる。

あんなこと、デイに言つて引き止めてしまふなんて。

両手で顔を覆って、俺は一人ベッドの上で転げまわってしまう羽目になってしまった。

「・・・・・・・・」

ふと、元の世界のことを思い出した。ここへ来てしばらく経つけどあつちの時間は過ぎていないだろうか。前、来た時は大丈夫だったけど。

以前大丈夫だったのなら、今回も大丈夫だと思う。もしそうじゃなかったら大騒ぎになってしまってるよなー、なんて俺はのん気に思った。

そのままベッドでごろごろしながら何度か転寝を繰り返していた俺は、午後にもなるとようやく立ち上がることが出来るようになっていた。

ベランダに出て広がる景色を見ながら、自分だけこんなにのんびりしていいのかとも思ったけど、今日一日くらいはデイの言葉を守って大人しくしていよう。

眼下に広がるカーミアの町並みの通りにたくさんの人が居て慌しく動き回っているのを申し訳なく感じながら、俺はいつまでもその光景を見下ろしていた。

翌日になってもタランフィリアからの宣戦布告は出されなかった。デイも首を傾げていたけれど、いつ仕掛けられるかは分からないので気を緩めようとはしなかった。

俺はと言えば特にすることもなく、というかデイにさせてもらえないのだけど、部屋にこもるのも昨日で飽きてしまったので城内の散策に勤しんでいた。

いつもはもつと人氣が少ないけど、いつ戦争を仕掛けられるか分からない今はどこに居ても緊張した面持ちの兵士達ばかりだった。そして一階の玄関ホールに足を踏み入れた時、それは起こった。

「お前がデイ様をたらしこんだ奴か。」

歩いているといきなり背後からそんな言葉を投げつけられた。振り返るとそこには三人の兵士が立っている。見覚えはなかった。

「お前がいなけりゃ、こんな無駄な戦争を吹っかけられずに済んだつてのになあ。」

怒りと嫌悪をあらわにした言葉に、俺は少なからずショックを覚えた。言葉が出てこない。分かっていたことだけど、当事者から改めて言葉にして言われると辛かった。

「……すみません……」

「すみませんじゃあすまないんだよ、こっちは命を懸けるんだ。自分では安全な所で高みの見物を決め込んでいるんだろう。はつきり言っただけだよ。」

「……俺は……」

高みの見物なんてしない、俺だって戦おうと思っている。そう言おうとしても中々それは言葉にはならなかった。

中央にいる兵士が舌打ちをして、俺の胸倉を掴み上げる。

「今からでもいいからお前消えろよ。」

「……」

「デイ様の為に戦うのは構わない、だがお前がいるとこっちの士気が下がるんだよ。」

胸倉を掴まれ締め上げられながら俺は兵士から目を逸らさなかった。浴びせられた言葉にショックは覚えていても、逃げるわけにはいかなかった。言われている言葉のほとんど全てが事実なのだから。俺の責でこんなことになって申し訳ないと、思ってます。でも……

「

「分かってるんじゃないか。」

「でも俺は高みの見物なんかしない。俺が招いたことなんだから、俺も戦います。」

「戦う？このひよろつちい腕でか？」

俺の言葉に兵士達は声を上げて笑い出した。そしてひとしきり笑い終わると、鋭い目つきで俺を睨みつけてくる。

「ろくに戦ったこともないだろう。んなこと言われても足手まといでしかないんだよ。」

周りがざわざわとし出していた。何事かと、俺達を遠巻きに場内の人々が集まり出している。俺はそれでも兵士から視線を逸らさず

真っ直ぐに見つめた。

「何をしている！」

突然鋭い声が兵士達の後方から聞こえた。現れたのはナジエイルだった。険しい顔をして俺達に近づいてくる。俺の胸倉を掴んでいた兵士がその手を放し、俺は少しよろめいてしまった。

「その方に無礼な真似をすることは私が許さん。」

「ナジエイル様・・・しかし・・・」

「言い訳は聞かぬ。」

深く青い目が怒りに燃えていた。まさかナジエイルに助けられるなんて思ってもみなかった俺は呆然と立ち尽くしてしまっていた。

「・・・申し訳ありませんでした。」

兵士達がナジエイルに頭を下げその横を通りその場から立ち去ると、ナジエイルは表情を和らげ俺に近づいてきた。

「レン殿、申し訳ありませんでした。」

「・・・あ、いえ・・・」

「宣戦布告が出されない状況で兵士達も苛立っている様子。お許し下さい。」

深々と頭を下げられ俺は慌てて両手を振った。

「やめて下さい。あの人達が言っていることは間違っていないから。」

「・・・レン殿。」

「俺の責でみんな、戦わなくてもいい戦いに巻き込まれるんです。こんな風に思われているとは思ってましたから。」

面と向かって言葉にして浴びせられたのはさすがにショックだったけど、俺ですらそう思っているんだ。俺が居なければこの争いは起こらなかった。

「あの人達を怒らないであげて下さい。」

「・・・レン殿・・・」

「デイにも言わないで。」

きつと悲しむから。

俺の責でデイが悪く言われるのだけは嫌だった。

「・・・分かりました。」

ナジエイルが悲しそうに顔を歪める。そんな顔をさせてしまったことが俺の胸を締め付ける。消えてなくなってしまうたかった。

「でも、ナジエイルに助けられるとは思ってなかった。」

誤魔化すように、気持ちを悟られないようにわざと笑みを浮かべそう言々とナジエイルは眉根を寄せ、目を伏せた。

「あなたは王が正妃として迎えられるお方です。お守りするのは当然のこと。」

再び顔を上げた時、ナジエイルの目は驚くほど労わりに満ちていた。

「私も全力でお守りいたします。」

「・・・ありがとう・・・」

全てが俺の責だと知っていて向けられる言葉に涙が出そうになった。

俺が全ての引き金になってこの事態を招いてしまった。言葉で自分も戦うと言っても、何をどうすればいいかも分からない俺に兵士達があんな風に思うことも知っていた。快く思われないだろうことも知っていた。けど、やっぱりあんな風に言われると胸が痛む。

言われた言葉が棘になって、刺さった心にじくじくと痛みを広げていく。

「・・・ちょっと、外に出てきてもいいかな？」

「外に、ですか。」

「ずっと籠ってたから、外の空気を吸いたいんだ。」

ナジエイルは少し考えてから「分かりました」と言った。

「ですが、あなたは今誰よりも危険な立場であることをお忘れなく。」

「……うん。」

「あまり遠出はなさらないで下さい。」

「分かった。」

頷いて見せて、俺は踵を返し歩き出した。そんな俺の背中を悲しそうな顔でナジェイルが見つめていたことに最後まで気づかなかった。

第二章：第十話

外に出ると俺は真っ直ぐに怪鳥が居る小屋に向かう。ここから離れて一人になりたかったから。

辿り着くとそこには世話人の男が居て、俺を見て口をへの時にする。

「またお出かけですか。」

「へへ。いつもごめん、ちょっと一羽借りてもいいかな？」

「許可が出ているのでしたらどうぞ。」

男はすっかり心得たように小屋に入るとその中の一羽に乗れる準備を施す。そして今度は外にまで連れて出てきてくれた。

「こいつは一体どこの奴ですか。気性が荒くて世話をするのが大変なんです。」

そう言われて思い出した。ライカの所から一羽借りっぱなしだったんだ。連れてこられた怪鳥を見るとそいつはライカの所から乗ってきた奴だった。

「出来れば飼い主に返してやって下さい。」

「うん、出来たらそうするよ。」

手綱を男から預かり俺は怪鳥の背によじ登った。首を撫でると怪鳥が高く、一度鳴き声を発した。

「行こうか。」

しっかりと手綱を手に巻きつけ合図を出すと怪鳥は数度羽ばたき、一気に上空へと舞い上がる。どんどんと地上が遠ざかっていくのを目にしながらどこへ行こうか、なんて考えた。行き先なんて決めていなかった、ただ少しの間だけ城から離れたかった。

それだけ。

「あ、デイに何も言わないで来ちゃったな。」

どこかへ行く時は一緒に行くと言ってくれていたのに、すっかりしてた。帰ったら怒られるかもしれないなあと思いながらも、俺は

戻ろうとはしなかった。

ほんのちょっと出かけるだけなんだから大丈夫だ。ナジエイルには言っているし。

心の中でそんな言い訳をして、俺は無意識に世界樹のある方向へと向かう。

眼下の景色から町並みがなくなり、荒野が広がるようになって小さな集落がぼつぼつと点在し始める。そのどこもが慌しげに武器や防具を倉庫らしい場所から出していた。ここも、戦争に巻き込まれてしまうのか。

カーミアの領土内なのだから仕方がないのかもしれないけど、こんな離れた場所の人たちまで巻き込んでしまう事実には俺は唇を噛み締めた。

守ると言った言葉に偽りは無い。デイの守りたいものを俺は守りたかった。でもそれをいざ目の当たりにするとデイの背負っているもののあまりの大きさに怯んでしまう自分が居た。

こんな気持ちになっている自分がたまらなく嫌だった。

今は少しでも離れたくて俺は高度を上げた。小さな集落は更に小さくなり、あつという間に視界から消えうせてしまう。そして荒野を過ぎると広大な森が広がっていた。果てしなく続く森は深く、大きかった。

そう言えば初めてデイに会ったのもこの森だ。ライカに召喚されて、逃げ出した先でジャモンと出会って、そしてデイに出会った。

まさかあの時はここまでデイと深く関わることになるなんて思ってもいなかった。あの、小さな泉で出会った時は良い感情なんてこれっぽっちも覚えていなかったのに。

その時を思い出して俺はつい笑ってしまった。

そうだ、あの泉に行ってみよう。この近くのはずだから。

あの静かな場所で心を落ち着けたい。そう思い、俺は泉を探した。広い森の中であの小さな泉を探すのは至難だった。場所もあまりよく覚えていなかった俺はそれからしばらくの間ずっと森の上を

飛び続けそしてどれくらい時間が経ったのか。

「あ！」

見つけた。真上を通ってやっと分かるくらいの小さな泉をやっと見つけた。

「こんなに小さかったんだ。」

俺は旋回しながらその泉の上まで戻るとゆつくりと高度を下げ、何とか無事に泉の側に着陸すると俺は怪鳥から飛び降りた。小走りに泉に近づき水の中に手を突っ込むとひんやりとした冷たい感触に覆われる。

「気持ちいい。」

ばしゃばしゃと水面を波立たせ、顔を突っ込む。目を開くと底が見えるくらい透明度が高かった。

「ぶはー。」

顔を上げ、濡れた前髪をかき上げる。もうちょっと暑かったら泳げたのにと少し残念に思いながら俺はズボンの裾をまくり上げ、両足を泉につけた。そのままばかりと地面に倒れこむと遠くに空が見えた。高い木の向こうに見える空はぽっかりと丸く小さくて、まるで俺自身のような気がしてしまう。

手を上に持ち上げ掴もうとしても遠くて何も掴めやしない。当然だけど。

この手に何も掴めない。何かを掴んでいたとしてもそれが正しいもののかなからない。

「・・・テイ・・・」

一体俺に何ができるんだろう、戦うと言ったけれどこの世界の戦い方なんて何一つ知らない。知ったとしてもそれが出来るのかどうかも分からなかった。

宙に持ち上げていた手をぱたりと地面に落とし、俺はぼんやりと空を見上げた。聞こえてくるのは鳥のさえずりの声と、風に揺られ木々が葉を鳴らす音だけ。自分の存在がちっばけに思えてしまうけど、でも、不思議と心は落ち着きを取り戻し始めていた。

このまま眠ってしまいそうくらいに心地良くて俺は目を閉じた。ふわりと優しい風が頬を撫で、自分も自然の中に溶け込んでしまったような気分になる。

気持ちが良い。

ここへ来て良かったのかもしれない。何だか気持ちが楽になった。俺は目を開いた。やっぱり見上げた空は遠かったけれど、でもさつきみたいな気持ちにはならなかった。

その時、パキツと小枝を踏みしめる音が聞こえ俺は体を起こした。辺りには誰の姿もない。

「・・・気のせいかな？」

泉から足を引き抜き立ち上がり何度見回してみるけれど誰の姿も見当たらない。気のせいにしてはいやにはつきりと音が聞こえたんだだけ。

俺がキョロキョロしていたその時、急に風の動きが変わった。

穏やかだった風が急に吹き荒れ始めたのだ。まるで何かを教えようとするかのように俺に向かってその風は吹いていた。少しずつ嫌な感じが胸に込み上げ、俺は一步後ずさった。

帰った方がいい。それは直感だった。

風が吹き荒れるのと同時に空気が重く淀み始めている。ここに居たら駄目だと本能が告げていた。こめかみを汗が流れ落ちていき、俺はそれを拭った。そして足を引きずるように少しずつ怪鳥に向かって歩き出す。

その向こうに、人影が見えた。木の幹に隠れていてよく見えないけれど、確かに人がそこに立っていた。

「・・・誰か、居るのかな？」

声をかけるとそれを待っていたように一人の女が姿を現した。ゆるいウェーブのかかった金髪を揺らめかせながら俺に近づいて来る。

「こんにちは。」

鈴を転がしたような高い声。けれど綺麗な声のはずなのに俺にはまるでそれが毒を吐き出したもののように聞こえてしまう。

「こんな時に一人で出歩くんなんて、無用心よ。」

くすくすと笑いながらその女は一步、また一步と俺に近づいてきた。怪鳥が警戒心をあらわに鋭く鳴き声を上げるが、女は気にも留めず俺に向かって歩き続ける。

「初めまして、ね。いきなりごめんなさい、私はエルミナ。」

ついには俺の目の前に立ち、女は自らをそう名乗った。なびく髪をかき上げると表情があらわになる。女は恐ろしく綺麗な顔をしていた、寒気がする程に。

「・・・誰？」

俺の心臓が警鐘を鳴らすように高鳴り始める。この女の側に居たら駄目だ、そう思っただけで逃げようとしても足が言うことをきかない。

女のエメラルドグリーンの目に見つめられ、俺の体は石になってしまったかのように体中の動きをなくしてしまう。

「名乗ったじゃない、私はエルミナ。」

華奢な腕を伸ばし俺の手を取るとにつこりと微笑み、言った。

「タランフィリアの王女、エルミナ・デュバンよ。」

「・・・タラン・・・フィリアの・・・」

「そうよ。初めまして、レン。」

「・・・！」

俺の存在がタランフィリアに知られているのは当然だ、あの時デイが言ったから。でも、名前まで知っているなんてどうして。

「・・・俺に、何か用ですか。」

カラカラの喉でやつとの思いで声を発するとエルミナは握っていた俺の手をスルリと放した。

「用があるからわざわざ出向いて来たのよ？」

「・・・だから、何の用ですか。」

体の奥から湧き上がる震えを必死に押さえようとした。風が吹けば手折れてしまいそうな華奢な目の前の女、エルミナに信じられな

いくらいの恐怖を俺は覚えていた。

「私ね、断られるとは思ってもいなかったのよ。もの凄い屈辱だわ。」

「何がなんて聞くまでもない。デイが拒絶した婚姻の話だ。」

「それは……」

「おまけに断られた理由が、あなたでしょう？まさか男の子だとは思わなかったけどレンは可愛いからカーミアの王もその気になってしまったのね。」

細い指が俺の髪を撫で上げる。その間も俺は身動き一つ取ることが出来なかった。どう見ても恐怖を覚える片鱗なんてその姿からは取れないのに、エルミナ存在は禍々しい。

「本当に可愛い。あなたじゃなかったら、きっとこの場で殺していたわ。」

髪を撫でていた手が頬まで下りてきて、震え続ける俺の頬に触れた。

「だけどね、受けた屈辱の分は返さないと気が済まないのよ。」

「そんなの、あんたの都合だろ！」

「……そうかしら？」

触れられている頬から毒が伝わってくるかのように、気分が悪くなってくる。目も霞んで呼吸が荒くなり始めてきた。

「でもね、そう思うのはあなた達の都合なのよ。」

ギリツと頬に爪を立てられ痛み顔に顔をしかめるとエルミナは嬉しそうに微笑んだ。こんな人間が居るなんて考えたこともなかった。存在そのものが禍々しい。

俺の異変に気づいたのか怪鳥が鋭く鳴き、威嚇するように毛を逆立てていた。何度も威嚇の声を上げ続ける怪鳥に、ふとエルミナが笑みを顔から消した。

「うるさいわね。」

感情も何もないその顔に、俺は足の震えが更に大きくなってしまった。

怖い、この女が。

エルミナは顔だけで振り返ると手を怪鳥に向かってかざした。目に見えない何かがその手の平に集まっていくなを感じ、俺は嫌な予感に囚われた。

動けたのは奇跡に近かったと思う。

俺はエルミナに向かって飛び掛り地面に共に倒れこむとエルミナの手を怪鳥とはあさつての方向へ向けた。一瞬の間を空けて手が向けられた方向にあった木が蒸発するように消えてしまう。

「逃げろ！」

何が起こったかなんて分からない、だけどこの場に居たら危険なのは容易に想像がつく。無意識に俺は怪鳥に向かって叫んでいた。ここに居たらあいつは間違いなく殺されてしまう。

「早く！逃げろ！」

エルミナを押さえつけながら何度も叫ぶと、怪鳥は躊躇いながらも一気に空へと舞い上がっていった。その姿が視界から消えるのを確認すると、俺はエルミナに視線を戻した。

「邪魔しないでくれる？」

エルミナの手が俺の胸に軽く触れほんの僅かだけ押された、それくらいのこと。

「・・・ッ！」

たったそれだけのことで、俺は弾き飛ばされ泉の向こう側の木に背中から叩きつけられてしまっていた。体の中で骨の折れる音が聞こえ、激痛が体に走る。

「・・・っぐ・・・う・・・」

地面に叩きつけられ蹲っていると近づいてくる足音が聞こえてきて、顔だけを上げると目前にエルミナがせまっていた。逃げなきゃ殺されてしまう、分かっているてももう体の自由がきかなかった。肋骨が折れているのかもしれない。

「馬鹿ねえ。あんな鳥一匹を守るために自分を危険にさらすなんて。」

「……っ……」

エルミナは膝をつくと俺の髪を掴み強引に顔を起こす。微笑んでいることで返って恐怖を煽られる。

「でもまだあなたは殺さないわ。」

立ち上がったエルミナに強引に引き起こされるように俺は上半身を起こさせられる。掴まれている髪が引っ張られまた別の痛みに襲われるが、それ以上に肋骨の痛みが酷かった。息すらままならない苦しみなんで初めて味わった。短く浅い呼吸で痛みが最小限になるようにしていてもこれだけの痛みがあるなんて、相当酷く折れているか折れているのが一本では済んでいないのか。

「可愛いレン、あなたは逃げたら駄目よ？」

投げ出している俺の足の、丁度右膝の辺りにエルミナが自身の足を軽く乗せた。

「……っ、……な、にを……」

「立てなかったら、逃げられないわよね。」

言葉の意味を脳が理解する前に、体内から碎ける音がした。

「うああああああっ！」

灼熱の炎に焼かれているような、そんな痛みが膝を襲った。掴まれていた髪を放されまた地面に叩きつけられるように伏し、その衝撃で肋骨の痛みが増すが、もう声すら出なかった。

「レン。」

全身を激痛に苛まれ、俺は地面に転がり呻くことしか出来なかった。脂汗が額を流れ落ち、息もまともに出来ない。

「……っ、……っ……」

何かを考えようにも思考がまとまらない。あるのは痛みだけだった。

「明日まで生きなさい。そうしたら、ご褒美をあげるわ。」

頭上からエルミナの声が聞こえて、俺は必死の思いで目をそちら

へと向けた。にこやかに微笑むエルミナの姿と、その向こうにある
深い緑と遠くの空が視界に入って。
そこで俺の意識はプツリと途切れた。

第二章：第十一話

体中が痛い。最初に感じたのはそれだけ。水面に引き上げられるように、急浮上する意識の中で暗闇の中に銀色が見えた気がした。

「・・・・・・イ・・・・」

泣きながら俺は目を覚ました。

体の痛みは引くどころか一層酷くなっていた。骨折のせいで発熱したのか全身が熱かった。

「お目覚めね、レン。よく生きていたわ。」

コツコツとヒールの足音が聞こえ、近づいてくるのが分かった。

「・・・・エル・・・・ミ、ナ・・・・」

「泣いてる顔も可愛いわ。夢でも見ていたのかしら？」

俺の頬に伝う涙をエルミナの指が拭った。触れる手が冷たくて、気持ちがいい。

「じゃあ、ご褒美をあげるわね。」

顎に手をかけられ顔を起こされると目の前には巨大な鏡があった。そこには俺とエルミナの姿が映し出されていて、俺は初めて自分の取らされている体勢を知った。

天井から降りている鎖に腕をつながれ頭上で一括りにされ、膝がつくギリギリの所で吊るされるような格好を取らされている。肋骨を骨折している体でこんな体勢を取らされていたら痛みが酷くなるのは当然だった。

エルミナが鏡に向かって手をかざすと映っていたものが消え、鏡が一瞬ぼやけた。そうかと思えば次には何かの姿を映し出していた。見慣れた、人の姿だった。

「・・・・・・デ・・・・イ・・・・」

霞み始めた視界の中に、映ったのはデイの姿だった。自然と涙が零れ落ちた。

「カーミアの王、ごきげんよう。」

エルミナが何でもないかのようにそう鏡に向かって話しかけると、鏡の中のデイの表情が険しくなった。

「どういうつもりだ、タランフィリアの。」

怒りを抑え切れていないデイの声が俺の耳にも届いた。

「可愛い小鳥を見つけたの。あんまり可愛いから捕まえちゃった。」

「・・・小鳥、だと？」

「そうよ。」

エルミナが振り返り、俺の方へと近づいてくる。そして胸に手を置くと強く押してきた。

「うあああつ！」

圧迫されて走った激痛に俺は悲鳴を堪えきれず、痛みに反射的に体に力を込めると肺の辺りでチリツとした痛みが走った。全身ががくがくと痙攣をし始め繋がれている鎖が金属音を立てた。

「可愛い声で鳴くでしょう？」

「・・・貴様っ・・・」

鏡越しに聞こえてくるデイの声に明らかな怒気が含まれた。俺は襲い来る激痛を堪え鏡の中のデイを見た。デイは怒りに体を震わせながらも俺から目を離そうとしない。

デイにそんな顔をさせているのは俺だ。何て馬鹿なんだ、また同じことを繰り返してデイに心配をかけて。

「・・・デイ・・・ごめ・・・なさ・・・」

守りたいなんて言っておきながら自分がこんな目に遭ってしまっている。謝っても謝りきれない。俺は止められなかった涙を零しながら鏡の中のデイに謝り続けた。

「ごめ・・・、デ・・・イ・・・」

「レン、話すな。」

「デイ・・・ごめん、なさ・・・い・・・」

「もういい、レン。」

「ごめ・・・、っ・・・、ぐっ・・・」

言葉は途中で途切れ、急に吐き気を覚え俺は堪えられず逆流して

きた物を吐いてしまった。口の中に鉄の味が広がり、足元を見るとそこは真っ赤に染まっていた。

「レン！」

「あらあ、ちよつと弱つてきちゃったみたいね。」

エルミナのそんな言葉も、俺にはもう何の意味もなかった。視界が狭まって意識を保っているのが限界になってくる。

「もうこの子はいいわ、あなたにあげる。」

「……何だと？」

「元気がない子を飼っていてもつまらないでしょう？」

涙と血でぐしゃぐしゃになった俺を一瞥すると、エルミナは鏡に近づいた。

「私の城の前に出しておくから、いるなら取りにいらつしやい。」

エルミナが歌うようにそう言った瞬間、巨大な鏡にひびが入り砕け散った。向こう側からデイが破壊したのだ。

「短気な人ね。」

それでもくすぐすと笑いながらエルミナはまた俺に近づいてきた。「これであなたの役目はお仕舞いよ。生きて、ご主人様と会えるといいわね。」

「……っ……」

何かを言いたくてももう言葉が出ない。体を襲う痛みは激しさを増し、炎を纏ったかのように体が熱い。意識が薄れていく中で、それだけを感じながら俺は再び転がり落ちるように意識を失った。

意識は波間を漂うようにふわふわと揺れていた。夢から覚める瞬間に似たような感覚。

「肋骨が何本か折れて、肺に刺さっています。吐血の原因はこれかと……」

搾り出したような苦しげな声音には聞き覚えがあった。少しずつ意識が覚醒していく。これは、ナジェイルの声だ。どうしてそんな

辛そうな声で話すんだろう。そんなことを思いながらも俺は現実と夢の間を行き来していた。

「それと……、右膝を粉砕されています。」

誰に話しかけているんだろう。俺に、怪我の具合を教えようとしてくれているのか。それなら応えてあげたいけど、重くて目を開くことが出来ない。

「……申し訳、ありません。私がお一人で行かせなければ、この様なことには……」

「もういい。悔いても何も変わらん。」

ああ、デイの声だ。デイがここに居る。俺の側にデイが。

ごめんなさい、デイ。勝手なことをしてごめんなさい。自分の馬鹿さ加減には本当に嫌になる、お願いだからもう俺のことは放っておいて。これ以上デイの迷惑にはなりたくないんだ。

「一刻も早く戻ってレンの治療を。」

頬に暖かいものが触れた。きつとデイの手だ。俺は何とか目を開こうとするけど、重たくてピクリとも動かせなかった。

「いけません、この状態のレン殿を動かすのは危険です。」

「このままここで指を啜えて見ていても言うつもりか、このままだとレンは死ぬ。」

「……分かって、おります……ですが……」

デイ、もういいから。勝手ばかりしてこんな目に遭う俺なんてもう放っておいて。

そう言いたくとも、想いは言葉にならなかった。もどかしくて、悔しくて。それでもデイに伝えたかった想いが涙になって溢れ出る。

「レン？意識があるのか？」

俺の涙に気がついたデイが目尻から溢れる涙を拭い、切羽詰った声でそう呼びかけてくる。けれどどうしても目が開かない。何かを話したくとも言葉にならない。

「レン、レンッ……」

「王！揺さぶってはなりません。」

二人の声がどんどん遠くなっていく。深い場所に意識を引つ張られていく。

風が吹き肌を撫でられ優しい風が俺を守ろうとしてくれているのが分かった。風に抱き締められてどんどん五感が鋭敏になり、俺は自身が風になったかのような錯覚を覚えた。

風に。空気に触れているもの全てが分かる。

それは不思議な感覚だった。

遠くからもの凄い勢いで何かがこっちへ向かって来ている。見知った空気を纏っているその近づいてくる気配には覚えがあった。

やがて、音としても聞こえ始め近づいてきたそれにデイとナジェイルも気がついたのか、二人の会話が途切れた。

大きな鳥の羽ばたく羽音が響き、突風が俺たちに吹き付けてくる。それらの全てが止んだ時、聞きなれた低い声が聞こえた。

「これは一体どういう事だ。」

その人物が何かから飛び降り、そして近づいてくる足音が聞こえる。

「何でレンがそんなズタぼろにされてんだよ。」

「貴様には関係ない。」

「関係ないだあ？どの口がぼざいてやがる。・・・たく、あいつが单身戻って来たから何か気になって来てみりや何なんだこれは。」

どうしてライカがここに来たのか不思議だったけど、そうか。逃がしたあの怪鳥がライカの元に戻ったんだ。

「で、お前らは一体何をしてるんだ。死にかけのレンを囲んで指咥えて見てるだけか。」

「・・・黙れ。」

デイが怒りに燃えていた。こんな声、聞いたことがない。

「お二人とも、言い争っている場合ではありません。ライカ殿、我々もただ指を咥えて見ているのではありません。この状態のレン殿

は、動かせないのです。肺に肋骨が刺さっていて少しでも動かせば更に危険な状態になります。」

二人を制したのはナジエイルだった。何とか平静を勤めようとしているのが抑揚のない声を感じ取れる。

「怪鳥で連れて帰ろうにもあれは揺れます。そうすれば城に辿り着く前にレン殿は・・・」

「お前は治せないのか、ナジエイル。」

「・・・私は・・・回復の力は持つてはいないのです。」

悔しそうにナジエイルが言った。

回復の力つて、そんな魔法みたいなのがこの世界にはあるのか。

初めて知った事実には俺はそんなことを思っていた。俺なら使えるのに、こんな状態じゃ何も出来ない。

その時。

柔らかな風が俺を包み込み、何かを教えようとしてくれた。暖かいその風は俺の全身を包み込むと、少しだけ力と。そしてあることを教えてくれた。

「城に回復の術が使える奴はいるか。」

「・・・居ますが・・・ここまで重症の者を治せる者はいません。」

「・・・使えねえなあ！」

苛立ったライカの口調にナジエイルが閉口する。デイはもう、何を言おうともしなかった。ただ俺を優しく抱きしめているだけで。

「・・・」

伝えたかった。今、風が教えてくれたんだ。デイ、聞いて。

「・・・」

必死の思いで俺は声を絞り出そうとした。俺を見守っていたデイがすぐにそれに気がつく。

「レン！・・・レン・・・」

「・・・デ・・・イ・・・つ・・・れて・・・って・・・」

震える手が俺の頬を覆い、目深に俺を覗き込んでくる。やっとの

思いで目を少しだけ開くと、俺の視界いっぱいにはデイの姿があった。嬉しくて、涙が零れた。

「……せ……か、い……じゅ……」

「……世界樹？世界樹に行きたいのか？」

小さく頷くと、それだけで全身に激痛が走り俺は呻いた。体内で溢れている血がまた逆流してきたのか口の中に鉄の味が広がって、俺はそれを吐き出した。

「……レンツ！」

「ここから世界樹は遠過ぎます……どうやって……」

二人の緊迫した声が遠くなっていく意識の中で聞き取れた。お願い。早く連れて行って。

そう、声にして言おうにももう叶わなかった。

「俺が連れて行ってやろう。」

ライカの厳しい声がギリギリの意識の中に響いた。

「ライカ殿が？……ですが、どうやって……怪鳥にはもう間違ってもレン殿は乗せられません。」

「別に怪鳥に乗らなくても俺なら連れて行ける。」

空気が動いて、俺の側にライカが膝をつくのが分かった。頬に触れる手の感触がした。

「レン、聞こえてるか。世界樹に行きたいんだな？」

行きたい。ピクリとも動かせない体で、それでも俺は微かに頷いた。

「分かった、連れて行ってやる。……おい貸せ。」

初めの言葉は俺に、最後の言葉はきっとデイに向けて言われた言葉だ。

「……」

「おい、何やってんだ。早くレンをよこせ。」

ライカの苛立った口調が聞こえた。どうしたんだろ、デイが動こうとしない。それどころか一層強い力で抱きすくめられる。

「おい、てめえふざけてんのか！」

「俺が治す。」

どこか生気のない声だった。デイの心が崩れそうになっているのがこの時俺には分かった。俺がこんな目に遭ったせいでデイの心が壊れそうになってしまっている。

強いと思っていたデイの脆さを、こんな時に俺は知ってしまった。こうさせてしまったのは自分なのだ。

デイ。

「てめえに治せるはずがねえだろ！現実を見る。」

「・・・レンに触るな・・・」

「・・・っ！」

バン、と響いたのは頬を張る音だった。

「冷静になれ、今のお前には何も出来ない。治せるのは恐らくレンを呼んだ世界樹だけだ。こんな事で崩れるな、お前は王だろう。」

「・・・・・・ライカ・・・」

「お前は王として自分のやるべき事を全うしろ、デイ。」

二人が互いの名を呼び合うのを初めて聞いた。

デイとライカ、二人はどこか深い所で繋がっている気がした。名を呼び合ったことでその思いが俺の中で強くなった。この、二人は「行け。」

ライカの強い声に押され、デイが俺をそっとライカの腕に受け渡した。最後まで指に絡まっていた手を放された時、俺はゆっくりと目を開いた。

デイの顔が目映る。

「レン・・・」

「・・・デ・・・イ・・・」

微笑を浮かべると、デイの顔が泣き出しそうに歪められた。でも、すぐに目に力強さを取り戻した。

「ちゃんと治して、戻ってくるのを待ってる。」

「・・・うん・・・」

俺の返事を聞くとデイは立ち上がり真っ直ぐに歩き出した。そし

て怪鳥に乗り込みもう一度だけ俺を振り返った時、その顔はもう王のものになっていた。

怪鳥が羽ばたき、風が吹き荒れる。そして一気に空へと舞い上がるのを俺は切れ切れの息の中で見届けた。

「レン・・・よくがんばったな。」

大きな手が俺の頭を撫で、ライカが笑みを浮かべ俺を見下ろしていた。

「・・・行くぞ。すぐに着く。」

俺はライカの体に自分の体を預けた。すると強く抱きしめられる。「辛いだろぅが、俺がいいと言っただけ息をするな。」

返事をする代わりに、俺は目を閉じた。そして今にも途切れそうになっている息を止めた。それを確認したのかライカの周りに感じたことのない力が集まってきた。続けて浮遊感に包まれたかと思うと次の瞬間には辺りの空気が変わっていた。

「もういいぞ。」

濃厚な緑の匂いと暖かく劣るような空気に満ち溢れたその場所は、目を開かなくても世界樹の側なのだと分かった。俺は止めていた息を吐き出し、そして吸った。

それだけで体の中に力が入り込んでくる。

「・・・ラ・・・イカ・・・」

薄っすらと目を開くと額に汗を浮かべたライカが目の前にいた。見下ろしてくる眼差しが優しい。

「・・・他人を運ぶのは初めてだが、上手くいったな。」

「・・・あり、がと・・・」

「礼は治ってから嫌って程させてやる。」

ほんの僅かでも俺が回復したのに気づいたのか、ライカがニヤリと笑みを浮かべ俺を抱いたまま立ち上がった。そして世界樹の元へと歩いていく。

「驚いたな。こんな世界樹は初めて見る。」

感嘆とした声をあげ、ライカは世界樹を見上げた。

「お前を守ろうとしてるんだな。」

そつと世界樹の幹に背もたれさせかけるように下ろされると、背中に世界樹の息遣いを感じた。ざわざわと木の葉がざわめき立つ。後ろ手に世界樹の幹に触れるとそこに熱いものが集まってきた。体の中にそこから力が注ぎこまれてくるのが分かって、俺はため息をついた。

あたたかい。

「・・・レン？」

訝しげなライカの声が俺にかけられて、俺は顔を上げた。

「だい、じょうぶ・・・すぐに・・・」

次にどうなるのか、俺には不思議と分かっていた。ライカ表情がギョツとしたものになっていたので安心させようと発した声は最後まで言えなかった。言い切る前に俺の体が飲み込まれるように世界樹の中に取り込まれてしまったから。

第二章：第十二話

遙か高い場所から大地を見下ろしながら俺は風を全身に受けて立っていた。この景色はいつも見ているもの。守るべきもの。

そして愛してやまないもの。

『こんなに綺麗な場所なのに。』

争いがこの場所にいつもあるなんて信じられなかった。

昔からそうだった。どんなに守ろうとしてもこの世界の人間たちは争いを繰り返す。そして命を削り、全てを削り、色々なものを失くしていった。

『時折、投げ出してやろうかとも思ってしまうんだ。』

俺が守らなければこの世界は均衡を崩してしまう。分かっている、それを投げ出さなくなってしまうことが最近特に増えたような気がする。

『……辛いんだ……』

笑顔で満ち溢れた豊かな世界に出来るはずなのに、自分の力が及ばなくて皆が苦しみ抜いて今を生きている。

『全部捨てて、終わらせたいと思ったことも何度もある。』

何度も新しく生まれ変わって『それ』から全ての記憶を引き継いで、たった一人でこの世界を守ってきた。始まりなんてもう遙か彼方にあるって思い出せやしないし、思い出しても無駄なことだった。

この場所から動くことは出来なくても、俺には世界の全てが見えていた。どこもかしこも争いで埋め尽くされてしまつて、もうどうすればいいのかわからない。

『だから、一人は辛いから……呼んだんだ。』

ほら、また。新しい争いが生まれようとしている。

俺は上空からそれを見下ろしていた。足元に広がる光景は剣を打ち鳴らし合う人々とその音と、弓矢の飛び交う音。そして人々の悲鳴と怒声。

俺の役目はこの世界を守ることなのに、一つもそれが叶わない。

膨大な量の記憶が俺の中に流れ込んできていた。同時に誰かの悲しむ感情も。

まるでその全てを自分が体験したかのような気さえしてくる程に、俺は『それ』の中に溶け込んでいた。

『もう辛いんだ。守れないのが・・・』

そう、守れないのは辛い。こんなに側にいるのに自分には何も出来ないんだ。だから無を願う心が生まれてしまう。全てを無くすことが自分には出来てしまうから。

『終わらせてしまいたい。』

守れないのなら。皆が同じように終われば、楽になるのだろうか。遙か足元、大地の上では人々が飽きなく争いを続けていた。剣に体を切り裂かれ倒れ伏す人、弓矢に射抜かれて苦痛に顔を歪める人。俺はそれを見下ろしながら、涙を流した。

『いつも、そうだった。人は苦しみへと向かって生きていくとすら。』

何て愚かなんだろう。

『それ』の悲しみは計り知れないほどに深かった。俺は『それ』の意識に深く同調し、同じように泣いた。

『終わらせたいんだ、だから・・・力を貸して欲しい。』

『それ』が言った。

「終わらせたい・・・？」

そこでようやく、俺は自分が『それ』とは違うものなのだという事を理解した。

「・・・終わらせるって、この世界を？」

『そう、そうすればもう誰も苦しまない。』

疲れきったその声の主は言った。

「それは違う。」

同調して一つになろうとしていた意識がそこで分かれた。

「……確かに争いは悲しいものだけど、人は愚かなんかじゃないんだ。」

深く悲しみ嘆いている『それ』に俺は言った。

「皆、何かを守ろうと戦ってる。……お前と一緒にだよ。」

俺の心に重なっていたもの、それは世界樹そのものだった。

「皆が色々なものを守ろうとして、うまくいかなくて争いになってしまっけど……お前が放棄してしまったら人は何も守れなくなってしまう。」

俺は空を仰いだ。青く澄み渡った青い空の下で人々の争いが繰り返されているのは苦しいことだけど、それを嘆いて悲しむことなく誰にだって出来る。

「守りたいんだ。俺は、ここで守りたいものがある、守りたい人がいる。」

デイ。

「俺は戦いたいんだ……大事なものを守る為に。」
終わらせたりなんてしない。

「だから、がんばろう。一人が辛いのなら、俺がずっと側に居るから。」

この世界をたった一人で守り続けてきた世界樹の苦しみなんて俺には計り知れない。でも、一人だから辛いんだ。

「お前を守るよ。」

今度は言葉だけじゃない。

「だから、力を貸して欲しいんだ。」

俺の言葉と同時に景色が揺らいで、一変した。

俺は世界樹を見下ろすように立っていた。世界樹はざわざわと木の葉を鳴らせ、俺を伺っているようにも見えた。

「大丈夫。俺とデイが、絶対に守ってやる。」

お前の親なんだから、守るのは当然だ。

俺は世界樹の葉先に触れ、一枝を優しく包んだ。

「俺の体を治して欲しいんだ。・・・デイが、待ってる。」

守ると約束をした。一緒に戦うと、デイと約束をしたんだ。だから行かなくちゃ。

『怖くは、ないのか？』

「・・・怖いよ。だってもしかしたら死ぬかもしれないんだ。でも・・・」

俺は世界樹に向かって二カッと笑って見せた。

「戦わないと守れないのなら、俺はそうしたい。」

デイを守りたい。デイの国を、そしてこの世界を。世界樹を。

「みんな、守りたいんだ。」

『・・・お前は強い。』

ふつと、どこか力の抜けた声が頭の中に響く。

『今までの者とは違う。この世界を受け入れようとする者はほとんどいなかった。』

「・・・そうなのか？」

『今まで私を生み出してきた者たちは、お前ほど心が大きくはなかった。』

世界樹の声が泣いているように聞こえて、今までの孤独を俺に教えてくれた。

『・・・お前の体を癒し、力を与えよう。』

胸の中心が燃えるように熱くなって、体中に力が溢れた。

『この世界を、守って欲しい・・・』

「もちろん。」

俺は世界樹の葉に抱きつくつと、頬を寄せた。そこから力が流れ込んできて、髪の手先から指の手先まで力がみなぎる。

「全部終わったら、デイと二人で来るよ。」

だから俺に戦いを乗り越える力を。一人じゃ何も出来ないんだ。笑ってしまうくらいに俺は弱いから。

デイ 待っていて。

淡い光に包まれて、俺は自分の体の傷が癒えていくのを見つめていた。そして不思議な力で体を満たされると、一步を踏み出した。早くデイの所へ行かなきゃ。それだけが頭の中にあった。

『・・・・・・・・』

「大丈夫、心配するなって。」

聞き取れないほどの小さな声が俺の耳元で一言だけ囁くのを聞いて。俺はつい笑ってしまった。一度だけ振り返り世界樹を見上げる。こんなにも堂々と佇んでいるのに、まるで子供のようなことを言うなんて。

「じゃあ、行ってくる！」

両手で力いっぱい世界樹に向かって手を振ると、返すようにざわざわと葉が揺れた。それを見届けてから俺は光の差す方へと真っ直ぐに歩き始める。

第二章・第十三話

木から飛び出すなんて体験はこれから先もう一生することはないと思う。

「びつくりしたあ。」

まさかそんな出方をするなんて思ってもいなかった俺は頭から思いつきり地面に倒れながら、そんな一言を発した。

「……驚いたのはこっちだ。」

頭上から声が降ってきて、顔を上げると呆れ顔をしたライカが立っていた。俺は苦笑いを浮かべながら立ち上がると服の埃を払った。

「居てくれたんだ。」

「そりゃあな。で、見た所怪我は治ってるみたいだな。」

俺は自分の体を見下ろし、胸を押さえ、その場でジャンプをする。

うん、どこも痛くない。

「大丈夫みたい。」

「死にかけ寸前の奴がびんぴんして戻ってくるなんて、不思議なもんだ。」

ライカが世界樹を見上げると、物言いたげに世界樹が葉を揺らめかす。

「ま、治ったんなら話は早い。状況を説明するぞ。」

ライカはその場に腰を下ろすとポケットからタバコのようなものを取り出しそれに火をつけた。深く息を吸い込んで、煙を吐き出す。

俺はライカの正面に腰を落とした。

「お前が世界樹に取り込まれてから二日経っている。その間に戦争は開始された、宣戦布告をしたのはカーミアだ。」

「……カーミアが？」

「それがタランフィリアの思惑だったようだ。仕掛けられたのなら正当な理由を掲げて相手を叩き潰せる。……どうやら王女様はいつになくご立腹のようだぜ。」

ライカは話を進めながらまた煙を燻らせる。

「お前をぼろぼろにして怒り狂ったあの野郎に戦いを仕掛けさせる。王女にとっちゃ、一石二鳥だな。気も晴らせた上で相手を思う存分叩きのめせるんだ。こんな都合のいい話はない。」

デイが戦争を仕掛けた。俺はその事実にならずショックを覚えていた。それでは戦いの意味合いが違ってきてしまう。

「あいつを責めるなよ・・・それほどのことをあいつはされたんだ。無理もないだろう。」

「ライカ・・・」

本当に、ライカは人の心が読めるんじゃないのかな。寸分違わずこつちの思っていることを言い当ててしまうんだから。

「・・・責めないよ。そりゃあちよつとショックだったけど、それはデイが俺を大事に思ってくれている証だと思う。」

俺だって逆の立場だったらきつとそうする。デイを傷つける人を許したりなんて出来やしない。

「・・・ふん、言ってくれるな。」

ライカは悪態をつきながらタバコの灰を落とし、また口に運ぶ。一呼吸を置いて煙を吐き出す。なんか、様になつててかつこいいなあ。これが大人の男って奴なのかな。

「戦況はまずまずだ、だが優勢と言っわけでもない。この状態が続けばカーミアが不利になるのは目に見えている。」

「どうして？」

「王女が姿を現していないからだ。」

「エルミナが？」

「そつだ。いつもは最前線にあの王女が立ち指揮を取っているんだが今回はそれが無い。かえってそれが気になる。」

俺に戦争のいろはは分からないし、未だに戦い方なんて知らない。戦争で軍師ってポジションがあるくらいだから駆け引きしながら戦うのは当然なのかもしれないけど。

ライカの言う通り、あのエルミナが姿を現していないのには違和

感を感じる。あれだけの強さを持っている人が、おまけに結構好戦的っぽいのに、戦場に姿を現さないなんておかしい。

嫌な予感がした。

「ライカ、俺行くよ。」

俺は立ち上がると遠くを見た。この視線の先にはデイがいる。

一人で戦っている。俺が来るのを待ちわびながら。

「デイが待つてる。」

不思議な気持ちだった。俺はこれから危険の中に身を投じようとしているのに少しも怖いなんて気持ちがない。それでなくとも相手はあのエルミナなのに。

遙か彼方を見据え、俺は無意識に体に力を込めた。

目を閉じるとそこにデイの姿が浮かびあがった。埃立つ大地の上で敵味方が混同する中で戦い、指揮を執る姿。これはきつと、今のデイの姿だ。

俺は微かに目を開き、意識を集中した。『見える』ことを当然と感じている自分に不思議と少しの疑問も抱かないまま、意識をデイから切り離す。映画を見ているように画面が次々と切り替わって行き、最後にエルミナの姿が見えた。

戦場ではない場所でエルミナは一人蹲り、震えていた。俺にあんなことをしでかした時とはかけ離れた弱々しい姿に、疑問が湧き上がる。

この人は本当にあのエルミナなのか？

「・・・エルミナ」

呼びかけるとエルミナがガバリと身を起こした。そして『俺』を見ってくる。

「・・・レン・・・」

涙でぐしゃぐしゃになった顔が痛々しい。

「レン・・・生きてくれて、いたのね。」

そこに居たエルミナは俺の知っている人ではなかった。弱々しく、傷ついた小鳥のように震えていた。

「・・・お願い・・・止めて・・・」

「・・・エルミナ？」

「私を止めて、お願い・・・」

エメラルドグリーンの瞳からとめどなく涙を流しながらエルミナは『俺』に懇願した。

「・・・お願い」

声は最後まで届かなかった。何かに遮られるように、エルミナの姿がかき消されてしまったのだ。

「おい、どうした。」

ほぼ同時にライカに呼ばれ俺はハッと我に戻った。そこは変わらず世界樹のふもとで、俺はライカの横で立ち尽くしていた。

あれは一体なんだったんだろう。あれは本当にエルミナだったのだろうか。

「レン。」

「・・・ライカ、俺・・・」

今、自分が見たものは現実だ。それには確信があった。

「遠見をしていたのか？」

「・・・遠見？」

初めて聞く言葉に俺は首を傾げた。今自分が見ていたものは確かに今の『彼ら』の姿のはずだけど。

「何か見えていたんだろう？」

「・・・うん」

「それは遠見の力だ。そんな力まで持っていたのか。」

「・・・よく、分からないけど・・・。」

あの弱々しいエルミナの姿が脳裏にこびりついて離れない。一体、どう言うことなんだ。エルミナは自分の意思で戦いを起こしているんじゃないのか？そうでなければあの姿に説明がつかない。

早く行かなくちゃ。

俺は妙な焦燥感に襲われた。何かがおかしいとこの時はつきりと感じたのだ。

「ライカ、鳥を貸して。」

「あ？・・・ああ。」

俺はライカの返事を待たずに側に居た怪鳥の元へと小走りに近づいた。そのまま飛び乗ると手綱を手に巻きつけ、一気に空へと舞い上がった。後方でライカが何かを大声で叫んでいたけれど、聞き取れないまま俺は一直線に戦場へと向かった。

青く晴れていた空が次第に曇り始め、雷が鳴り始める。空気が重く湿り気を帯び始めもつじき雨が降るのは容易に想像がついた。俺はそんな中、ひたすら戦場へと向かって怪鳥を飛ばせる。

考えていたのはエルミナのことだった。あの姿がもし本来の彼女自身なのだとしたら、あそこまで凶暴性を持っているエルミナは一体何なのか。

『止めて』と言つてあの時泣いていたエルミナの目は偽りなんてなかった。

この戦いは、もしかしたらエルミナが引き起こしたものではないのかもしれない。

あくまで推測の域を脱することが出来ないまま、どんどん大きくなつていく焦燥感に俺は手綱を強く打ち鳴らした。早く、一刻も早くデイの元へ。そしてエルミナに会わなければ。

重く立ち込めた雲間から太陽が姿を消した時、一滴の雨が俺の頬を濡らした。起こっている戦いを嘆いているかのようなその雨は次第に足を強め、あつという間に豪雨となった。

息をするのすら厳しい雨の中で、まともに目も開けられない俺はそれでも必死に前方を見据えた。流れ落ちる雨を何度も拭い、一心に戦場を目指す。

戦いはカーミアとタランフィリアの国境付近で起こっていた。導かれるようにして俺はようやく戦場へとたどり着くと、遙か下方を見下ろした。そこには大勢の兵士達が争いを繰り広げていた。

激しい雨音と、剣を打ち合う音と、兵士達の怒声のする戦場を俺

は見下ろした。激しく降りつける雨が全身を濡らす中、聞こえてくる音がどこか現実味がなくて。

「……デイ……」

何千人、下手をしたら何万人もの兵士がその場で命をかけた戦いに身を投じている。この中にデイが居る。探し出すのは困難に思われるはずだった。

けれど。

分かってしまうのはどうしてなのか。俺にはデイがどこにいたのか、すぐに分かってしまった。見えない糸で繋がれているのなら、それだけで。引力に引き付けられるようにデイを見つけた俺はその場所に向かって怪鳥の高度を下げると、

「デイ！」

雨音に声をかき消されないように叫んだ。ピタリとデイの動きが止まり、上を見上げる。

「……レン！」

俺を見つけたデイが強く俺の名を呼んだ。胸に温かいものがジワリと広がってくる。視線が交わり絡み合う距離まで高度を落とすと、俺は手綱を緩めそのままデイに向かってダイブした。

「デイ！」

デイの腕に抱きとめられしがみつく。デイが剣を下ろし俺を柔らかく包み込んだ。

「レン、もう大丈夫なのか？」

「うん、もう大丈夫。」

いきなり姿を現した俺に、周りの兵士達が驚きに動きを止める。

雨音だけがその場に響いていた。

「エルミナは？まだここには来てないの？」

顔を上げ開口一番俺は言った。それが予想外の言葉だったのか、デイは訝しげな顔をして見せた。

「王女はまだ姿を現していない。レン、どうしたんだ。」

「……気になることがあって。デイ、俺……エルミナの所へ行

こうかと思うんだ。」

「何を馬鹿なことを・・・あんな目に遭わせられてなおも王女の前に行くというのか。」

デイは思い出したのか怒りをあらわにし、声を荒げた。

「あれを許すことはもはや出来ん。今この場に姿を現さないことも、俺には許しがたいことだ。」

デイは怒りに燃えた目を遠くにやった。その先に何があるのかなんて考えるまでもない。デイの視線の先にタランフィリアの城があるのだ。

「聞いて、デイ。俺・・・さっきエルミナに会ったんだ。エルミナは泣いてた。」

「・・・?」

「自分を止めて欲しいって、泣きながら俺に言ってきたんだ。」

俺はデイに俺が見たものをつぶさに語った。推測でしかないかもしれない、俺の中にある違和感も。

デイは最後まで言葉を挟むことなく俺の言葉を聞き終えると、何かを考えるように眉を寄せながら目を閉じた。俺はデイの腕に触れながら待った。

そして再び目を開いた時、デイの目の奥の怒りが少しだけ和らいでいた。

「レンは、いいのか?」

「え?」

「王女を許せるのか。」

「許すも何もないよ、デイ。俺は・・・ただ、守りたいだけなんだ。この世界を。」

あの時エルミナにされたことに俺は怒りなど全く覚えていなかった。この戦いを引き起こした原因は全て俺にあるし、あんな目に遭ったのも今では何とも思っていない。体は治ってるしね。

「デイが俺のされたことに怒って戦いを起こしたことは、嬉しいよ。」

そこまで俺を想ってくれてるってことなんだもん。だけど、もしエルミナが自分の意思であんなことをしたんじゃないのなら、止めたんだ。だから、それを確認しに行きたい。」

俺はエルミナの心を知りたかった。

俺たちは本当に闘い合わなければいけないのか。

もしそうでないのだとしたら、こんなにも無意味な戦いなんてない。

「正直、どんな理由が王女にあらうとレンにしたことを許す気には、俺はなれない。だが、当のレンが許してしまっているのならこの戦いに意味などないな。」

「デイ……」

「王女の所へ行こう。」

「……うん！」

「だが、あれは狡猾な女だ。レンに見せた姿が真実とは限らない。」どこまでも冷静なデイに、俺は思わず苦笑いを浮かべた。

「そうかもしれない。でも、確かめてみなきゃ分からないだろ。」

雨はなおも激しく降り注ぎ、俺を、デイを濡らし続けた。デイの肌をいくつもの雨が流れ落ちていきそれが触れている俺の手にかかる。冷たいだけなはずの雨が、少し温かったのは、気のせいなんかじゃない。

雨は全てを覆い、流し去ろうとしていた。

この世界がどれだけ長い間存在してきたのかは分からない、でもこんなにも弱々しく震え続けている。そこに生きている全ての人達が自分の為すべきことを模索しながら生きている。

俺に一体何ができるのだろう。

この世界を救う為に俺には何ができるのだろう。

守るって、一体何なんだろう。

考えたって、今の俺には分からないのかもしれない。

それでも、出来ることだってある。ほんの小さなことでいいんだ、例えば差し伸べられた手を取るだけでも。

救いの手を差し出すだけで精一杯の人だつてきつと、居る。

「デイ、ごめん。」

「何のごめんなんだ？」

「エルミナの所に行くの、デイは辛いだろ？」

デイの弱さを見てしまった今、その元凶の元へ自分から行こうとする俺についていけない訳にはいかないデイの苦しさは計り知れない。それでも、行くと云つてくれた。

「・・・感情を抑えきれぬ自信は、ない。だが・・・逃げてばかりもいられないだろう。」

一人では乗り越えられなくても二人なら。もつと多くてもいい。

俺はデイと一緒にならなだつて乗り越えられる。デイもきつと同じ気持ちで居てくれているはずだ。

「行こう。」

デイの手を取り、俺は笑いかけた。その手が強く握り返されるのが、たまらなく嬉しかった。

第二章：第十四話

デイが戦場を離れることに、ナジエイルはもちろん賛成なんてしなかった。それがエルミナの所へ行くとなるとなおさらだった。けれど俺達の決意が固いことを知って盛大にため息をついて最後には「仕方がないですね」としかめっ面をして見せた。

「まず何より、レン殿が無事に戻って来られたこと・・・喜ばしく思います。ですがちゃんちゃも大概にしていただきたいものです。」

「ごめん・・・」

「ここは引き止めなければならぬのが私の役目ですが、この戦争を止める為に必要なことならば仕方ありません。」

デイが居た最前線から遥か後方のカーミア軍の拠点となっているテントにナジエイルはいた。俺達は一度そこまで戻り、戦場を一時離れることをナジエイルに告げに戻ってきていた。

「何より止めても無駄なのでしょね。」

「・・・へへ。」

「お怪我をされませんよう、十分に気をつけること。これを守って頂くことが前提ですが・・・王もレン殿も守っていただけますか？」

ナジエイルの深い青い瞳が不安に微かに揺れたのに気づいてしまった俺は、自分がどれだけの無茶を言っているのかを突きつけられた気がした。

「約束するよ、ナジエイル。」

握っていたデイの手にぐっと力を込め、俺は笑って見せた。デイと顔を見合わせると、デイも力強く頷いてみせる。ナジエイルはそこでやっと固かった表情を緩めるとほんの少しだけ笑みを浮かべた。

「・・・お気をつけて。」

ナジエイルの言葉を聞き届けてから俺達はテントを出た。予想していた以上に簡単にオツケーが出たのは本当に意外だった。ナジエイルのことだからもっと怒って頑として譲らないかと思っていたの

に。

「あんまり怒られなかったね。」

小声で囁くとデイも頷き「予想外だ。」と驚きを隠さなかった。

いまだ降りしきる雨はそれでも足を弱めつつあった。俺達は用意してある怪鳥に二人で乗り込むと遠くを見据えた。

その姿さえ見えない遙か先に、エルミナが居る。

俺は唇を噛み締めた。これで戦いが終わるようにと、強く祈った。

怪鳥を飛行させながら俺達はその間、終始無言だった。話さなくても平気だったから。

ただこれから先に起こることが、想像もつかなくて怖くもあった。ここまで来ると頭の中にはエルミナのあの弱々しい姿しか浮かばない。

少しずつ溢れてくるこの恐怖は以前エルミナに感じたものとは違っていた。あの時は圧倒的な恐怖に支配されたけれど、今はもっと漠然とした掴みようなない恐怖。

俺は自分がエルミナに何か出来るかなんて思えない。でも、確かに助けの手が差し伸べられているのは事実なのだ。

何かに苦しんでいるエルミナのあの姿が嘘か偽りかも分からない今、それでもあの言葉に嘘は感じなかった。

「・・・レン・・・」

「・・・何？デイ・・・」

「・・・この戦いが終わったら・・・」

何かを呟いたデイの言葉は雨にかき消され、こんなに側にいるのに俺の耳には届かなかった。何を言ったのか知りたくて聞き返そうとした時。眼下に城が見えてきた。

真っ白な城が不自然にその場所に浮かぶようにあった。

「着いたな。」

タランフィリアの城、エルミナが居る場所。デイは怪鳥を旋回さ

せると城の頂上へと降り立った。人の気配が少しも感じられないのはイリツィアと同じだけど、ここはそれ以上に全てが沈黙していた。

「・・・人、居ないのかな。」

「分からんが、どうも様子がおかしいな。」

デイが先に怪鳥から飛び降り、俺が降りやすいように手を貸してくれる。その手を取りながら俺は怪鳥から降りた。

全ての人間を戦場に送り出しているなんてあるはずがない。そんなことは俺にだって分かる、本拠地を空けていては危ないはずだから。なのにこの人気の無さはなんなんだろう。

俺は先に歩き出したデイの後を追った。城の内部に入ると一層人気のなさが際立った。まるで物音がしない、するのは俺とデイの足音だけ。長い階段をひたすら歩きながら俺達は最下層を目指した。不思議なことに階段以外の何もこの城にはなかった。らせん状の階段が延々と続くだけで他に続くべき扉や出入り口の一切がないのだ。まるで俺達をその場所に連れて行きたいかのように続く階段を俺達は下り続けた。

「デイ・・・なんか・・・おかしくない？」

「・・・ああ・・・」

窓もない。降り続けてはいても、目印になるものがなければ一体どれくらい下ってきたのか見当もつかなくらいにその階段は深く、長く続いた。

ジワリと、不穏な空気が辺りに漂いだしたのを感じ俺は足を止めた。数歩先まで進んでからデイが俺を振り返る。

「レン？」

階下から少しずつではあるけど何か嫌なものを俺は感じ取っていた。この感じを俺は知っていた。

あの泉でエルミナが纏っていた空気と全く同じものだったのだ。

「・・・デイ・・・」

不安に駆られデイを呼ぶと俺は自分の体をかき抱いた。デイは何も感じないのか、こんなにも重い圧迫感を。でも降りなければ何も

始まらない。俺は一度深呼吸をしてから「なんでもない」とまた足を進め始めた。

長く続く階段をひたすらに下り続けそしてようやく俺達は最下層へとたどり着いた。下りきった階段から少しだけ廊下が続いていて、その奥には大きな扉がある。この奥にエルミナがいる。

俺達は一度だけ顔を見合わせ、そして進んだ。扉を開いたのはデイだった。重く軋む扉を押し開け一歩中に入ると、広いレンガ造りの部屋の中央にエルミナが一人佇んでいた。

後ろ姿で立ち尽くしているように見えるエルミナに俺達は無言で近づいていく。気がついてないはずはないのに、一向に振り返ろうとしないエルミナに後もう数メートルの所で俺達は足を止めた。

「レン。」

鈴を転がしたような高い声が俺を呼んだ。

「まさか来るとは思わなかった。」

振り返りもせずエルミナが言った。壁に向かって立っているエルミナの視線の先には砕けた鏡のカケラが散らばっている。それで見つかった。

ここは、あの時の場所だ。痛めつけられてなお、鎖で吊るされた場所。そしてデイと鏡越しにエルミナがデイと会話をしたあの場所。デイもそれに気づいたのか庇うように俺の前に立ちはだかる。

「・・・エルミナ・・・」

「どうして来たの？」

「・・・どうしてって・・・」

「どうして来たりしたの。」

エルミナが振り返った。その姿に俺は息を呑んだ。

エルミナはあの時見たように、顔を涙でぐしゃぐしゃにしていた。溢れる涙はとめどなく流れ落ちていく。そして、その手が。

真っ赤に染まっているのだ。ぽたぽたと地面に染みを作り続けている赤い滴はエルミナ自身の流している血だった。怪我を、しているのか。でもどうして。

「タランフィリアの。」

空気を裂くようにデイの声がその場所に響いた。

「お前のその姿が何なのか聞くつもりはない。言いたいことは一つだけだ、この戦争を終わらせる為にお前の言葉が必要だ。」

涙を流しながらエルミナが微笑んだ。

「……分かって、いるわ。カーミアの王。」

言葉つて、一体何のことだ。そう言えば俺は正確な戦争の終わり方をデイから聞いていなかった。

「デイ？」

しかし俺の呼びかけにデイは振り返らなかった。

「終わりの言葉をこの場で紡げ。」

「ちよつと待つて、デイ！一体何のこと？」

俺は慌ててデイの腕を掴み強く引いた。デイは視線だけを俺に投げかけた。その目は見たことのないくらい冷酷な。

「……デイ。」

掴んでいた手が力を失くし落ちた。逆らえない、こんなデイは知らない。

「……言葉を、言うわ。でもその前に」

エルミナは血だらけの手中に何かを持っていた。薄暗いこの場所ではそれが何なのか俺にはよく分からなくて。

「お願いがあるの。」

「この期に及んで一体何を。」

デイが腰に下げていた剣を音もなく抜いた。切っ先をエルミナに向ける。

「……私を殺してちょうだい。」

「！」

エルミナが力なく、一步俺達に近づく。

「もう、嫌なの。……もう争いたくない。本当はいつだってそう、思っていたわ。」

「戯言を。これまでの戦い全てを引き起こして来たのはお前自身だ

ろう。」

チャキ、とデイが剣を握りなおしたのか金属音がした。

「……信じてもらえないでしょうね。でも……私じゃないの。」

「エルミナ？」

「私じゃないの……だから、殺すの。」

更に一步近づいたエルミナの手の中にあるものが何なのか、やつと分かった。僅かな光が反射して見えたのだ。

血まみれの手中にあったのは砕けた鏡のカケラだった。エルミナはそれを自身の首に押し当てると声をかける間もなく一気に喉を引き裂いた。

「エルミナ！」

引き裂かれた箇所から血が迸る。鮮血がエルミナを中心に床を濡らしその範囲を広げていく。俺もデイも、呆然とそれを見ていた。何が起こっているのか、頭が理解しない。

「……エル……ミナ」

常人ならすぐにでもその場に崩れ落ちて絶命するくらいに、エルミナは自身の首を深く掻つ切った。その証に鮮血はいつまでもやまない。

「……でもね……」

エルミナは絶命していなかった。それどころか、そのまま立って話続けたのだ。あり得ない光景に俺達は言葉もない。

「自分じゃ、死ねないの。どうやって……しねないのよ。」

手の中にあつた鏡のカケラを取り落とすと、エルミナはまた涙を流した。

「私の中に……凶暴な何かがあるの。それに意識を奪われると、次に意識を取り戻した時、必ず私の前では誰かが死んでいるの。私、父も母も……弟も、この手で殺したわ。そしていくつもの国を滅ぼした。でも……私じゃあないの。」

エルミナの首筋の傷は信じられない速さで塞がり、とじた。血の

流れた跡だけが首に残されているだけだ。腕の傷も同じようにすっかり消えてしまっていた。

「……信じられないでしょう？」

「エルミナ……」

「誰も信じてくれなかった。だって、『私』がしているんだもの。違うって言ったって、嘘にしか聞こえないわよね。」

泣きながらエルミナはおかしそうに声を上げて笑った。

「お願い……レン、あなたなら私を殺せるわ。もう……辛いよ……」

争いたくもない、殺したくもない。けど、自分の中の何かがそれをする。例えばようない恐怖が心を支配した。いつそ気が狂ってしまえばまだ楽になれたのに。

エルミナは血溜まりの中に崩れ落ち蹲ると悲鳴のような泣き声を上げながら心を吐露し俺に「殺して」と血を吐き出すように言った。俺には何も言えなかった。殺してと懇願されたって俺には人は殺せない。

エルミナが嘘を言っているなんて、到底思えなかった。この姿はきつと本来のエルミナの姿なんだろう。じゃあ、一体何が彼女にそうさせているんだ。

どうやってたら、彼女が望む方法以外で救えるんだ。考えても、考えても何も思いつかない。こめかみを滴が流れ落ちた。それが雨の残滓なのか汗なのか俺には分からなかった。

「……レン……あなたは……」

エルミナの声が、苦しそうに俺を呼ぶ。俺にはかけられる言葉が見つからなかった。助けを求めているのに、どうしても言葉が出てこない。動けない。

「……わた……し……あ……」

蹲ったままのエルミナが微かに痙攣した。とたん、腐臭にも似た嫌な臭いが立ち込め始める。圧迫感と、覚えのある恐怖感がエルミナから発せられ始める。

「・・・・あ・・・・あ・・」

デイもそれを感じ取ったのか、手に持っていた剣を構えなおす。明らかな異常がエルミナに起こっていた。目に見える姿には何の異常もないのにどんとエルミナではなくなっていく、それは気のせいなんかじゃなかった。

「・・・・・・あ・・」

腐臭が部屋に充満してきた時、蹲っていたエルミナがゆっくりと顔を上げた。張り付いたような、禍々しいまでに美しい笑みを浮かべながら音もなく、彼女は優雅に立ち上がった。

第二章：第十五話

「レン、こんにちは。また会えて嬉しいわ。」

声が毒となつて耳に届く。さっきまでのエルミナじゃない。これはあの時、泉で会った時のエルミナだ。直感がそう告げていた。

「ごめんなさいね、びっくりしたでしょう？」

「・・・お前、誰・・・？」

声が喉に張り付いて上手くしゃべれない。掠れた声で俺は確認するように目の前のエルミナの姿をした人に尋ねた。

「私はエルミナよ。知っているじゃない。」

楽しげに笑うとエルミナは一步俺達に近づいてきた。それだけで圧迫感が強まる。

まるで別人だった。このエルミナはさっきまでのものとは全く違う。こんなことがあるなんて信じられなかった。だけど、同時に脳裏に浮かび上がる言葉もあった。

多重人格。

そんな病気があるのも事実ではあるけどこれはそんなレベルじゃない。これは同じ姿かたちをした別人でしかない。

俺はデイの背後で固唾を飲み込んだ。背筋を滝のような汗が流れ落ち手足が細かく震える。絶対的な恐怖を俺はこの時感じていて動くことさえ出来なかった。

「レン、下がっている。」

ピクリとも動けないでいる俺にデイが振り返らずに言うと、俺が返事を返す間もなくデイが動いた。一瞬で間合いを詰めると無防備なエルミナに一気に切りかかる。

すべてが一瞬だった。

俺は声を発する事も出来ず見つめるだけ。ほんの瞬きの間にデイの剣がエルミナの体に食い込み、振り下ろされる。エルミナの腕が飛んで遠くへと投げ出される。

どさりと物が落ちる重い音がした。

「・・・いきなり酷いわ。」

腕を切り落とされたにも関わらずエルミナはさしてそれが大事ではないような口ぶりですう言った。痛みなどまるで感じていないその様子に俺は事態を理解するのもやっとで。

「お前は・・・タランフィリアの王女ではないだろう。」

デイがエルミナの首筋に切っ先を突きつけ言った。

「ああ、私はエルミナよ。」

おかしい。目の前に居るこの人は本当に人間なんだろうか。デイもそんな風に思っているんじゃないだろうか。だって、切り落とされた腕から血の一滴も溢れてこないのだ。エルミナの腕は肩から切り落とされていて、常人なら出血多量か腕を落とされたショックで死んでしまっているだろう大怪我のはずなのに。

「お前からはもう腐臭しかない。正体を現したらどうだ。」

片腕になったエルミナはデイの追求に知らぬ顔をするだけだった。俺の位置からはデイの表情はうかがい知れない。けどその背から怒りが伝わってくる。

俺に「殺して」と言ったエルミナは間違ってもあのエルミナとは違う人間だ。この腐臭を発するこの目の前にいる人間は一体何なんだろう。腕を切り落とされても痛みにも顔すら歪めない、まるで生きている人間じゃないみたいだ。

目の前では変わらず二人がにらみ合っている。エルミナは涼しげな顔をしているけど、そう言えばどうして攻撃を仕掛けてこないんだ。あんなに呆気なく腕を落とさせるなんて。

「答える、お前は一体何だ。」

「・・・うるさいわね・・・」

苛立ちをはらんだ声、明らかにエルミナは以前とは様子が違っていた。自らの意思で動けないようにも見える。デイには剣の切っ先を突きつけられているだけだ、避けようと思えば出来るはずなのに、俺になら自分を殺せるとエルミナは言っていた。俺でなければな

らないのならその理由はなんだろう、最後にエルミナが言いかけていた言葉は一体なんだったんだろう。

俺は、徐々に自分の手足の震えがなくなっていくのが分かった。さつきまであんなに感じていた恐怖も薄れ始めている。目の前にいるエルミナに恐怖を感じなくなり始めていた。

「……エルミナ。」

目を凝らし俺はエルミナを見つめ名前を呼んだ。俺の声に二人がハッと俺に振り返る。俺はゆっくりと二人に向かって歩を進めた。固い決意を胸に秘め。

「エルミナ……応えて。」

「……レン、何を……」

デイの困惑した声を俺はこの時あえて聞き流し、足を止めずどんどんと近づきそして二人のすぐ側で立ち止まる。

「どうして欲しい？」

エルミナの目を覗き込むように俺は真っ直ぐにエメラルドグリーン奥を見つめた。綺麗な目の奥に淀み腐敗した何かが見える。俺は確信した、今この意識はエルミナじゃない。

「エルミナ、聞こえてるんだろ。応えて。」

「……一体何を言っている。」

口調が一変した鈴を転がした声。

「お前に聞いているんじゃないだよ。」

嫌悪感に語調がきつくなる自分がいた。そんな俺を見てエルミナが不愉快げに眉を吊り上げる。

「ガキが……」

残された腕が俺に向かって叩きつけられようとするのを、デイが寸前で掴み止めた。エルミナの表情が醜く歪む。

「エルミナ……俺に、どうして欲しい？」

俺はエルミナの意識に語りかけた。目の前でどんどんと醜悪な顔になっていくもう一人のエルミナなんて気にもせず、手を伸ばし頬に触れた。

エルミナが短く悲鳴を上げたかと思うとがくがくと痙攣を起こす。それは短い時間だった。再び顔を上げた時、エルミナの表情は憑き物が落ちたように晴れやかだった。

部屋に充満していた腐臭が消えてなくなる。

「・・・レン・・・」

微笑を浮かべるエルミナの肩の切断面からせき止められていた血が溢れ始める。

「私を・・・、殺して。今なら・・・」

「・・・それで、本当に・・・いいのか？」

「・・・もう、だれも・・・傷つけないで済むの・・・」

「分かった・・・叶えるよ。」

俺はデイの腰にある短剣を抜き取るとエルミナの体を抱きしめた。エルミナの中に居るものが一体何なのか分からない。けど、こうしないとエルミナは苦しみ続けるだけだ。俺は齒を食いしばった。殺すのならばそれは本当ならエルミナの中にいる何者かなのに。

「・・・カーミアの、王。」

「・・・ああ。」

エルミナの呼びかけにデイが短く答える。

「・・・ごめんなさい。今・・・」

エルミナの残された手が俺の背を越えてデイに差し伸ばされる。

「我は・・・タランフィリアが王女、エルミナ・デュバン。ここに我が敗北を・・・認める・・・」

全てを終わらせる言葉をエルミナが紡ぎ、デイは無言を返事とした。

どこからこんな風になってしまったんだろう。こんなことがないままエルミナと出会っていればもっと違った形になっていたはずなのに。

俺は涙が止められなかった。どうしてエルミナが死ななければいけないのか分からない。それ以外に何か方法があれば絶対にそっちを取るのに。

「レン・・・ごめんなさい・・・」

デイに向かつて伸ばされていた手がそのまま俺の背に回り弱々しい力で抱きしめられた。

「・・・エルミナ・・・」

そんな風に謝らないでよ。俺の方がもっと酷いことをするのに。ただどこの戦いは俺が引き起こしたものだから、自分だけ逃げる訳にはいかなかった。エルミナは自身の責任をきちんと果たしたのだから。

震える手で短剣の切っ先をエルミナの背中の中に当て、俺は泣きながらその背に刃を突き立てた。微笑を浮かべながら声もなくエルミナは俺の腕の中で崩れ落ちていった。

手に伝わった感触を、俺は一生忘れない。こんな嫌な感触、もう二度と味わいたくなんてなかった。

「レン・・・」

本当にこんな結末しかなかったのか。俺は崩れ落ちたエルミナを抱きしめながら泣いていた。そんな俺を労わるようにデイが包み込んでくる。

「・・・デイ・・・俺・・・」

「何も言わなくていい。」

戦争は終わった。俺の中に抜けない棘を残したまま。

「・・・なんでこんなことになっちゃったんだろう。」

腕の中のエルミナは眠っているかのように穏やかな顔をしていた。この人の命を終わらせたのは俺だ。それだけは変えようのない事実だ。

俺は自分の守りたいものを守った。その為に必要なことがこれだったのなら、この言いようのない後悔は一体どうすればいい。

「・・・デイ、守るって・・・何？」

こんなにも重たいものだなんて思ってもみなかった。

「・・・レン・・・」

頭を引き寄せられ俺はデイの胸に額を押し当てた。涙は後から後

から溢れ、止まらない。

「何かを守るためには、何かを犠牲にしなければならない。」

デイのその一言は俺の深い所に響いた。今までデイはどれだけのものを犠牲にして何を守ってきたんだろう。俺なんかきつと比べられないくらいたくさん辛い思いをしてきたはずなのに、どうしてこんな風に強く言えるんだろう。

「誰もがそうして生きているんだ。」

聞き覚えのある言葉に俺は焦点が合わないままデイを仰いだ。この眼差しを向けられたことが以前ある。あの時は、視線の先にライカが居た。

どうして同じことを二人が言うんだろう。

デイとライカには何か途切れない繋がりがあるのかな。

「・・・そう、だよね・・・。ライカにも・・・同じこと、言われたんだ。」

自分の守りたいものの全てを守りたいなんて、どれだけ願ったって出来ない。その言葉の意味を俺は痛感していた。エルミナを救えなかったことでやっと知った。

不思議だった。俺はエルミナとともに会話もしたことがなくて、あったことと言えば酷く痛めつけられたことだけ。恨みこそすれ、こんな風にその相手を想うなんておかしいのに。

どうしても憎みきれないものがエルミナにはあった。

「・・・エルミナ、ごめんな。」

こんな風にしか出来なくて、ごめん。俺は色を失ったエルミナの頬に指で触れた。もう温もりもほとんどない白い肌は陶器みたいだった。

この人は死んだ、俺が殺して奪った。彼女の望みだったとしても、刻まれた罪はもう消せない。俺は人をこの手で殺してしまった。

「レン、自分を責めるな。これしか方法はなかった・・・、っ？」

最初に異変に気がついたのはデイだった。デイは不意に俺を抱きしめている腕に力を込めるとすばやく辺りを見回した。

「デイ？」

デイは無言のまま辺りを伺い続ける。どうかしたのだろうか、と俺も部屋を見回してみるけど何も起こっていない。

「……どうかしたの？」

「気づかないか？……この臭いは……」

言われて俺は鼻を鳴らし、微かに漂う臭いを拾って俺は全身を固くした。愕然とするしかなかった。この臭いはかつてエルミナから発せられていたあの臭いだった。

俺は恐る恐る腕の中のエルミナに視線を落とす。相変わらずエルミナは眠るように息絶えた姿でそこにいた。でもどんとあの腐臭が強くなってきた。

「……どうして……？」

エルミナが死んでもう二度とあの臭いが発せられるはずはないのに、だってあれはエルミナの中にいた奴が放っていたものなのだから。

エルミナが死んでしまった今、この臭いが存在するはずがない。

「器の死は私の死ではないからだよ、ルティシア。」

「……つ、……誰だ！」

部屋に反響した低い男の声はまるで聞き覚えのないものだった。

どこから発せられた声か分からないその声にデイが鋭く声をあげる。「想定外だったよ。まさかお前がこの女に会いに来るとは思ってもしなかった、あれだけ痛めつけてやったというのに。」

異変は俺の腕の中で起こっていた。エルミナの体が俺の腕の中でぐずぐずと崩れ落ちたかと思うとヘド口のようなものに成り果てたのだ。俺は呆然とそれを見ているだけしか出来ない。

何が起きているのか分からなかった。

「可愛いルティシア、恐怖を乗り越えここまできた褒美に今日は見逃してあげよう。」

元はエルミナだったそのどす黒いヘドロのようなものが波うち、意志を持って俺から離れていきながら言葉を発する。そしてそれは一気に膨れ上がると形を形成し始める。

「全く、傀儡の分際で私を押さえ込もうとするなどとは愚かな女だ。」

「・・・おんな？」

「お前たちはエルミナと呼んでいただろう？」

ヘドロは少しずつ人の形になっていった。

「使えない女だったがおかげでお前がこの世界にいたことが分かったから、まあクズにしては役に立ったのかもしれないな。」

腐臭がどんどん濃くなっていく。エルミナの中にあつたものの正体がこれであることはもう明白だった。

「お前・・・何？」

そう訊ねたのは目の前の出来事が理解出来ない人間なら当たり前に聞くことだった。俺は今の事態を上手く飲み込めずにいた。

「忘れたのか？・・・まあ、それもそうだろう。あれから随分と長い時間が過ぎた。」

形を成し終えたそれは、見たことのない男の姿をしていた。褐色の肌、黒い髪と瞳。圧倒的な存在感を放ち、男はそこに立っていた。ヘドロが男に変貌したあり得ない光景に俺は無意識にデイに縋り付いていた。

「最期の力で私を道連れにしようとしたのだろうが所詮は無力、似合いの末期だったな。」

「・・・何だと？」

エルミナへの暴言に俺は怒りが抑えられず声を荒げるが、男は気にした様子も見せず俺を見て微笑みかけてくるだけだった。

「ルティシア、もうすぐだ。それまで待っている。」

男は真っ直ぐに俺を見てそう言ってきた。さっきから男は変な名

前で俺を呼んでくるけどその名に心当たりなんてもちろんない俺は、怒りと同時に困惑も覚えていた。

俺を見ながら何度もその名で呼んでくる。誰かと勘違いをしている訳ではなさそうだったけれど、確認はしたくなかった。必要以上に男に関わりあいたくない気持ちが大きかったのだ。どうしてそう思ってしまうのかも分からず、俺はひたすら困惑するばかりで。

ルティシア、なんて。

間違っても俺の名前なんかじゃないのに、この男はどうしてその名で俺を呼ぶんだろう。

俺に返事は求めていなかったのか、男は言い切ると笑みを浮かべたまま一歩後ろに下がる。次を取る行動が予測できず、俺は男を見守るだけしか出来ないまま。

「必ずお前を迎えにくぞ、ルティシア。」

男が手を壁に向かってかざすと一呼吸を置いて、壁が砕け散った。あの泉で見たエルミナの力と同じものだった。じゃあ、あの時もこいつが？

「・・・お前、誰なんだよ！どうしてエルミナを・・・」

立ち去ろうとしている男の背に俺は身を乗り出し吼えた。男の目的が分からない、知らないままにいることは躊躇われた。

「現世で行動を取るには私の力はまだ足りなかったのな、あの女を傀儡にして力を吸収させてもらった。ちょうど器を探していた時にあの女が力を求めていたから、力を与えてやると言ってやったら一も二もなく私を受け入れたぞ。馬鹿な女だ、自分すらも取り込まれるとも知らず。」

男の言葉に俺は怒りが込み上げてくるのを感じていた。そんな理由で人一人を殺したつてのか。おまけにそれを平然と言つてのけることが怒りに拍車をかける。

「だが、完全ではないにしろ私は戻ってきた。そしてルティシア、お前と共にこの世界を取り戻す。」

「・・・え？」

「私はお前の対となるもの、そしてお前の半身。」

男の言葉に俺の頭は真っ白になった。何かを思い出しかけ、俺は男を見つめた。

それを打ち消したのはデイだった。

「貴様は何者だ。」

男はデイの問いかけに眉を跳ね上げ明らかに不愉快そうな表情を浮かべる。

「……この世界のたかが一国の王ごときが私の名を尋ねるとはな

」

「貴様に払う敬意などない。」

「……言ってくれる。」

「一体何が目的だ。」

デイは犬歯をむき出しにし、今にも男に襲いかかりそうな勢いだった。俺は男とデイを交互に見やるだけしか出来ない。

「ルティシアに免じて今回だけは答えてやろう。私はこの世界に君臨する者、我が名はヤソロジフス。」

「……何、だと……？」

「……デイ、知ってるのか？」

男が名乗った名前にデイは心当たりがあるのか明らかに顔色が変わり動揺をする。俺の肩を抱きしめる手に力が入りギシギシと骨が音を立てる。

「……ドイツ！……い、た……」

「……あ、……すまない……レン……」

パツと手を離され俺は自分の肩に手を当てた。デイはそれでもなお混乱がありありと伝わってくる表情で男を見たまま動こうとしな

い。

「全ての用意が整った暁には、ルティシア。お前を迎えに行こう。」
ヤソロジフスと名乗ったその男はそれ以降デイには目もくれず俺に向かつてそう言い放つと、自身が空けた壁の穴に近づき身を躍らせた。

あまりの展開に俺は呆然とするばかりだった。ヤソロジフスの姿が消えても俺は動くことも出来なくて、デイの腕の中に居るだけ。

今、あの男が言った言葉の意味を理解しろと言われた所でそう易々と飲み込めるはずも無かった。ヤソロジフスは俺のことをルティシアと呼び、自身の半身だと言っていた。俺はそれをどう受け止めればいいんだろう。だって俺はこの世界とは全く関係のない場所で生まれた。この世界の存在だってつい最近知ったばかりで今以上の係わり合いなんてあるはずがないのに、男の言葉は俺が深くこの世界に関わっているような口ぶりだった。

「あの男が・・・ヤソロジフスだと・・・？」

沈黙を破りデイが掠れた声で言った。デイはあの男のことを知っているんだ。

「デイ・・・さっきの人、何？」

けれど、デイは答えてはくれなかった。厳しい目で男が姿を消した壁の穴の向こう側を睨みつけながら、俺を抱く肩にグツと力を込める。

「・・・・・・・・レン、帰ろう。」

俺の問いに最後まで答えないままデイは俺の手を取りながら立ち上がった。吹き込んでくる風にデイのマントがなびく。立ち上がった俺はデイに肩を抱かれながらヤソロジフスが飛び降りた穴に近づいた。

遙か足元には城が広がり、タランフィリアの兵士達が慌しく動いていた。こんなに高い場所に俺達は居たんだ。ここへ来る時にあんなに階段を下りてきたのに。

あるはずのない世界へと招き入れられていたのだろうか。

「・・・・・・・・戻って、戦争の終結を宣言しよう、レン。」

「・・・・・・・・うん。」

何も終わってはいない。もしかしたらこの戦争はこれから起こるべきことのほんの前章でしかないのかもしれない。そんな予感を覚えながら俺はデイに連れられ、戦場へと戻っていった。

第二章：第十六話

カーミアとタランフィリアの戦争はタランフィリアの敗北宣言によつて終結した。撤退していく兵士達の中に俺は見覚えのある人物を目にした。デイの返事を受け取りに来たあの兵士だ。

彼は固い表情で俺達の前に来るとエルミナの所在を尋ねてきた。エルミナの異変を彼は知っていたようで、デイがエルミナの死を告げると彼は絶句し絶望に肩を落とした。

かけるべき言葉なんてあるはずもなく、俺はその様子を見ているだけしか出来なかった。

「カーミアの王よ・・・王女は・・・もしかして・・・」

再び顔を上げた時の彼の目には涙が滲んでいた。

「王女は私が殺した。戦争を終わらせる為にはやむをえなかった。」

「カーミアの・・・」

「遺体はないが、せめて盛大に送ってやって欲しい。」

デイは事実を何一つ彼に告げようとはしなかった。エルミナを殺したのは俺で、エルミナは操られていただけで、エルミナを操っていたのはヤソロジフスという名の男で、これから恐らく何かが起こってしまうであろうことを。何一つ言おうとはしなかった。

「名を聞こう。」

デイはタランフィリアの兵士にそう尋ねた。兵士は涙の溜まった目をもう一度固く閉じ、次に目を開いた時には真っ直ぐにデイに眼差しを向けた。

「・・・タランフィリアが宰相、イエール・ジェミニ。」

「そうか、イエール。どうかエルミナ亡きタランフィリアを守り立て直して欲しい。」

「・・・御意。」

イエールは深々と頭を下げると踵を返し自軍へと戻っていった。残された俺達はイエールの姿が見えなくなるまでその背を見続け

た。

「・・・王。」

ナジエイルの涼しい声が俺の耳に届いた。振り返るとどこか憂いを帯びた表情をしたナジエイルがそれでも凜とした姿で立っていた。「レン殿も、お疲れでしょうからどうぞ城へお戻り下さい。」

その様子からナジエイルにはデイが言った言葉が全てではないのだと分かっているのかもしれない。俺は小さく頷き側にあった椅子に腰を落とした。

疲労が一気に噴出してきたみたいに体が重かった。それ以上に心が。

俺は膝の上で自分の両手を何度も握り締めた。ヤソロジフスが現れたことで忘れかけていたエルミナの死と、自分のしたことを思い出したのだ。

汚れなんてない手の平が真っ赤に染まっているような気がして、怖かった。

「・・・レン・・・」

デイがいつの間にか俺の前に立っていて、優しい眼差しで俺を見下ろしていた。デイは全部が自分の責みたいに言っただけ、事実は違うのだと俺は十分に承知していた。

エルミナを殺したのは俺であって、デイじゃない。

「・・・デイ、俺・・・」

そしてこれからきつとまた何かが起こる。終わったこの戦争は俺が招いたもの、これから起こるだろう未来に待ち構えていることもたぶん俺が引き金になる。

漠然としたものではあったけれど、この予感当たってしまうはずだ。

「・・・ここに来ない方が良かったのかな。」

この世界が狂い始めたのは俺がここへ来てから。世界樹を生み出す為に必要だったのかもしれないけど俺にはもうそうは思えなかった。

深い悔恨がいつまでも俺の中から消えなくて、それどころかどんどんと大きくなっていった。しまい俺は耐え切れず涙を落とした。

「レン、それは違う……違うんだ。」

「だけど……」

「レンを巻き込んでしまった、俺の責だ。だから……頼むからそんな風には思わないでくれ。」

デイは俺の前に跪くと膝の上にあつた俺の手を握った。大きな温かい手、俺はそれを握り返すことがどうしても出来なかった。

「……違うないよ……」

結局、守ると言っておきながら俺は何もしなかったし反対に守られてばかりだったじゃないか。俺は何もしていない、何もやってない。

「……違わないんだ、デイ……」

現実があまりにも重過ぎて潰れてしまいそうだった。

守りたいだけなのに、どうすればいいのかすらもう分からない。

無力すぎる自分が嫌でたまらなかった。

「……俺が弱いから、何も守れないんだ。」

強くなりたい。

全部、大事なものを守れるように。

「レン。」

「……強くなりたいよ……デイ……」

止められない涙がいくつも落ち視界を揺らめかせる。デイの銀髪が、俺の好きな灰色の瞳がぼやけて見えない。頬をデイの両手で覆われて真っ直ぐに自分の顔に向かせるようにさせられると、どんどんデイの顔が近づいてきた。そっと触れるだけの口付けをされ唇はすぐに離れていった。

「……デイ？」

「泣かないでくれ……」

デイの顔が泣き出しそうに歪められていた。俺だけじゃない、デイも苦しんでいる。

「・・・デイ・・・」

またこんな顔をデイにさせてしまった。あんなに強いデイにこんな顔をさせて、デイを苦しめているのも俺だ。

「そんな顔、しないでよ。」

俺は泣きながら無理やり笑みを浮かべた。俺にはまだ何も出来ない、けれどまだ何も終わっていないから。

待ち受けているだろう未来は想像なんてこれっぽっちもつかないけど、きつと俺が思う以上に辛い困難が待ち受けている。あの男が現れて、それだけは想像が出来た。

強くないと駄目だ。こんな顔をデイにさせているようじゃ、駄目なんだ。

「こんな、すぐへこたれてたんじゃ駄目なんだよな。」

「・・・レン・・・」

「俺、負けないように・・・がんばる、から・・・」

いつか全てを守るくらい強くなってみせるから。

「・・・だからごめん、今だけ・・・」

二度と抜けない棘が刺さった心にじくじくとした痛みを広げ続けている。失ってしまったらもう絶対に取り戻せない、人の命は。奪われた命はもう取り返せない。

こんな後悔をもう二度と覚えたくない。知りたくもない。

失くしたくないよ、もう二度と。だから、これからはもっと頑張っ
って強くなっ
て守るから。

あともう少しだけ、泣かせて欲しいんだ。

「・・・レン・・・」

デイの肩に顔を埋めると背に腕が回された。力強く温かい腕が俺の全てを包み込む。

声もあげずに泣き続ける俺を、泣き止むまでデイはずっとそうし
続けてくれた。

つい先日まで戦争をしていたとは思えないくらい穏やかな日々が過ぎていた。あれから三日、俺はぼんやりと時間を過ごしていた。何も考えなくなかったのだ。

「レン殿。」

窓辺の椅子に腰掛け外を眺めていた俺の背後からナジエイルの声がかかけられ振り返る。

「ナジエイル、どうかした？」

「食事をお持ちしました。」

「……ありがとう。」

俺は立ち上がるとナジエイルの側に近づいた。豪華な台車に乗せられていたのはこれまでとは違う質素な料理だ。

「……これなら、召し上がっていただけますか。」

テーブルに音を立てながら皿を並べ、ナジエイルは辛そうな声で言う。それには理由があった。俺が、あの日からともに食事を取っていないからだった。

「……うん……」

運ばれてきた料理は俺の世界で言うところのお粥みたいなもので、俺はいつものように「いただきます」と手を合わせてから皿にスプーンを入れてすくった。一口だけ口に入れて、何とか飲み込む。病気をしているにも食欲だけはいつもあったのに今はその一口だけお腹がいっぱいになったような気がしてしまう。

俺はスプーンから手を放した。

「……レン殿……」

「ごめん、お腹がいっぱい。」

「一口しか召し上がっておられませんよ。」

「そう、なんだけど……」

どうしてもそれ以上口をつけることが出来ない。食べたいとすら思えないなんて。

「夜もあまり眠っておられないと王から聞いております。このまま

では。」

俺はナジエイルを見上げた。心配そうな顔をしているナジエイルに俺は申し訳なさで身を小さくしてしまった。

眠れていないのも事実だった。寝れば夢を見る、それは大概が悪夢で俺は悲鳴を上げその声でいつも目を覚ましてしまっていた。それからは全然眠れない。

鏡なんて一度も見えてないけど、隈が出来ているのに間違いはないだろうな。

「何でかな、元気なんだけど・・・」

「この状態が元気であるはずなどないでしょう。」

呆れ口調でナジエイルが言って、そして俺の前の席に腰を落とした。戦争が終わって事後処理や各国とのやり取りで忙しいデイに変わって、ナジエイルが俺の話し相手をしてくれていた。ナジエイルだってきつと忙しいはずなのに。

「・・・お心は、晴れませんか。」

戦争最後の日、何が起ったのかナジエイルは知っていた。デイから全てを聞いたと、その翌日俺に言ってきたのだ。

「・・・眠るとあの日のことを夢に見るんだ。」

何度でも繰り返される悪夢。俺は夢の中で何度もエルミナを殺し、その体が崩れ落ちる様を突きつけられていた。

「他に何か方法があったんじゃないかって、今でも思う。俺、エルミナがそうして欲しいって言ったからそうするのがいいんだって思ってたけど・・・もつと他に・・・」

そう思ってはみても死を願う苦しみから救う方法なんて、俺には分らない。

俺は今まで自分がどれほど恵まれた環境に居たのか、あの戦争を通り過ぎて知った。

「生きていれば、他に何かあったのかもしれないのに。」

永遠に生きる道筋を奪ってしまった。たとえ相手が望んでいたって、それは間違っていたんじゃないかって、そればかりを考えてしまっ

でも他に方法なんて思いつかない。俺の生きてきた世界とこの世界はあまりにも違うからどれが正しいのかわからない。

「ご自分を責めないで下さい。仕方のないこともあるのです。」

「……人を殺すことも？」

「……そうなのかも、しれません。」

いつそなじられたら楽だった。人殺しと罵られて責め立てられたらこんな真綿で首を絞められるような苦しみはなかったのかもしれない。

誰もそれをしてくれないから、俺は自分で自分を責め続けるしかなかった。

「何も守れなかったね、俺。」

「……レン殿……」

「初めてナジエイルに会った日、俺……あんな偉そうに守るって言ったのに。」

「……あれは……」

「ごめん。」

ナジエイルは返事をしなかった。酷く傷ついた顔をして、何も言わないまま立ち上がると食器も台車も持たないまま飛び出すように部屋から出て行ってしまった。開いたままの扉が音を立てながら揺れていた。

その向こう側に無機質な廊下があった。俺はぼんやりとしながら立ち上がり扉の前に立つと扉を大きく開いた。窓なんてどこも開いてないはずなのに風が舞い込み着ている寝巻きの裾をなびかせる。

涙が零れ落ちた。

俺はそのままふらふらと歩き出した。いつもは人がたくさんいる

のに誰ともすれ違わないまま城の外に出ると俺は真っ直ぐに怪鳥のいる小屋に向かう。たどり着くとそこにも誰もいない。いつも小屋を見ている男の姿はどこにもなかった。

俺は小屋の中に入ると一番手前にいた怪鳥の前で立ち止まった。

「なあ・・・ちよつと、いいかな。」

手を差し伸べると怪鳥は首を伸ばし俺の手の平に頭を擦り付けてくる。馬ほどもある頭を抱き寄せ「世界樹まで連れて行ってくれるか？」そう囁くと怪鳥は分かったとでも言いたげに一つ、鳴いた。

手綱もつけないまま小屋の外に一羽を連れ出しそのまま乗り込むと、怪鳥はいつもより穏やかに羽ばたき飛び上がった。

俺が振り落とされないようにする為か、怪鳥の飛ぶ速度はいつもよりかなりゆっくりとしている。それが気持ち良くて、俺は体中に感じる風を目を閉じて受け入れていた。風を切って飛んでいるはずなのに体中に風がまとわりついてくる。包み込んでくれていると言った方が正しいのか。

そしていつもよりかなり時間をかけて俺は世界樹の元へと向かった。

たどり着くとそこはあの時と同じまま、世界樹がそびえ立っていた。まるで喜ぶかのように世界樹が葉を鳴らすのを聞いて、怪鳥から降りた俺はゆっくりと世界樹の元へと歩み寄ると太い幹に抱きついた。

世界樹があつて、風が肌に触れて、柔らかな日差しに照らされて。それだけで心が軽くなるようだった。ここに居たら何も考えなくて済む、辛いことを忘れられた。俺はしばらくの間ただ世界樹に触れながら無心になった。

急に強い風が吹いて世界樹の葉が大きな音を立てる。まるで心配して子供をあやしているようにも思えて俺は「大丈夫だよ」と小さく呟いた。

顔を上げて見上げた世界樹は俺が生み出したなんて思えないくらい力強く俺の前に在って、少しでいいから強さを分けて欲しいなん

て思ってしまった。

そのまま幹に背をつけると崩れるようにして俺はその場に座り込んだ。木の根の間にすっぽり収まる場所を見つけて、椅子に座るようにして俺は空を見上げた。

青空が果てしなく広がっている。

こんなに穏やかな気分になったのはあれから初めてかもしれない、ぼんやりと空を見上げながら俺はそんなことを思っていた。

気持ちいい。

目を閉じると心地良さに負け、俺はそのまま寝入ってしまった。

第二章：最終話

夢も見ず、眠れたのはあれから初めてのことだった。少しずつ、水面下から引き上げられるように眠りから覚めた俺は瞬きを繰り返した。ふと太ももに重みを感じてそこを見ると見たことのない小動物が俺の膝の上でまどろんでいた。尻尾の短い猫みたいだ。

俺はそつと白い毛並みに触れるとそいつは小さな鳴き声をあげた。すると肩から鳥の鳴き声がする。見ると肩には鳥が留まっていた。

辺りを見渡すと俺の周りには小動物が何匹も居て、各々が好きな場所で羽を休め、寝ていた。

「……あは。」

その光景について笑ってしまった。もう片方の手を伸ばそうとして、何かに掴まれているのによやく気づいた。

「目が覚めたか？」

右側から聞きなれた低い声が聞こえた。

「……デイ、どうして……」

リラックスした表情のデイが俺の隣に座っていたのだ。何でここにデイが居るのか不思議で俺はそんな間抜けな返事をしてしまっていた。

「城に戻ったらレンがいないと騒ぎになっていてな。きっと、ここだろうと思ったんだ。」

「あ……」

そうか。俺、また何も言わずに出てきたから。

「……ごめん。」

勝手に出かけるとんでもない目にいつも遭っていたのにまたやってしまった。俯くとデイが「いいんだ」と笑った。

「あんまりにも気持ち良さそうに寝ているから起こせなかった。」

「……デイ。」

「よく、眠れたか？」

デイの手が解かれそのまま頬を撫でてきた。俺が眠れずにいることを一番心配していたのはデイだったから、安心していうようだった。

「うん……寝ちゃった。」

「……それなら、いい。」

デイは優しい眼差しで俺に微笑みかけると手を頬から放した。そのまま俺に手を差し伸べてくる。きょとんとその手を見ていると「こっちへ」と声をかけられ、俺は動物を抱いたまま這ってデイに近づいた。デイの胸に背を預けると腕の下からデイの手が回り抱き寄せられる。

「レン……辛いかな？」

何がとは言わなかったけど、俺にはデイが何を聞きたいのかすぐに分かった。

「……そう、なのかも……しれない。」

「ならば、元の世界へ戻るか？」

デイの言葉を俺は冷静に受け止めた。言われて、そう言えば一度も元の世界に戻りたいなんて考えもしなかった自分に気がついた。

「……デイは、戻った方がいいと思ってる？」

「レンが辛いのであれば、帰してやりたいと思った。」

俺はデイの手に自分の手を重ねた。

「辛いんだろう？」

「……辛いよ。でも……逃げたくないんだ。」

まだ何も終わってない、始まってもない。それなのに全部をデイに押し付けて一人逃げるなんてしたくない。

「逃げではないだろう。元々レンは巻き込まれたただけ、責任を感じる必要はない。」

「……巻き込まれたんだとしても、もう俺は十分すぎるくらいに関わってるから。知らないふりなんて出来ないよ。」

帰ったら楽になるのかもしれない。だけど、どうしてもそれだけ

はしたくなかった。それ以上に、

「それに戻ったらデイと離れ離れになるだろ？」

デイと離れていたあの日々を繰り返すなんて嫌だった。

「デイと離れるくらいなら、辛いのがまだいいよ。」

もう二度とここへは戻って来れないかもしれない。そうしたらデイとは二度と会えない。

そんな風に生きていくくらいだったら、辛くても今が良かった。

「……本当なら……」

デイは酷く言いづらそうに何かを言いかけていて、俺はそれを待った。

「レンに戻るように、言わないといけないのだろうが、俺にはもうそれは出来ない。」

「……うん。」

「これから先は、恐らくもつと辛いことが待っているはずだ。分かっているのに俺は、レンを手放してやれない。」

「……うん。」

「……すまない、レン。もう……」

「いいよ。むしろ離される方が嫌だよ。そんなこと、ずっと考えてたの？」

見えない位置でむくれるとデイは俺の肩に顔を埋めてきた。

「レンを愛してる。この胸にあるのはそれだけだ。」

胸が締め付けられる。俺がデイを想うのと同じにデイも俺を想ってくれている。その人に巡り合える奇跡なんて俺は今まで知らなかった。

俺は背をデイに抱かれながら空を見上げた。あんなに青かった空はすっかり夕日に染まって赤くなっている。

「・・・離さないでよ・・・デイ。ずっと。」

唯一無二。俺の半身。かけがえのない人。そんな言葉では片付けられないくらい、どうしようもなく俺にはもうデイが必要で。

離れるくらいなら死んだ方がましだ。

「頼まれても、もう離さない。」

いつの間にか側に居た動物たちは姿を消していた。その場に俺とデイの二人きり。俺はデイの腕を解くと振り返ってデイの首に腕を回した。

「約束だからな。」

「・・・ああ、約束だ。」

そつとデイの唇に自分のそれを重ね合わせた。触れるだけだった口付けは次第に深く重なって、薄く口を開くとデイの舌が入り込んできた。交ざりあって溶け合って、一つになれたらいいのに。

「・・・ん・・・は、あ・・・デイ・・・」

「レン・・・」

俺達は飽きることなく、ずっと唇を合わせあった。深く、浅く。名前を呼び合いながら。

たったそれだけで体中を満たす幸福感に酔いながら、俺は強くデイと抱き合った。

見知った感覚に襲われたのはそんな時。

「・・・え・・・」

二つの世界を移動する時に感じる浮遊感が突然、俺を襲った。

「な・・・んで・・・」

背筋が冷たくなった。そんな、どうして。

「デイッ・・・」

必死にデイの体にしがみつくとデイは異変を感じ取ったのか離す

まいと俺を強く腕に抱いた。

「やだっ、帰りたくない！」

「・・・レン、離すな！」

どうしようもない強い力が俺を連れて行こうとする。俺はそれに必死で抗った。今戻る訳にはいけないんだ、デイを一人になんてしたくないんだ。

俺は固く目を瞑ったままデイにしがみついて離そうとしなかった。けれどどうしようもない浮遊感に、連れ去られるように。

俺は何度も経験した浮遊感に捕まってしまった。

強烈なその感覚が少しずつ弱まりついには過ぎ去ると、俺は恐る恐る目を開けた。初めにしたのはデイの姿を捜すことだった。

体を起こそうとして、手を握り締められている感触にそっちへ目をやるとデイがそこに横たわっていた。

「デイ！」

慌てて側に這い寄り揺り動かすと短く呻き声を発し、デイが薄っすらと目を開いた。

「デイ、良かった。」

「・・・レン・・・」

デイがここにいると言う事は、俺は戻らなくて済んだのだろうか。デイの手を放さないまま辺りを見回すとそこは明らかに世界樹のふもとではなかった。けれど見知った風景。

俺は目を疑った。

「・・・ここ・・・俺の世界だ。」

目の前にあるのはデイの世界のものよりも遥かに小さいけれど、俺が植えた世界樹。

「レンの？」

「・・・う、ん・・・間違いないと、思う。」

こんなことがあるのだろうか。俺が移動するのはわかる、何度も移動してきたし戻るべきは俺なのだから。でもデイがこの世界に来れるなんて思ってもいなかった。

「・・・一体、どういうこと？」

呆然としながら俺は呟くだけしか出来なかった。

第二章：最終話（後書き）

第二章の終わりになります。読んで頂きありがとうございました。引き続き第三章もアップして行きたいと思います。どうぞよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5263u/>

Eternal Love 2

2011年7月18日00時14分発行